

覚書…津阪東陽とその交友(三)

——同郷の先輩から女弟子まで——

二宮俊博

要旨 本稿は江戸時代を代表する詩話の一つ『夜航詩話』等の著で知られる伊勢津藩の儒者、津阪東陽（宝暦七年「一七五七」～文政八年「一八二五」）の交友について、安永・天明期の京都や文化十一年・十二年の江戸でのそれに引き続き、前々稿や前稿で書き漏らした人物を取り上げ、具体的に東陽の詩を読み解きながら、そのありようを垣間見たものである。今回は、東陽の先輩にあたる菰野の久保三水、『東西遊記』の著で知られる久居出身の橋南谿、京洛の儒者猪飼敬所や尾張の岡田新川それに画人として大原雲卿・岡田米山人などを補い、さらに附考として先人追慕の作として藤原惺窩の墓を展じ藤樹書院を訪ねた詩などを取り上げ、東陽の『古詩大観』上下二巻の校正ならびに刊行に尽力した女弟子富岡吟松を紹介した。

キーワード 津阪東陽、儒者・文人・画人・女弟子

はじめに

津阪東陽の、津藩出仕以前の遊学時代すなわち安永・天明期の京都および津藩儒として出府した文化十一年・十二年の江戸での交友については、すでに「覚書…津阪東陽とその交友(一)」「安永・天明期の京都」(以下、「安永・天明期の京都」)ならびに「覚書…津阪東陽とその交友(二)」「文化十一年・十二年の江戸」(以下、「文化十一年・十二年の江戸」)において、国立国会図書館蔵の写本『東陽先生詩文集』(以下、『東陽先生文集』を『文集』、『東陽先生詩鈔』を『詩鈔』と略記)を繙き、関係する詩文を読み解くことによつて、これを具体的に見て来た。安永・天明期の在京時代には詩友として、小栗明卿・太田玩鷗・巖垣龍溪・清田龍川・伊藤嶺・大江玄圃・永田觀鷗・端文仲などと交際し、經流の六如・大典それに儒者として那波魯堂・皆川淇園・頼春水・古賀精里ほかとも面識を得、詩を贈っている。一方、文化十一年・十二年の江戸においては竹馬の友で昌平黌に学び桑名藩儒となつた平井澹所との再会があり、江湖詩社の市河寛斎・柏木如亭・

大窪詩仏・菊池五山はじめ通人として名高い大田南畝や市井の儒者として人気を博した亀田鵬斎それに折から江戸に來合わせた菅茶山などと顔を合わせる機会を得た。

本稿では、そこに書き漏らした儒者・文人や画人、具体的には東陽の先輩にあたる菰野の久保三水、『東西遊記』の著で知られる久居出身の橋南谿、儒者では京洛の福井小車・猪飼敬所や尾張の岡田新川・秦滄浪それに画人として大原雲卿・岡田米山人などを補い、さらに附考として先人追慕の作として藤原惺窩の墓を展じ中江藤樹の生地を訪ねた詩などを取り上げ、東陽の『古詩大観』の校正ならびに刊行に尽力した女弟子富岡吟松に言及した。これまでと同様、東陽およびその交友に関して、従来にない新たな資料を提示紹介したわけではなく、彼の詩文を掲出して語釈を附したに過ぎず、その読みもかなり心もとないが、津坂治男氏の労作『津坂東陽伝』（桜楓社、昭和六十三年）や『生涯250年 津坂東陽の生涯』（竹林館、平成十九年）を些かなりとも補う上で資するところがあれば幸いである。

なお、前稿と同じく本文中に取り上げた人物の略伝や生卒年については、近藤春雄『日本文学大事典』（明治書院、昭和六十年）、市古貞次ほか編『国書人名辞典』（岩波書店、平成三年～十一年刊）や長澤規矩也監修・長澤孝三編『増訂漢文学者総覧』（汲古書院、平成二十三年）のほか、笠井助治『近世藩校における学派学統の研究』上下（吉川弘文館、昭和四十四年）を参照した。また各項目ごとに参考にした文献を挙げた。語釈を施す上で、岩波書店刊の『江戸詩人選集』全十巻（平成二年～五年）や『江戸漢詩選』全五巻（平成七、八年）から教えられる点が多かったことも、従前のおりである。

同郷の先輩―久保希卿・橋南谿

東陽と郷里の先輩・知友との交流ぶりを如実に示す文章として、『菰野山に遊ぶ記』（『文集』巻三）がある。これについては「文化十一・十二年の江戸」の平井澹所の項で言及し、澹所のほかに御在所岳への山行をともにした人物として、久保希卿・早川文卿・横山士煥・森子紀らの名を挙げておいたが、その略歴や生卒年等はわからずにいた。つとに津坂治男氏の『生涯250年 津坂東陽の生涯』に挙げられている四日市在住の郷土史家志水雅明氏の労作『久保三水・蘭所小伝』（四日市らいぶらりい別冊①、博文社、平成五年）を遅ればせながら手にするに及んで、菰野の在村文人との交流について多大の教示を得ることができた。そのなかから、ここでは久保希卿を取り上げる。

なお、橋南谿は伊勢久居の人で、厳密に言えば東陽と同郷ではないが、久居は津の藤堂藩の支藩であることから、ここにあわせて記した。

久保希卿（寛保二年〔一七四二〕～文化九年〔一八二二〕）

名は世賢、通称は幸助。希卿は字、三水と号した。伊勢菰野の人。菰野藩儒の龍崎致斎（名は泰守、字は君甫。元禄二年〔一六八九〕～宝暦十年〔一七六〇〕）に学び後に津藩儒の奥田三角（名は士亨、字は嘉甫。元禄十六年〔一七〇三〕～天明三年〔一七八三〕）に師事した。里正（庄屋）から大里正さらには代官に挙げられ、久しくその職を勤めた。東陽より十五歳上。

東陽が京に学んでいた当初、「久保希卿に与ふ」書（『文鈔』巻十）がある。これは希卿が礼の規定に関する疑問を東陽に質したのに答

えたもので、安永九年（一七八〇）ごろに書かれたようだ。在京時代、希卿にあてた詩文は他に見当たらないが、津藩に出仕し支城のある伊賀上野で儒員に充てられていたときの作に、七律「和して久保希卿に答ふ二首」（『詩鈔』巻五）がある。

其一

猥將糲散備儒員 猥りに糲散を將て儒員に備へらる

涉世浮沈總信天 世を渉るに浮沈は総て天に信す

藍尾寧關大邦政 藍尾 寧ぞ関せん大邦の政

臯比聊乘六經權 臯比 聊か乗る六經の權

不知過返桑榆業 過やかに桑榆の業に返るを知らず

好是閑終犬馬年 好し是れ閑に犬馬の年を終へん

嬾慢殘軀自拚久 嬾慢の殘軀自ら拚つること久し

綈袍猶荷故人憐 綈袍猶ほ荷ふ故人の憐しみ

○糲散 無能な役立たず。盛唐・杜甫の七律「鄭十八虔の台州司戸に貶せらるるを送る」詩に「鄭公糲散鬢糸を成す」と。東陽の『杜

律詳解』巻上に「ヤクニタ、ズ」と左訓を附し、「糲散、莊子の語。

糲、丑居の反。不材の木。散は用無きなり」と注する。○総信天

晩唐・方干の七絶「長洲の陳子美長官に与ふ」詩に「人前 尽く是

れ交親の力、道ふこと莫かれ升沈総て天に信す」と。○藍尾 こ

こは末席の意。唐代、宴会で末座の者が飲むのを藍尾酒といった『容

齋四筆』藍尾酒）。○大邦 こは津藩三十六万石をいう。○臯比

講義の席。○六經 詩・書・礼・楽・易・春秋の経書。晩唐・黄滔

の七律「翁文堯員外の文秀・光賢・書錦の什に和し奉る」詩三首其

二に「山簡は諸郡の命を兼ねるを愧ぢ、鄭玄は六經の權を乗るを慚

づ」と。○桑榆 クワとニレ。こは田園、農村をいう。○犬馬年

自己の年齢の謙称。東陽の『蒼齋録』巻上に「犬馬ノ齒」の条がある。

○嬾慢 ものぐさ。晝韻語。三国魏・嵇康「山巨源に与へて交はり

を絶つ書」（『文選』巻四十三）の「簡は礼と相背き、嬾は慢と相成る」

から出た語。○殘軀 老残の身。○綈袍 厚ぎぬのどてら。戦国魏の須賈が昔なじみの范雎の寒苦を憐れんでかつて綈袍を与えたことがあり、後にそれによつて范雎から死罪を赦された故事（『史記』范雎伝）。『書言故事』巻三、朋友類に「綈袍恋恋」の語を挙げる。○故人憐 盛唐・岑参の五絶「尚書の旧を念ひ袍衣を垂賜さる、率に絶句を題して献上し以て感謝を申ぶ」詩に「綈袍更に贈る有り、猶ほ荷ふ故人の憐れみ」と。

其二

憶昔風流到處隨 憶ふ昔 風流到處隨ふ

各天風月照相思 各天の風月 相思を照らす

文章有道千秋業 文章肯へて道はんや千秋の業と

羈宦空違五嶽期 羈宦空しく違ふ五岳の期

春草重傷南浦別 春草重ねて傷む南浦の別れ

故人休勒北山移 故人勒するを休めよ北山の移

艱難太切歸歎嘆 艱難太だ切なり帰歎の嘆

早晚披襟話許悲 早晚 襟を披いて許の悲しみを話らん

○風流 こは詩酒の集い。○各天 遠く離れた空の下。離れ離れ

でいることをいう。「古詩十九首」其一（『文選』巻二十九）に「相去

ること万余里、各々天の一涯に在り」と。○風月 清風明月。○照

相思 この表現、初唐・李嶠の五律「崔主簿の滄州に赴くを送る」

詩に「他郷明月有り、千里相思を照らす」と。○文章 文学。詩賦

文章。三国魏・曹丕「典論」論文（『文選』巻五十二）に「蓋し文章

は経国の大業にして不朽の盛事なり」、盛唐・杜甫の五排「偶題」

詩に「文章は千古の事、得失寸心知る」と。○千秋業 長久の大業。

○羈宦 他郷での仕官。『晋書』文苑・張翰伝に「人生意に適ふを

得るを貴ぶ。何ぞ能く数千里に羈宦して以て名爵を要めんと。

○五岳期 後漢の向長（字は子平）が子女の結婚を済ませ隠居して五岳（東岳泰山・西岳華山・南岳衡山・北岳恒山・中岳嵩山）に遊んだ故事（『後漢書』向長伝）をふまえる。元・鄧文原の七律「盧鴻仙山台榭の図」詩（『佩文齋詠物詩選』卷三八、仙類）に「壺公三山の約に負かず、向子終に五岳の逢を期す」と。○南浦 南の水辺。送別の地をいう。戦国楚・屈原「九歌」河伯（『楚辭』卷二）に「子手を交へて東行し、美人を南浦に送る」と。○故人 古くからの友人。

○北山移 杜甫の七律「覃山人の隠居」詩に「北山の移文誰か銘を勒せん」とあり、東陽の『杜律詳解』巻下に「移文」に「フレブミ」、「勒」に「カキツケル」と左訓を施し、「北山の移文は、孔稚圭が作る所、周顒が隠操遂げざるを鄙しんで、山霊の意を仮りて以て之を嘲る。中に云ふ、煙を駢路に馳せて、移を山庭に勒すと」云々と説く。六朝齊・孔稚圭の移文は、『文選』卷四十三。『古文真宝』後集卷五にも収載。○帰歟嘆 三国魏・王粲「登樓の賦」（『文選』卷十二）に「昔尼父の陳に在る、帰歟の歎音有り」とあり、『論語』公冶長篇に「子 陳に在りて曰く、帰らんかな、帰らんかな」とあるのをふまえる。○早晚 いつか。○披襟 胸の内を率直に述べる。

杜甫の五排「盧五丈參謀琨に贈り奉る」詩に「幕に入りて孫楚を知り襟を披ひて鄭僑を得たり」と。○話許悲 南宋・楊万里「故少師張魏公の挽詞三章」其一（『誠齋集』卷二）に「別れし自り知んぬ何の恙ぞ、誰に従つて許の悲しみを話らん」と。

「あの頃は風流な詩酒の集いにお供して楽しゅうございました。本来貴兄のように郷里で暮らすはずの身が仕官したのをとがめだくださいますな。さんざん難儀な目に遭つて帰郷の念が強まっております。いつか胸の内にある悲哀の情をお話したく存じます」。

寛政八年（一七九六）、40歳となった東陽は春から秋までの長期休暇を得て、久しぶりに帰省し、亡父の墓に詣で、旧友との再会を果

たすことになるが、まずその際の感慨を記した「郷に還り感を誌す」詩（『詩鈔』巻五）を見ておく。

艱難孤宦倦游身 艱難孤宦 倦游の身

休告姑為舊逸民 休告姑く為る旧逸民

世路動多心外事 世路動すれば心外の事多く

家林漸少眼中人 家林漸く眼中の人数なり

青山何許終埋骨 青山何許にか終に骨を埋めん

白頭相望坐愴神 白頭相望めば坐るに神を愴めしむ

柳絮風寒天欲暮 柳絮風寒く天暮れんと欲す

滿川流水送殘春 滿川の流水 残春を送る

○孤宦 地位の低い官吏。『後漢書』郭躬伝に「起つに孤宦自りし、位を司徒に致す」と。晚唐・司空図の七律「詩僧秀公に寄贈す」詩に「冷曹孤宦寥落に甘んず」と。○倦游 他郷での仕官にあきあきする。西晋・陸機「長安有狭邪行」（『文選』卷二十八）に「余は本と倦遊の客と。○休告 官吏の休暇。中唐・韓愈の五古「張徹に答ふ」詩に「洛邑に休告を得、華山に絶徑を窮む」と。○旧逸民 仕官する以前の自由民。『逸民』は、官途に就かないでいる在野の知識人。

○世路 世渡り。特に宦途をいう。○心外事 思いも寄らぬこと。

○家林 家郷。○眼中人 西晋・陸雲「張士然に答ふ」詩（『文選』卷二十五）に「桑梓の城に感念し、眼中の人を髣髴す」とあり、五

臣呂延濟の注に「眼中の人は親識を謂ふ」と。旧友もしくは親しい人をいう。但し、ここは、それだと詩意が通じない。（『眼中丁』（『眼中釘』の意で、自分に害なす者、目障りな人物をいう。○青山の句

北宋・蘇軾の七律「予、事を以て御史台の獄に繋がる（中略）故に二詩を作り、獄卒梁成に授け、以て子由に遺す」詩に「是の処青山骨を埋む可し、他年の夜雨独り神を傷ましむ」と。○何許 何処に同じ（『釈大典』詩家推敲）。○愴神 心を痛める。○柳絮 柳のわた。

○滿川 南宋・阮閱の七絶「北園」詩に「滿川の流水武陵の花」と。

○送残春 春のおわりを見送る。中唐・白居易の五古「南亭にて酒
 に対して春を送る」詩（『白氏文集』巻八）に「独り一盃の酒を持し、
 南亭に残春を送る」と。

「宮仕えにはとかく心外のことが多いが、故郷に近づくにつれ氣に
 障る輩がいなくなる」。

寛政元年（一七八九）末、33歳で仕官はできたものの、任地は山
 国の伊賀上野で儒員の末席に列なつたにすぎず、そのうえ山崎闇斎
 派の道学者らとの軋轢もあって何かと掣肘されることが多く、存分
 に手腕を発揮できずにおり、不如意感をつのらせていたのである。

こうした日頃の気苦勞を晴らし、鬱積した思いを散すべく、そこ
 で訪ねたのが孤野の久保希卿であった。七律「希卿を訪ぬ」詩（『詩
 鈔』巻五）に云う、

隱居無恙舊風流

隱居恙無し旧風流

叢桂成陰境轉幽

叢桂 陰を成し境転た幽なり

詩或驚人聊亦戲

詩は或いは人を驚かして聊か亦た戯れ

樽常有酒又何憂

樽は常に酒有り又た何ぞ憂へん

交歡相慰十年別

交歡して相慰む十年の別れ

敬愛自為三日留

敬愛して自ら為す三日の留

深夜殷勤敬枕話

深夜殷勤に枕を敬てて語る

襟期更隔幾春秋

襟期更に幾春秋を隔てん

○無恙 平安無事なこと。『書言故事』巻五、門疾類にこの語を挙

げる。○旧風流 詩を作り酒を酌み交わした昔の仲間。○叢桂 群

がり生えた桂。前漢・劉安の「招隱士」（『楚辭』巻十二、『文選』巻
 三十三）の「桂樹叢生す山の幽」から出た語。（『隱居』）とは縁語。

○境転幽 あたりは以前にもましてひっそりとしている。元・吳鎮
 の五律「郭忠恕の仙山樓觀」詩に「疊雲仍りに起こり、崇山境転た
 幽なり」と。○驚人 杜甫の七律「江水の海勢の如くなりたるに値
 ひ、聊か短述す」詩に「語の人を驚かさずんば死すとも休めず」と。

○殷勤 ねんごろに。しみじみと。疊韻語。『夜航余話』巻上に「殷
 勤ハ、ネンゴロニト訳ス。委細ニ心ヲ尽スノ謂ナリ」と。○敬枕
 横になつたままやや上体を起こし枕をななめに立てそれにもたれ
 る。○襟期 心に思うこと。杜甫の七古「醉時歌」に「時に鄭老の
 襟期を同じうするに赴く」と、

「十年ぶりの再会で、三日間お世話になりました。夜がふけるまで
 枕をそばだてて懐かしく語り合いましたが、これから先、こうして
 お会いできるのは何年後でしょう」。

そして孤野訪問のおりには、かつて孤野山に遊んだ仲間、すなわ
 ち東陽より三歳上の早川文卿（宝暦四年「二七五四」～天保九年
 「一八三八」・九歳上の横山士煥（寛延元年「二七四八」～寛政十一年
 「二七九九」・八歳ほど上の森子紀（寛延二年「二七四九」頃～文化十四
 年「二八一七」・六歳上の呂君彝（姓は野呂氏。宝暦元年「二七五二」～文
 政八年「二八二五」）ら全員の顔がそろったかどうかは分からないもの
 の、とにかく都合のつく連中と夏は泊りがけで避暑にでかけた。志
 水氏の前掲書によれば、早川文卿は孤野藩士、横山士煥は広幡神社
 の宮司、森子紀は下鶴原村の豪農、野呂君彝は孤野藩医。

五排「孤山の積翠楼に遊び席上諸子に贈る」（『詩鈔』巻三）に云う、

騷客耽行樂、沈吟曳杖遲

騷客 行樂に耽り、沈吟して杖を
 曳くこと遅し

烟轡隨步變、雲樹入看奇

烟轡 歩に随つて変じ、雲樹 看
 に入りて奇なり

舊社尋盟處、清飲避暑時

旧社盟を尋むる處、清飲暑を避く
 る時

樓涼霞泛酒、林爽雨催詩

樓涼しくして霞酒に泛び、林爽に
 して雨詩を催す

嘯月曾遊感、醉花重會期

月に嘯きて曾遊感じ、花に酔ふて
 重会期す

泉聲夜逾響、山氣夏偏宜

泉声夜逾いよ響き、山氣夏偏へに宜し

風景雖無盡、人生奈有涯

風景は尽きること無しと雖も、人生は涯有るを奈せん

離群他日恨、幽興苦相思

離群他日の恨、幽興苦た相思はん

○騷客 詩人。『故事成語考』文事に「騷客は即ち是れ詩人」と。

○沈吟 ここは詩句を考える意であろう。疊韻語。○烟轡 もやのかかった山々。○入看 目に入る。近くに見える。盛唐・王維の五律「周南山」詩（『唐詩選』卷三）に「白雲望を廻らせば合し、青靄看に入れば無し」と。○旧社 昔の文学サークル。○清飲 欲得づくを離れた閑雅な楽しみ。○尋盟 旧交を温める。もとは盟約を重ねる意（『左氏伝』哀公十二年）。『書言故事』卷六、評論類に「旧約を尋むるを尋盟と曰ふ」と。○雨催詩 杜甫の五律「諸貴公子の丈八溝に妓を携へ涼を納るるに陪し、晩際に雨に遇ふ二首」其一に「片雲頭上に黒し、応に是れ雨の詩を催すなるべし」と。○嘯月 月下に詩を吟ずる。○重会 再会。○泉声 ここは溪流の水音。○離群 勉強仲間とはなればなれになる。『礼記』檀弓上に「子夏曰く、吾れ離群して素居す、亦た已に久し矣」とあり、鄭玄の注に「群は同門の朋友を謂ふなり」と。○他日 後日。○幽興 しみじみとした興趣。盛唐・岑参の七律「崔十二侍御が灌口にて夜、報恩寺に宿すを聞く」詩に「勝事接す可からず、相思うて幽興長し」と。

そしていよいよ休暇を終え伊賀上野にもどる日が迫ったころ、友人たちが送別の席を設けて招待してくれた。七律「孤野の諸子、西山の鳳蹟楼に邀宴す、是れ昔年屢しば遊びし処、席間賦謝して兼ねて以て留別す」詩（『詩鈔』卷五）が、それである。（鳳蹟楼）は、未詳。

翠嵐秋爽靜雲林

翠嵐秋爽にして雲林静かなり

行樂伴來招隱吟

行樂伴ひ來たる招隱吟

多病偏衰蒲柳質

多病偏へに衰ふ蒲柳の質

倦游逾切薛蘿心

倦游逾いよ切なり薛蘿の心

功名寧易酒中趣

功名寧ぞ易へん酒中の趣

山水不須絃上音

山水須ひず絃上の音

舊社交歡無限興

旧社の交歡 無限の興

別魂空自夢相尋

別魂空自しく夢に相尋ねん

○翠嵐 山林にかかる靄。○招隱吟 人に帰隱をすすめる歌。西晋の左思や陸機に「招隱詩」（『文選』卷二十二）がある。○蒲柳質 病弱な質。『世說新語』言語篇に「顧悦は簡文と同年にして髮蚤に白し。簡文曰く、卿何を以て先に白しと。対へて曰く、蒲柳の姿は秋を望めば落ち、松柏の質は霜を経て弥いよ茂る」と。『書言故事』卷十、花木類に「蒲柳姿」を挙げ、「自ら衰弱を言ひて蒲柳の姿と曰ふ」として、これを引く。○倦遊 仕官にあきあきすること。前掲、「郷に還り感を誌す」詩の語釈参照。○薛蘿心 隱遁志向。《薛蘿》は、薛荔（マサキノカヅラ）と女蘿（ヒカゲノカヅラ）。隠者の服をいう。六朝宋・謝靈運「斤竹澗従り嶺を越へて溪行す」詩（『文選』卷二十二）に「山阿の人を想見するに、薛蘿眼に在るが若し」と。○酒中趣 盛唐・李白「月下独酌」四首其二に「但だ酔中の趣を得、醒者の為に伝ふること勿れ」と。○絃上音 三味線をいうのである。

う。○旧社 昔の文学仲間。○別魂云々 別れた後、夢で会うことをいう。六朝梁の江淹「別れの賦」（『文選』卷十六）に「離夢の躑躅を知り、別魂の飛揚を意ふ」と。古代中国において、夢で人に逢うのは魂が身体から抜け出して会いに行くからだと考えられていたことによる表現。○空自（自）は、接尾語。釈大典の『詩家推敲』に「本自・独自…空自…要自ノ類ミナ上ノ字ニツヒテ用ユ」と。

また七絶には「孤野の一士の家、屏風に余が少時の詩を貼す。赧汗に勝へず此れを作つて之に易ふ」と題した詩（『詩鈔』卷八）もある。「少年時分は才子だと誉めそやされて未熟な詩を屏風にのこしてし

まった」。

こうした菰野での再会からまた十八年、希卿とは顔を合わせる機会がないまま、東陽のもとに訃報が届いた。その死を悼んだ七律「久保希卿を追悼す」詩（『詩鈔』巻五）に云う、

物在人亡獨悵思 物在人亡して独り悵思す

小来同郡舊相知 小来同郡の旧相知

金蘭意氣終千古 金蘭の意氣終に千古

雞黍風流自一時 雞黍の風流自ら一時

秋苑空荒松月冷 秋苑空しく荒れて松月冷やかに

夜臺深鎖草蟲悲 夜台深く鎖して草虫悲しむ

交游歿盡還郷處 交游歿し尽す郷に還る處

攜得詩篇好眎誰 詩篇を携へ得て好く誰にか眎さん

○物在人亡 盛唐・李頎の七律「盧五の旧居に題す」詩（『唐詩選』

巻五）に「物在人亡して見ゆる期無し」と。○悵思 悲しみに打ち沈んで物思う。○小来 子供時分から。○旧相知 昔なじみ。○

金蘭 金属のように堅く、蘭のようにかぐわしい交わりを「金蘭契」という。『易経』繫辭上伝に「二人心を同じくすれば、其の利きこ

と金を断ち、同心の言、其の臭しきこと蘭の如し」と。○千古 永訣をいう。○雞黍 鶏をつぶし黍飯を炊いて欲待する。『蒙求』巻

上の標題に「范張雞黍」。『書言故事』巻三、叙援類に「雞黍」を挙げ、

「飯を擾するを、雞黍の款と云ふ」と。〈擾〉は、ご馳走する意の俗語。○自一時 それ自体（今となつては）僅かな間にすぎない。明・

李攀龍の七絶「歲抄、元美兄弟の書を得て却って寄す二首」其二（『滄溟集』巻十四）に「中原謾に説く先朝の事、五子の風流自ら一時」と。

○松月 松にかかる月。○夜台 墳墓をいう。○草虫 草むらにす

だく虫。○眎 視の別体字。示と同義。

「故郷にもどつても昔の文学仲間はずっかり亡くなり、誰に詩稿を見せればいいのか、心待ちにしてくれる人はもういない」。時に東

陽56歳。十九年に及んだ伊賀上野詰めから五年前に津に召還され、ようやく活躍の場を得て、遅ればせながら驥足を伸ばし始めたところである。

さらに歳月は流れる。七絶「旧友に遇ふ」詩（『詩鈔』巻九）に、

歲月蹉跎白髮新 歲月蹉跎して白髪新たなり

風流一夢舊青春 風流一夢 旧青春

自稱名姓猶堪訝 自ら名姓を称するも猶ほ訝るに堪ふ

陌上相逢是路人 陌上相逢ふは是れ路人

○蹉跎 もたもたするさま。疊韻語。初唐・張九齡の五絶「鏡に照らして白髪を見る」詩（『唐詩選』巻六）に「宿昔青雲の志、蹉跎す

白髪之年」とあり、盛唐・李頎の七律「魏万の京に之くを送る」詩（『唐詩選』巻五）に「見る莫かれ長安行樂の處、空しく歲月をして蹉跎

たり易からしむるを」と。○風流 詩酒の集い。○旧青春 昔の青春時代。元・釈善住の七律「時太初海昌の詩巻を読む」詩（『谷響集』

巻二）に「鏡を覽て毎に傷む新白髪、杯を把つて還つて憶ふ旧青春」と。○陌上 街頭、路上。初唐・盧照鄰の七古「長安古意」（『唐詩選』

巻二）に「樓前に相望むも相知らず、陌上に相逢ふも詎んぞ相識らん」と。○路人 自分とは関係のない人。三国魏・曹植「親親を通ぜん

ことを求むる表」（『文選』巻三十七）に「恩紀の違へること、路人よりも甚だし」と。

「昔馴染みを路上で見かけ自分から名のつてもボカンとされた」。

先輩・知友など昔の仲間が一人また一人と世を去つてゆく中、早川

文卿・森子紀とは、それぞれ思いがけない出会いがあった。

「文卿に邂逅す」（『詩鈔』巻九）には、

拙官蹉跎壯志空 拙官蹉跎して壯志空しく

看君氣象老猶雄 看る君が氣象 老いて猶ほ雄なるを

悲歡二十年來事 悲歡二十年來の事

話盡寒窓一夜中 語り尽さん寒窓一夜の中

拙官蹉跎壯志空 拙官蹉跎して壯志空しく

看君氣象老猶雄 看る君が氣象 老いて猶ほ雄なるを

悲歡二十年來事 悲歡二十年來の事

話盡寒窓一夜中 語り尽さん寒窓一夜の中

拙官蹉跎壯志空 拙官蹉跎して壯志空しく

看君氣象老猶雄 看る君が氣象 老いて猶ほ雄なるを

悲歡二十年來事 悲歡二十年來の事

話盡寒窓一夜中 語り尽さん寒窓一夜の中

○拙官 官界での世渡り下手。○壮志 意気盛んな志。晩唐・李群玉の「瀟浦自り東のかた江表に遊び」云々と題する五古に「壮志空しく摧藏す」と。○氣象 心意気。

「自分もたまたして志を実現できずにいるのに、君は相変わらず意気盛んだね。悲しみに喜びといろいろあったこの二十年、しみじみ語り尽そう」。

「森子紀に邂逅す」(『詩鈔』巻九)には、

相遇猶能識舊聲 相遇ひて猶ほ能く旧声を識る

牢騷哀老不勝情 牢騷 老を哀れんで 情に勝へず

風流四十年間前 風流四十年間の前

恍惚追思似隔世 恍惚として追思すれば隔世に似たり

○識旧声 昔ながらの声で当人だとわかる。北宋・蘇軾の七律「姪の安節が遠くより来りて夜坐す三首」其二に「心衰へ面改まり瘦せて嶢嶢たり、相見えて惟だ心に旧声を識るべし」と。○牢騷 思うようにならず、不満なさまをいう近世の言葉。疊韻語。○哀老 〈哀〉字は、哀に作るのがよい。○恍惚 ぼんやりするさま。双声語。

○似隔世 元・薩都拉の七古「相逢行、旧友の治將軍に贈別す」詩(『雁門集』巻十)に「旧遊歴歴として隔世に似たり、夜雨豈に同群を思はざらんや」と。

「見た目は変わっても声で君だとわかった、四十年前の詩文の集いは遠い昔」。

野呂君葬とは詩のやり取りがあつたものか、七絶「君葬に次韻す」と題する(『詩鈔』巻九)作がある。

故交零落少晨星 故交零落して晨星より少なく

老病相憐眼轉青 老病相憐れんで眼転た青し

濁酒枯魚一爐火 濁酒枯魚 一炉火

儘拚風雪撲牕櫺 儘拚す風雪の窓櫺を撲つに

○故交 昔の友人。○零落 死ぬこと。双声語。後漢・孔融「盛孝

章を論ずる書」(『文選』巻四十二)に「海内の知識、零落して殆ど尽く」と。金・趙秉文の五古「淵明に倣ひて自ら広うす」詩(『閑閑老人滌水文集』巻五)に「故交零落し尽き、世豈に能く久しく住まらんや」と。○晨星 明け方の星。『書言故事』巻八、叙同官類に「落晨星」の語を挙げ、「同年の者或いは存し或いは亡するを言ふなり」と。この場合の〈同年〉は、同じ年の科挙及第者。○眼転青『蒙求』巻下の標題に「阮籍青眼」がある。○濁酒枯魚 濁り酒と魚の干物。明・李攀龍の七絶「九月八日東村にて元美を送る」詩(『滄溟集』巻十二)に「濁酒枯魚自ら貧ならず」と。東陽の七絶「冬夜」詩(『詩鈔』巻八)にも「濁酒枯魚何許にか在る」と。○儘拚 一任する意。まかす。〈拚〉は、拚の俗字。○牕櫺 連子窓。

「昔の仲間は一入また一人といなくなり今では夜明けの空にかかる星の数より少なく、互いに年をとると同病相憐れむじやないが老病相憐れむで、まなざしもますます優しくなる。外は雪もよいの寒風が窓にうちつけるがままよ、囲炉裏ばた濁り酒に肴の干物があればよい」。

東陽の生まれた平尾村に隣接する菰野は土方藩一万二千石の陣屋があり、後の東陽の素地を作ったところである。久保希卿をはじめ先に名を挙げた横山士煥・森子紀らは菰野藩内の在村文人たちであつたし、藩士の早川文卿を含めて、概して遠く江戸や京大坂にまで聞こえた著名な人物というわけではなかった。されど東陽にとつては詩文サークルの先輩・仲間として忘れ得ぬ人々であつたのである。とりわけ最年長の久保希卿は菰野藩儒の南川金溪とともに得難い存在であつたようだ。金溪のことは、前稿「文化十一・十二年の江戸」において平井澹所を取り上げた際に言及したので参照されたい。

なお、志水雅明氏の著書から希卿の墓碑として津藩の儒者野村西轡(名は世業。明和元年「一七六四」〜文政十年「一八二七」)の手になる「立

恭先生の碑」があることを知ったので、本稿の末尾に【資料編①】として挙げておいた。また金溪については、江村北海に碑文があり、岩田隆氏が訓点（返り点）を施しその著『宣長学論攷―本居宣長とその周辺』（桜楓社、昭和六十三年）に既に紹介されているが、改めて書き下しと語釈と附し【資料編②】として示しておく。

※久保希卿らについては、前掲、志水雅明『久保三水・蘭所小伝』のほかに『孤野町史』（近藤謙蔵主編、昭和十六年。名著出版より昭和四十九年復刻）参照。

ところで、孤野出身の儒者には先に名を挙げた者以外にも東陽より十九歳上の石川金谷（名は貞、字は太一「乙」、号は金谷。元文二年「一七三七」～安永七年「一七七八」）があり、「石川太一が致仕して郷に還る、此れを贈って慰藉す」と題する七律（『詩鈔』巻四）があるので、ここに挙げておく。詩題の下に「太一は孤野の人。日州延陵の文学と為る」という自注を附している。金谷は、南宮大湫（名は岳、字は喬卿。享保十三年「一七二八」～安永七年「一七七八」）が桑名で教授していたときに従学。かつて長崎に遊んだことがあり「中土の音に慣習」していた（後述、巖垣龍溪の墓誌。京都で開塾『平安人物志』明和五年版にその名が見える）。江村北海（名は綏。正徳三年「一七一三」～天明八年「一七八八」）の明和八年（一七七二）刊『日本詩史』巻五には「又た石大乙・藤文二は業を喬卿に受くる者。（中略）大乙は蚤く京師に來たり、講説を業と為す」という。のちに近江膳所藩に仕えた。その際、皆川淇園（名は愿、字は伯恭。享保十九年「一七三四」～文化四年「一八〇七」）に七絶「石川太一が膳所侯の文学と為り江戸に赴くを送る」詩（『淇園詩集』巻三）がある。その後、病により職を辞し、安永二年（一七七三）日向延岡藩に聘せられるも直言がたたって罷免されたという。

竟向家山賦卜居

竟に家山に向いて卜居を賦す

志高樂託拂衣初
浮雲流水情無極
明月清風興有餘
期客自鋤三徑草
消閑好攤一床書
優游堪玩人間世
枉道何門不曳裾

志高く樂託たり衣を払ふの初
浮雲流水 情極り無く
明月清風 興餘り有り
客に期す 自ら三徑の草を鋤くを
閑を消す 好し一床の書を攤ぐを
優游 玩ぶに堪ふ人間世
枉げて道ふ何れの門にか裾を曳かざらん

やと

○向 文語の於と同じ。〈於〉は平字、〈向〉は仄字。○家山 故郷。
○卜居 土地柄の良し悪しを占って住まいを定める。『楚辭』卷六に屈原の作とされる「卜居」があり、盛唐・杜甫の七律に「居を卜す」詩がある。○樂託 自由闊達。些事にこだわらないさま。落託も同じ。疊韻語。『世說新語』賞譽篇に「王脩載（著之）の樂託の性、門風自り出づ」と。○扞衣 衣の塵を払う。帰隱することをいう。六朝宋・謝靈運「祖德を述ぶる詩」（『文選』卷十九）に「高く七州の外に掛し、衣を五湖の裏に払ふ」と。○浮雲流水 行雲流水と同じ。中唐・朱放の七絶「温台を送る」詩に「浮雲流水相隨ふ」と。○明月清風『南史』謝謏伝に「時に独り酔ふこと有り、曰く、吾が室に入る者は但だ清風有るのみ、吾が飲に対する者は、唯だ明月有るのみ」と。○三徑 前漢末、王莽が実権を握ったとき帰隱した蔣詡は家の竹林に三本の小道をひらいたという（『三輔決録』）。『蒙求』巻上の標題に「蔣詡三逕」。東晋・陶潜「帰去來の辞」（『文選』卷四十五、『古文真宝』後集卷二）に「三徑荒に就いて、松菊猶ほ存せり」と。ちなみに、東陽の『舊唐書』巻上に「三逕」の条がある。○消閑 暇つぶし。○一床書 棚いっぱい書物。初唐・盧照鄰の七古「長安古意」（『唐詩選』巻二）に「寂寂寥寥たり揚子の居、年年歲歲一牀の書」と。（揚子）は、前漢の揚雄。○優游 ゆつたりと遊びたのしむ。古くは『詩經』大雅「卷阿」に「伴奭として爾遊び、優游して爾休せよ」と。

○人間世 世間。『莊子』に人間世篇がある。○枉道 みだりにいう。晚唐・尚顔の七絶「秋夜吟」に「枉げて道ふ一生繫着無しと、湘南の山水別人尋ぬ」と。○曳裾 宮仕えする。前漢・鄒陽「書を呉王に上る」(『文選』卷三十九)に「固陋の心を飾れば、則ち何れの王の門にか長裾を曳く可からざらんや」と。

「故郷に帰隠されての気ままな読書生活、お召しがあればどこでも仕えるつもりはあるぞと口ではおっしゃるが、どうやらその気はあまりまずまい」。

なお、前掲『菰野町史』によれば、菰野の瑞龍寺に巖垣龍溪撰の墓誌がある由にて、その一部が書き下して抄録されているが、実物は未見。

※石川金谷には、唐話の辞書『遊蜀社常談』があり、石崎又造『近世日本に於ける支那俗語文学史』(弘文堂、昭和十五年) 167頁に彼の略歴を載せる。その出身地について、石崎著には「伊勢国菰野山下の産。其の先は河内の人」という。

橋南谿(宝暦三年「二七五三」→文化二年「二八〇五」)

名は春暉、字は恵風。南谿はその号。伊勢久居の人。明和二年(一七六五)京に出て医術を学び、天明二年(一七八二)には九州・四国を、同四年には北陸・奥羽をそれぞれ遊歴。東陽より四歳上。

詩末に「恵風は久居の産。少くして故有って郷を去る」と自注を附した七絶「橋恵風の伏水に客死するを悼む」詩(『詩鈔』卷八)がある。東陽49歳の作。

西望雲山慘落暉

西のかた雲山を望めば落暉慘たり

蜀魄聲悲泪濕衣

蜀魄声悲しく泪衣を湿らす

春風芳草萋萋色

春風芳草萋萋たる色

竟使王孫去不歸

竟に王孫をして去りて帰らしめず

○落暉 落日の光。○蜀魄 ホトトギス。蜀の皇帝が死後この鳥に

化身したという。○芳草 香草。○萋萋 草木の盛んに茂るさま。

○王孫 貴公子。前漢・劉安「招隱士」(『楚辭』卷十二、『文選』卷三十三)に「王孫遊びて帰らず、春草生じて萋萋たり」と。

津坂治男氏の「津坂東陽伝」によれば、恵風との交りは、「在京後期、東陽が一家を成した後」に始まったらしい。天明期の後半である。いずれも七絶で「和して橋恵風に答ふ」、「橋恵風琴を携へて過らる」、「伏水の梅仙翁に寄す」(『詩鈔』卷七)の各詩がある。

「和して橋恵風に答ふ」詩には、

春風江上發梅花

春風江上 梅花発す

乘興扁舟路不賒

興に乗じて扁舟 路賒かならず

宴賞相期月明夕

宴賞相期す月明の夕べ

夢魂先自到君家

夢魂先自に君が家に到る

○乘興 東晋の王子猷(名は徽之)が山陰(紹興)にいたとき月明りに照らされた雪景色を見て、剡溪にいる友人の戴安道(名は逵)を思い出し、直ちに小舟に乗って彼のもとを訪ねたが、門前に到って会わずに引き返した。人からその理由を問われて「興に乗じて来たり興尽きて反る」と答えたという(『世說新語』任誕篇)。「書言故事」

卷四、送行類に、この語を挙げ「往く所有るを興に乗ずと云ふ」として、王子猷の故事を引く。○扁舟 小舟。宋・惠洪の七律「誼叟の北に帰るを送る」詩(『石門文字禪』卷十二)に「扁舟興に乗じて

一たび相尋ねん、燈青竹屋風雨の夕」と。○賒 東陽の『夜航詩話』卷五に「賒は又た遙と訓ず。然れども但だ遠きを謂ふに非ず。(中略)隔てて及ばざるを言ふなり」と。○夢魂 前掲、「菰野の諸子、西

山の鳳蹟樓に邀宴す」詩(別魂)の語釈参照。

「橋恵風琴を携へて過らる」詩には、

庭院夜深風露清

庭院夜深けて風露清し

有時烏鵲繞枝鳴

時有りて烏鵲枝を繞りて鳴く

琴徽照徹松窓月

琴徽照徹す松窓の月

彈盡高山流水情 彈き尽す高山流水の情

○庭院 中庭。○風露清 中唐・白居易の七律「夏夜宿直」詩（『白氏文集』卷十九）に「人少にして庭宇曠しく、夜涼しくて風露清し」と。○烏鵲 カササギ。三国魏・曹操「短歌行」に「月明らかにして星稀に、烏鵲南に飛ぶ。樹を繞ること三匝、枝の依る可き無し」と。○琴徽 ことじ。琴柱。ここでは、この二字で琴をいう。○松窓 松に臨む窓。○高山流水 伯牙は琴を善くしたが、高山をイメージして奏でると、親友の鍾子期が「峨峨として泰山のごとし」といい、流水だと「洋洋として江河のごとし」といって讃えたという（『列子』湯問篇）。

「伏水の梅仙翁に寄す」詩には、

湖雲鶴唳夕陽斜 湖雲鶴唳 夕陽斜なり
仙興孤山處士家 仙興孤山 処士の家
一番東風解凍雨 一番東風 解凍の雨
半篙春水訪梅花 半篙の春水 梅花を訪ぬ
○湖雲 伏見の西方、巨椋池に浮かぶ雲を言うのであろう。○鶴唳 鶴の鳴き声。○仙興 仙界の興趣。○孤山 杭州の西湖にあり、北宋・林逋（和靖）が隠棲した地。ここで林逋は梅を植え鶴を飼って楽しんだという。○処士 仕官せずにいる士。○解凍 氷をとかす。『礼記』月令に「（孟春の月）東風凍りを解く」と。○半篙 棹の半分（の水かさ）。金・李節の七律「漁父」詩（『中州集』巻七）に「半篙の春水世塵遠く、一笛の晚風山雨晴る」と。

と、それぞれ詠じられている。

ちなみに、龍草廬（名は公美、字は君玉、通称彦二郎。正徳四年「一七二四」寛政四年「一七九二」の七絶「雍州伏水十二境詩」（享和元年「一八〇二」刊『草廬集七編』巻三）の其三に「亀谿梅香」の自注に「伏見山の北に梅樹多し」とあることからすれば、南谿の居もその辺りにあったのであろうか。もっとも、南谿は伏見での住まいを何度か変えてお

り、寛政年間、伊賀上野での作、五絶の「寄せて橘恵風の伏水に卜居するを賀す二首」（『詩鈔』巻六）には、次のように詠じられていて、町中に居住したことが窺える。

形勝古名邑、通津占自由

形勝 古の名邑、通津 自由を占む

門前京洛道、屋後浪華舟

門前 京洛の道、屋後 浪華の舟

○名邑 名だたる街。○通津 四方に通じる渡し場。○京洛道 竹田街道。○浪華舟 いわゆる三十石舟の発着場。

其二

銷夏滄浪水、静窓蘋末風

銷夏 滄浪の水、静窓 蘋末の風

浦頭涼月色、天地玉壺中

浦頭 月色涼しく、天地 玉壺の中

中

○銷夏 夏の暑さをしのぐ。○滄浪水 青々とした川をいう。戦国

楚・屈原の作とされる「漁父の辞」（『文選』卷三十三、『古文真宝』後集卷二）に「滄浪の水清まば、以て吾が纓を濯ふ可し」とあり、隠

者と縁の深い語でもある。○蘋末風 蘋（みずくさ）にそよぐ風。

中唐・劉禹錫「楚望の賦」に「蘋末風起り文有りて声無し」と。○

浦頭 水岸。○玉壺中 晩唐・鮑溶の五古「峨眉山の道士と期して

尽日至らず」詩に「玉壺天地を貯へ、歲月亦た已に長し」と。

その後、南谿は伊賀上野に東陽を訪ね泊まったこともあった。寛政六年（一七九四）の作とおぼしき七律に「橘恵風將に駕を命ぜんとするを聞き、翹俟に勝へず、因つて此の寄有り」と題する詩（『詩鈔』巻五）がある。その年の三月、津藩の重役で文雅の嗜みが深く聴雨と号した俳人でもあった岡本景淵（字は士龍、号は聾山、通称五郎左衛門。寛延二年「一七四九」文化十一年「一八一四」に招かれたおり、その帰途に寄つたのであろうか。その当否はともかく、この詩は南谿が訪ねてくると知って、待ちきれずに寄せた作である。（翹俟）は、今か今かと爪先立って待ち望む意。

良朋將自遠方來
入夢登音興已催

病榻未曾緣客起
愁襟方是待君開

閑中富貴書千卷
身後功名酒一盃

預要款留能幾日
離情話盡十年哀

○良朋 好き友（『詩経』小雅「常棣」）。○自遠方來 『論語』学而篇

に「朋有り遠方より来る、亦た樂しからずや」と。○登音 足音。

○病榻 病床。〈榻〉は、長椅子・ベッドの類。北宋・文同の五律「憂

居」詩（『丹淵集』卷五）に「蔬盤客の至るに羞ぢ、病榻人の語るを

厭ふ」と。○愁襟 愁懷。○閑中富貴 南宋・方岳の七律「人日」

二首其一（『秋崖集』卷八）に「閑中の富貴は陽和の月」と。○身後

功名 李白の雜古「笑歌行」に「君は愛す身後の名、我は愛す眼前

の酒。酒を飲み眼前に楽しむ、虚名何れの処に有らん」と。○款

留 客をもてなし家にとどめること。○離情 別離の情。

「何日くらいこちらに御滞在いただけますか、この十年積もり積

もった思いを語り尽くたく存じます」。（十年）とは概数でもとより

実数ではないものの、長らく面晤歓談の機会なく、南谿の訪問を心

待ちにしていた東陽は彼がやってくると早速、七律「惠風至る。筆

を走らせて喜びを紀す」詩を詠じた。

舊好歡迎遠客尋 旧好歡迎す遠客の尋ぬるを

年來別恨豁幽襟 年來の別恨 幽襟を豁く

文才卓犖陵雲氣 文才卓犖たり陵雲の氣

仁術殷勤濟世心 仁術殷勤たり濟世の心

明月清風堪勸酒 明月清風 酒を勧むるに堪へ

高山流水入鳴琴 高山流水 琴を鳴らすに入る

四方遊盡男兒志 四方遊尽するは男兒の志

勝話相忘夜漏深 勝話相忘る夜漏の深きを

○旧好 古なじみ。○幽襟 胸中奥深くに秘めた思い。杜甫の五排

「嚴鄭公の序事にて岷山沱江の図画を觀奉る」詩に「絵事功殊絶な

り、幽襟興激昂す」と。○卓犖 卓越する。疊韻語。後漢・孔融「攄

衡を薦むる表」（『文選』卷三十七）に「英才卓犖」と。〈卓犖〉は、

卓犖と同じ。疊韻語。○陵雲 雲をしのぐ。氣概の盛んなるをいう。

○仁術 医術をいう。○殷勤 ねんごろ。疊韻語。○濟世心 世の

人々の難儀を救いたいという思い。宋・惠洪の七律「朱世榮が臨川

に守たり、新たに軒を開く。…」詩（『石門文字禪』卷十一）に「凡

に隠りて忘れ難し濟世の心」と。○明月清風 前出「石川太一に贈つ

た詩の語釈参照。○高山流水 前出「橘惠風琴を携へて過る」詩

の語釈参照。○勝話 すばらしい話。○夜漏深 夜が更けること。

〈漏〉は、水時計。

「貴兄が実際に見聞した諸国の奇事異聞の類に耳を傾けるうち、

夜がとつぷりと更けたのも忘れてしまいました」。

この詩には「惠風、遊を好み足跡幾んど天下に遍し。著す所の東

西游記各おの十卷、世に行はる」との自注を附している。当時、南

谿の旅行記『西遊記』五卷五冊が寛政五年（一七九三）五月に、『東

遊記』五卷五冊が同年八月に刊行されていたのである。両者は好評

を博し、後編続編として寛政九年に『東遊記後編』五卷五冊が、翌

十年には『西遊記続編』五卷五冊が出版された。

そしてこの時の作にもう一首、五言排律の「京師の橘惠風訪宿す」

詩（『詩鈔』卷三）がある。

秋風吹落木、山郭一蕭條 秋風 落木を吹き、山郭一に蕭条

地窄難伸脚、官卑苦折腰 地窄 地窄くして脚を伸ばし難く、官卑

倦游唯舌在、怨別殆魂消 遊に倦んで唯だ舌の在るのみ、別

長嘆偏惆悵、相思坐鬱陶

れを怨んで殆んど魂消ゆ
長嘆 偏へに惆悵し、相思 坐ろに鬱陶たり

親朋迎莫逆、款話慰無聊

親朋 莫逆を迎へ、款話 無聊を慰む

剪盡寒窓燭、轉憐聽雨宵

剪り尽す寒窓の燭、転た憐れむ雨を聴く宵

○山郭 山のまち。杜甫の七律「秋興八首」其三に「千家の山郭朝暉靜かなり」と。ここでは、伊賀上野を指す。○蕭条 ひっそり物寂しいさま。疊韻語。○折腰 上役にべこべこする。『宋書』隱逸伝・陶潜伝に「吾れ五斗米の為に腰を折り郷里の小人に事ふる能はず」と。○倦游 他郷での仕官にあきあきする。前掲、「郷に還り感を誌す」詩の語釈参照。○舌在 戦国魏の人で後に連衡策を説いた張儀は、かつて楚国で宰相の壁を盗んだと疑われたが、咎打たれてもこれを認めず釈放されたとき、妻に「吾が舌を視よ、尚ほ在りやいなや」と問い、在るという、それで充分だと答えたという（『史記』張儀列伝）。中唐・白居易「書に代ふ詩一百韻、微之に寄す」（『白氏文集』卷十三）に「耳垂れて伯樂無く、舌在りて張儀有り」と。○魂消 極めて深い悲しみをいう。○惆悵 いたみ悲しむ。双声語。○鬱陶 心塞がり胸痛むさま。六朝・齊の謝朓「中書省に直す」詩（『文選』卷三十）に「朋情以て鬱陶たり、春物方に駘蕩」と。○莫逆「莊子」大宗師篇に「（子祀・子輿・子犁・子來の）四人相視て笑ふ。心に逆らふこと莫し、相与に友なり」と。『書言故事』卷三、朋友類にも挙げる。○款語 うちとけた話。○無聊 やるせなさ。後漢・王逸「九思」逢尤（『楚辭』卷十七）に「煩憤として意無聊」と。南宋・陸游の七律「龜堂独り坐して悶を遣る」詩に「髪已に凋疎し齒已に揺らぐ、高談誰と与にか無聊を慰めん」と。○剪（燭を剪る）とは、ロウソクは芯の燃えかすがたまと暗くなるので、それを剪って明

るくすること。

ちなみに、東陽の文章のなかには橘南谿の直話やその著述から題材を取ったものが幾つかある。『文集』卷八の「豪吾能毒の事を記す」には、能登のとある浦で漁民が捨てたフグの腸をカラスが啄んで死にそうになったが、豪吾（つわぶき）を食べて毒が解け元気に飛び去ったので、それから人々が試したところ効能があったという話を挙げ、「京師の橘惠風嘗て其の地に遊んで聞く所、余が為に之を語る」という。

同じく『文集』卷八の「鴻池氏の主管の事を記す」は、大坂の豪商鴻池の主が寛政四年（一七九二）の大火で焼けた自宅を新築するのにもとの土を三尺掘り捨てて新しい土に入れ替えようとしたのを、それは高貴なお方のすることだと番頭が諫めたものの聞き入れられず自死した話だが、これは南谿の文政八年（一八二五）刊の『北窓瑣談』卷二に見える。

さらに『夜航詩話』卷二には、寛政七年（一七九五）の冬、仙台の海浜に清国蘇州の漁船が漂着し、漁民が仙台城下に逗留することになったおり、見物にやって来た人々から墨跡を乞われたり詩を寄せられたりして困惑するのをみかねて担当役人の志村勝蔵が彼らに詩の作り方を教えたという話を収めるが、これも『北窓瑣談』後編卷一に見える。なお、『瑣談』では志村藤蔵に作り、「先年諸国漫遊して、京師にも久しく逗留せし学者なり。仙台侯の儒員なり」という。これは通称を東蔵といった志村東嶼（宝暦二年「一七五二」→享和二年「一八〇二」）のことであろう。

東嶼については、富士川英郎『菅茶山』上（福武書店、平成二年）の第34節に「天明二年、三十一歳にして京都に遊んで、久米訂齋に見え、それより六年間、中国、四国を周り、さらに九州に渡って、それより六年間、中国、四国を周り、さらに九州に渡って、薩摩や肥後や筑前を経て、故郷へ帰った。享和元年、幕府に召されて、頼

春水、赤崎海門とともに、昌平黌で経を講じた」という。もつとも、奥州に漂着したのは広東人で、これを長崎に護送したのは東嶼の兄弟で同じく仙台の儒員志村五城(名は実因、字は子環。延享三年「二七四六」天保三年「二八三三」と石溪(名は弘強、字は伸行。菊隠と号す。明和六年「二七六九」弘化二年「二八四五」とであった。ちなみに、石溪のことは『菅茶山』第66節に引く備後神辺の藤井士晦の行状を記した「暮庵先生行状略記」に見え、五城のことは長崎の儒者吉村迂斎(名は正隆、字は子興。寛延二年「一七四九」文化二年「二八〇五」)の『吉村迂斎詩文集』(昭和四十七年刊)に附された吉村栄吉編「吉村迂斎関係略年譜」に記されている。

※橋南谿の伝記については、佐久間正圓『橋南谿』(橋南谿伝記刊行会、昭和四十六年)がある。また宗政五十緒『東西遊記』(平凡社東洋文庫、昭和四十九年)および新日本古典文学大系『東路記』(己巳紀行西遊記)(岩波書店、平成三年)の解説参照。『北窓瑣談』は、『日本随筆大成 新装版第二期第15巻』(吉川弘文館、昭和四十九年)に収録。

志村東嶼については、高橋博巳氏の『画家の旅、詩人の夢』(ベリカン社、平成十七年)の「一八〇〇年(寛政十二)、奥州への旅」に言及されているのを参照。

京洛の儒者―福井小車・猪飼敬所

「安永・天明期の京都」において、東陽と交流のあった儒者については触れておいたが、ほかにも関わりのあった京都在住の人物をここに補っておく。

福井小車(？)寛政十二年「二八〇〇」

名は軓^{げつ}、字は小車、通称嚴助。号は敬斎。衣笠山人とも号した。京都の人。後に兄の後を受けて幕府の医官となった。その兄は福井楓亭(享保十年「一七二五」寛政四年「一七九二」)。名を軓^{げつ}、字を大車といい、兄弟の名と字とは『論語』為政篇の「大車に軓無く、小車に軓無くんば、何を以て之を行はんや」から取る。《軓》《軓》は、車の大小で名称を異にするが、車の轆^{なぐさ}と横木とを連結させる金具。東陽より二十歳ぐらゐは年長。

小車の師承関係については、『近世藩校における学派学統の研究上』や『日本漢学大事典』・『国書人名辞典』には蟹養斎(字は維安。宝永二年「一七〇五」安永七年「一七八八」)に就いて宋学を修めたというが、詳しいことは不明。頼祺一『近世後期朱子学派の研究』(溪水社、昭和六十一年)116・117頁に、「小車の学派は正確なところ明らかでないが、口碑によれば古義学派である」とされる。それを裏付けるごとく、中村幸彦「宮崎筠圃と古義堂」(『神田博士還暦記念書誌学論集』所収。昭和三十三年。後に『中村幸彦著作集』第十一巻)に、伊藤東所(名は善韶。享保十五年「一七三〇」文化元年「二八〇四」)のもとで東涯の詩文集『紹述先生詩文集』刊行に協力したことが見える。また小車は岡白駒(字は千里。号は龍洲。元禄五年「一六九二」明和四年「二七六七」)について学んでおり、明和七年に洛東吉田山近くの迎称寺に建立された「龍洲先生之墓」の碑陰にその撰になる「龍洲先生墓碣銘」が刻されている。白駒は、古注疏を主とする経学者であるとともに、白話小説に句読字解を施したことで知られた人物。後述の高山彦九郎が京に上った際、その門をたたき、門人の小車とも交友があった。

東陽に七律「福井小車を訪ぬ」詩(『詩鈔』巻四)がある。

春風求友嘯黃鸝 春風 友を求めて黄鸝嘯る

負郭幽莊隱士棲 負郭の幽莊 隱士棲む

養病烟霞深避跡 病を養ひて烟霞深く跡を避け

追芳桃李自成蹊 芳を追ひて桃李自ら蹊を成す

俗儒迎客修邊幅 俗儒は客を迎ふるに辺幅を修むるも

清徳與人無町畦 清徳 人と町畦無し

永日花窓後庭宴 永日 花窓 後庭の宴

新詩相和醉中題 新詩相和し醉中に題す

○求友『詩経』小雅「伐木」に「木を伐る丁丁鳥鳴く嚶嚶。(中略)

嚶として其れ鳴く矣、其の友を求むる声」と。○黄鵬 カラウグイス。

こは日本のウグイス。盛唐・王維の七律「輞川積雨」詩(『三休詩』

卷二)に「陰陰として夏木黄鵬轉る」と。○負郭 こは、都の郊外。

○幽莊 都塵から離れた別荘。初唐・盧照鄰の五古「初夏日の幽莊」

詩に「聞くに高蹤の客有りと、耿介にして幽莊に坐す」と。○烟靄

もや・かすみにつつまれた山水。○避跡 身をかくす。○追芳 花

の香を追つて。主の人柄に引かれての意を含む。○桃李自成蹊『史

記』李將軍伝賛に「諺に曰く、桃李言はざれども、下自ら蹊を成す」

と。○俗儒 学問見識のないつまらぬ儒者。『漢書』元帝紀に「俗

儒は時宜に達せず、好んで古を是とし今を非とす」、ここでは、道

学者をさしているであろう。○辺幅 布帛の広狭の幅。転じて外

見をいう。『後漢書』馬援伝に「公孫述は、反つて辺幅を修飾して、

偶人形の如し」と。『書言故事』卷六、徳量類に「不修辺幅」を挙

げ「礼を作さざるを辺幅を修めずと曰ふ」と。○清徳 高潔な人品

徳義。○町畦 分け隔て。もとは田の区画の意。疊韻語。『莊子』

人間世篇に「後且つ無町畦を為し、亦た之を無町畦と為す」と見え、

中唐・韓愈の五古「南内に朝賀し歸りて同官に呈す」詩に「文才は

人に如かず、行ひ又た町畦無し」というのは、野放図で威儀にかけ

ることをいう。○永日 春のひなが。三国魏・劉楨「公謙詩」(『文選』

卷二十)に「永日遊戯を行ひ、歡樂未だ央きず」と。○花窓 美し

い敷物。

小車はざつくばらん人柄で、東陽は好感を抱いたようだ。「貴殿は病の身を養つて郊外に幽棲されていても、あなたを慕つて客が訪

ねてくる、私もその一人です」。

『日本教育資料五』によれば、小車は天明年間に丹波篠山藩に招

聘されたという。『平安人物志』には、明和三年・安永四年・天明

二年の各版に名が見え、住まいは等持院門前町。この詩は、その内

容からして小車が出仕する以前で、かつ詩の配列からすれば天明四

年以降の作であろう。ちなみに、古賀精里(名は樸、字は淳風。寛延三

年「二七五〇」(文化十四年「一八一七」)が安永五年(二七七六)頃京師

に遊学した当初、この福井小車に従学したという(頼春水『在津紀事』

卷下)。なお、小車は篠山藩に聘せられた後、藩主の命を受けて唐・

玄宗の御註に基づいた『孝経補義』(天明八年後序)を著したほか、

寛政五年(二七九三)『賈子新書』の校正新刻版を刊行しており、同年、

人を介して依頼された豊後国東の儒医三浦梅園(名は晋、字は安貞。

享保八年「二七二三」(寛政元年「二七八九」)の墓碑を撰している(『梅

園全集』上巻、名著刊行会、昭和五十四年)。その一方で寛政四年には明・

丘濬の『大学衍義補』を校訂刊行しているから、宋学にも造詣が深

かったことが知られる。

ただ宋学を蟹養斎に学んだとしても、その学統につながる人物で

はなかったようである。岡崎盧門編の天明六年(二七八六)刊『平

安風雅』に五絶一首が採録されており、端文仲のために編まれた『春

莊賞韻』(寛政十二年刊)にも衣笠山人の名で七絶一首を載せる。東

陽の詩からも頭巾の気に満ち風雅を解せぬ崎門の道学者のイメージ

からは程遠い。

ところで、蟹養斎といえは、東陽の『訛準笑話』(文政元年「一八一八」

自序、文政七年刊)巻上に次のような話柄を載せているので、参考ま

でに挙げておく。

講学家蟹維安、非但徠学を著す。久米順利、花名團次郎、一

派の巨擘なり。故に其の序を丐ひて之に弁せしむ。事を好む者

話を為つて曰く、維安行くこと有り、其の徒呼びて曰く、蟹公

蟹公、^{イカメシクイデタチ}厳装して何くに之く。曰く、仇を報じて徂徠の所に向ふ。問ふ其の帶ぶる所は何物ぞ。答へて曰く、日本第一の久米團次郎。

『非徂徠学』は明和二年(一七六五)の刊(『日本儒林叢書』第三卷所収)。

それに宝暦十年(一七六〇)作の序を冠した久米順利(元禄十二年「一六九九」)・天明四年「一七八四」は、浅見綱斎(承応元年「一六五二」)・正徳元年「一七一」・佐藤直方(慶安三年「一六五〇」)・享保四年「一七一九」とともに崎門三傑と称された三宅尚斎(名は重國。寛文二年「一六六二」)・寛保元年「一七四二」の女婿で、訂斎と号した。

ついでながら、東陽の『薈瓊録』(『日本藝林叢書』第一卷 巻下に「尾張ノ布施維安ガ著セル治邦要書ト云ヘル書ハ道学家ノ腐論モ少カラザレドモ、其中ニ格言モ頗ル多シ」として、「又言ク人間ハナグサミゴトノ無クテハ叶ハズ、故ニ歌舞アリ、孝経ニ移レ風易レ俗莫レ善」於楽「トハ正シキ事ヲ樂ニ作リタルハ人ノ情其調ニ移リテ心ニシミ入ルナリ。淫乱遊蕩ノ行ヲ絃歌ニノセテ舞カナデバ風俗ノ乱レ壞サデヤマルベキ、痛大息スベキ事ナリ」と述べる箇所がある。この養斎の見方は前稿「文化十一・十二年の江戸」の大田南畝の項で指摘した、当時巷で流行する歌舞音曲に対する東陽のそれと揆を一にしている。学派を異にしても一藩の文教をつかさどる儒者の立場として同様の見解を抱いていたのである。なお、『治邦要書』は元文元年(一七三〇)自序の『治邦要旨』三巻のことである。

※「龍洲先生墓碣銘」については、寺田貞次『京都名家墳墓録』に原文を収録。竹治貞夫『阿波漢学史の研究』第三章「那波魯堂」に訓読文を載せる。

蟹養斎については、尾張藩儒で明倫堂教授となった細野要斎(文化八年「一八二二」)・明治十一年「一八七八」が安政四年(一八五七)に刊行した『尾張名家誌』が詳しい。それによれば、安藝の人で、幼くして尾張の布施氏に養われ、すでに長じて京に上り、三宅尚

斎に学んだ。その高弟五人のうちの一人(他は、多田維則・久米順利・石王当先・井沢剛中)。のちに尾張藩に仕え名古屋に居住したが、故あってこれを辞し、伊勢で没した。名古屋の郷土史家、市橋鐸氏に『尾藩知名人年譜抄(七)』(私家版、昭和五十六年)所収の略年譜がある。

また大塚観瀾輯・楠本端山増補『日本道学淵源續録』(昭和九年刊)巻四に久米訂斎先生、蟹養斎が立項されており、蟹養斎の項の増補には「俗謡曰、蟹殿蟹殿何處邊御座留。徂徠賀島邊敵打。於腰乃波彼何氏御座留。日本一乃久米断二。蓋証之也」(俗謡に曰く、蟹殿蟹殿何處へござる。徂徠が島へ敵打。お腰の物は何でござる。日本一の久米断二と。蓋し之を証するなり)とある。

猪飼敬所(宝暦十一年「一七六二」)・弘化二年「一八四五」

名は彦博、字は文卿。敬所はその号。その父は近江坂本の出で京都西陣の糸商。天明三年(一七八三)、はじめ石門心学の手島堵庵(名は信、字は応元。享保三年「一七一八」)・天明六年「一七八六」に学び、ついで薩埵雄甫(名は元雌、号は藁川。元文三年「一七三八」)・寛政八年「一七九六」に就いた。その雄甫を介して巖垣龍溪(名は彦明、字は亮卿。寛保元年「一七四二」)・文化五年「一八〇二」に入門。寛政三年(一七九二)西陣に開塾。天保二年(一八三一)津藩に招聘され講学。東陽より四歳下。

薩埵雄甫・巖垣龍溪と、いずれも東陽が在京時代に交流があった人物であり、とりわけ龍溪には詩会によれば酒席を共にする機会がよくあった。このことは、「安永・天明期の京都」の巖垣龍溪の項でみたとおりである。敬所も龍溪のもとでは詩作に励んでいたらしい。

さて、東陽が敬所に贈った詩は二首ある。その一つは七律で「猪飼文卿に贈る」(『詩鈔』巻四)と題して、次のように詠じられている。

これは天明八年ごろの作であろう。

道隨時運任汚隆 道は時運に随ひ汚隆に任す

結髪優游講学中 結髪して優游す講学の中

耿介全無今世態 耿介にして全く今世の態無く

清真自有古人風 清真にして自ら古人の風有り

千秋意氣歌相和 千秋 意氣 歌相和し

一夜文章話未終 一夜 文章 話ること未だ終らず

冷笑俗儒多醒醒 冷笑す俗儒多く醒醒

鑾槽陂裡叔孫通 鑾槽陂裡の叔孫通なるを

*醒醒は、醒醒の訛字。陂は鄙の訛字。

○汚隆 衰退と隆盛。『礼記』檀弓上に「道隆なれば則ち従つて隆にし、道汚なれば従つて汚にす」と。○結髪 成人すること。○優游 ゆつたりとあそびたのしむ。晷韻語。前掲、「石川太一が郷に還る」詩の語釈参照。○耿介 節操を持し世俗におもねらないさま。双声語。戦国楚・宋玉「丸弁」其五（『楚辭』卷八）に「独り耿介にして随はず、願はくは先聖の遺教を慕はん」と。○清真 すつきりとして純真。『世説新語』賞譽篇に西晋・山濤が阮咸を評して「清真寡欲、万物も移す能はざるなり」と。李白の五古「王右軍詩」に「右軍本と清真、瀟灑にして風塵を出づ」と。○今世態 今風の（軽薄な）態度。宋・張沢民の七律「梅花二十首」其五（『瀛奎律髓』卷二十、梅花類）に「韻士随はず今世の態、仙姝猶ほ作す古時の粧」と。○古人風 古人の風格。中唐・白居易の五古「王質夫を哭す」詩（『白氏文集』卷十二）に「憐れむ君に古人の風あり、重ねて君子の儒有るを」と。○俗儒 道学者を指している。前に挙げた「福井小車を訪ぬ」詩の語釈参照。○醒醒 細かなことに拘るさま。こせこせ。晷韻語。六朝宋・鮑照「放歌行」（『文選』卷二十八）に「小人自ら醒醒、安んぞ曠士の懷を知らんや」とあり、その李善注に「漢書に酈食其曰く、其の將醒醒、苛礼を好むなり」と。○鑾槽陂裡叔孫通 『書言故事』

卷十、拾遺類に「俗に醒醒を鑾槽陂裡と言ふ」とし、「東坡、程頤に戯れて曰く、鑾槽陂裡の叔孫通と謂ふ可し」と。東坡の故事は、北宋・孫升「孫公談圃」上に「司馬溫公の薨する、明堂（天子の廟）の太享（祖先を祀る儀式）に当たる。朝臣は齋を致すを以て奠（葬儀）に及ばず。肆赦（恩赦）畢り、蘇子瞻同輩を率いて以て往く。程頤固く争ひ、論語の（子 是の日に於いて哭すれば、則ち歌はず）を引く。子瞻曰く、明堂は乃ち吉礼、歌へば則ち哭さずと謂ふ可からざるなりと。頤又た司馬の諸孤弔を受くるを得ざるを論す。子瞻戯れて曰く、頤は煥槽陂裡の叔孫通と謂ふ可しと。聞く者之を笑ふ」と見える。『論語』は、述而篇。（叔孫通）は、前漢の儒者。高祖劉邦が天下を取った当初は、功臣と宴を催すと「群臣飲んで功を争ひ、或いは妄りに呼び、剣を抜きて柱を撃つ」ありさまだったが、叔孫通が礼式を定め遵守させた結果、高祖は「吾れ乃ち今日皇帝の貴きを知るなり」として満足したという（『漢書』叔孫通伝）。『蒙求』巻上の標題に「叔孫制礼」がある。ちなみに、清・胡文英の『吳下方言考』に「蘇東坡、程伊川と事を議して合はず。之を議つて曰く、頤は鑾槽陂裡の叔孫通と謂ふ可し矣と。鑾槽とは、執拗にして人心をして適はしめざるを謂ふなり。吳中、執拗生氣を謂ひて鑾槽と曰ふ」と。（生氣）は腹立ち、怒り。

「貴君はつまらぬ儒者どもが細かい礼式に拘つてうだうだいうのを冷ややかに鼻で笑つてござる」。

東陽が在京中、当地の儒者の多くをあまり評価していなかったことは、「安永・天明期の京都」において指摘したように、西山拙斎（享保二十年「二七三五」寛政十年「一七九八」）に寄せた七律「備中の西山子雅に寄す」詩（『詩鈔』巻四）の中で「洛儒多くは是れ麒麟植（こけおとし）、未だ必ずしも遺経をば爾許く修めず」と述べているし、後に挙げるように尾張の恩田仲任に対しても「問ふを休めよ洛儒鞭賈の妝（見掛け倒し）」と書いていることから窺えるが、敬所に

ついてはおそらく詩会に同席したおり日頃の勉強ぶりやその学問の一端を知って、ともに語るに足る人物だとみなしたのでろう。

もう一首は、「猪飼文卿に似す」(『詩鈔』巻六)と題する六言絶句で文化十二年(一八一五)以降の作とみられる。

綵筆精華擅世 綵筆の精華 世を擅にし

明霜分義横秋 明霜の分義 秋に横はる

博物多益辨 博物 多益ます弁ず

願言與子偕遊 願はくは言に子と偕に遊ばん

○綵筆 詩文をいう。杜甫の「秋興八首」其八に「綵筆昔曾て氣象を干す」と。○明霜分義(分義)は、名分義理。六朝宋・袁淑「曹

子建の樂府白馬篇に倣ふ」(『文選』卷三十二)に「義分は霜よりも明らかに、信行は直なること弦の如し」と。晩唐・薛逢の七律「秋に

驚く」詩に「明霜の義分は虚話と成り、阜俗の文章は暗投を惜しむ」と。○横秋 六朝梁・孔稚圭「北山移文」(『文選』卷四十三、『古文

真宝後集』巻五)に「風情日に張り、霜気秋に横はる」と。○博物博識。『左氏伝』昭公元年に鄭の子産について「博物の君子なり」と。

○多々益弁 多ければ多いほどよく処置する(『漢書』韓信伝)。「書言故事」巻六、讚嘆類にも挙げ、「多く事を了するを多々益々弁ずと曰ふ」と。○願言 この表現、古くは『詩経』邶風「二子乗舟」

に「願うて言に子を思ふ」とある。『言』は、助辞。ただし、鄭箋は我と訓じる。

結句に「ご交遊のほどよろしく」とはいうものの、敬所に言わせれば、実際のところ、東陽とは二三度顔をあわせただけで、深く交友関係を結ぶには至らず、手紙のやりとりもなかったという。後年、敬所が東陽の弟子でもあった川村竹坡(名は尚迪、字は毅甫。寛政九年「一七九七」～明治八年「一八七五」)に宛てた「津阪氏祠堂制度祭礼儀節考、御示被下候」と始まる手簡(『猪飼敬所先生書東集巻二』、『日本儒林叢書』第三巻および『日本藝林叢書』第四巻所収)に、

津阪氏、唐流ノ物好浮薄ヲ誠ル事宜ナル哉。此考二制セラル、事、小藩ノ士大夫ハ辨スル事能ハズ。大藩ニ仕ル人ニハ大幸トイフベシ。東陽翁篤学礼ヲ重ゼラルル事可敬々々。老拙初学之時、東陽ハ先輩、非我倫、而三度面会セシ迄ニ不親、其後ハ互ニ學術之事モ不聞及、往年ヨリ書信ニテモ通候テ、互ニ切磋モ可致ト今更残念ニ存候。

と回想している。とはいえ、東陽に「逸史糾謬の序」と題する一文がある【資料篇③】。『逸史』は、大坂懷徳堂の第四代学主で朱子学者の中井竹山(名は積善、字は子慶。享保十五年「一七三〇」～文化元年「一八〇四」)が著した徳川家康の編年体の一代記で、寛政十一年(一七九九)序刊。それについて、敬所は事実誤認や語句の誤謬を糾した『逸史糾謬』を著したのである。ただし、『日本儒林叢書』第四巻(文政十二年「一八二九」洛下儒隱瞽叟の序あり)に収めるそれに東陽の序は載せられていない。

※猪飼敬所の事績については、猪飼彦續筆記の『於多満幾』(『史籍雜纂』第三所収)が基本資料で、それをふまえて書かれた森銃三「猪飼敬所」(『森銃三著作集第二巻人物篇二』、中央公論社、昭和四十六年)がある。また三村竹清「猪飼敬所」(初出は『書苑』八ノ一二)、『三村竹清集七』所収、青裳堂、昭和六十年)参照。

尾張の儒者・隠士―恩田仲任・岡田新川・秦滄浪／西河子発

尾張は東陽が15の歳から三年間、村瀬氏に就いて医術を学んだ曾遊の地である。また天明八年(一七八八)の大火に遭って京での暮らしが立ち行かなくなり一旦帰郷したあと、一時逗留した場所でもあった。その間の東陽の動静や交友関係はよくわからない。ただ東陽の集には、恩田仲任・岡田新川それに秦滄浪といった尾張名古屋

の儒者および海西郡島地の隠士西河子発の名が見えるので、彼らに贈った詩を挙げておく。

恩田仲任（寛保三年「一七四三」～文化十年「一八一三」）

名は維周、字は仲任。号は蕙楼。松平君山（名は秀雲、字は土龍。

元禄十一年「一六九七」～天明三年「一七八三」に師事。尾張藩士岡田宗愛の子。継述館総裁となり明倫堂教授を兼ねた。次項に挙げる岡田新川の実弟。東陽より十四歳上。

京都遊学中の作に七絶「寄せて尾張の恩田仲任に答ふ」（『詩鈔』卷七）がある。

徳性本淳才氣揚

徳性本と淳にして才氣揚ぐ

紛綸經學煥文章

紛綸たる經學 文章煥たり

大邦自足良師友

大邦自ら足る良師友

休閒洛儒鞭賈妝

問ふを休めよ洛儒鞭賈の妝よそは

○徳性『中庸』に「君子は、徳性を尊びて問學に道り」云々と。

○紛綸 学問が広く深いこと。前掲、「懷を文卿に寄す」詩の語釈

参照。○煥文章（煥）は、輝く。晩唐・杜牧「華清宮三十韻」詩

に「星斗文章煥たり」と。○大邦 大藩。ここは尾張藩六十二万石

をいう。○洛儒 京都の儒者。○鞭賈妝 むちを売る商人が、粗悪

なむちを高級品らしく見せかけて売り、そのむちを買った金持ちの

話が中唐・柳宗元の「鞭賈」（『柳河東集』卷二十一）に見える。

「大藩たる尾張名古屋には良き師友がたくさんおいでになる、京洛

の儒者なんぞは見掛け倒しにすぎません」。

仲任から在京の東陽に、自分は尾張名古屋の田舎儒者だが、京のみやこには名の知られた鴻儒碩学が多くおり、貴君は恵まれた環境のなかで学問ができて羨ましい、といった内容の詩が寄せられたのに答えたものらしい。

また七律に「恩田仲任を過りて話して別る」（『詩鈔』卷四）がある。

相逢幾日展交情 相逢ふこと幾日ぞ交情を展ふるも

又復匆匆賦遠征 又復た匆匆として遠征を賦す

只合杯樽消別恨 只だ合に杯樽別恨を消すべし

莫教絃管作離聲 絃管をして離聲を作さしむる莫かれ

霜楓秋冷山中宿 霜楓秋冷ややかなり山中の宿

雲月宵寒海上行 雲月宵寒し海上の行

悵望空勞各天夢 悵望して空しく勞す各天の夢

何時久要慰平生 何れの時にか久要 平生を慰めん

○相逢幾日 南宋・楊万里的七古「劉覺之の蜀に帰るを送る」詩（『誠齋集』卷三十一）に「相逢ふこと幾日ぞ又た相別る」と。○匆匆 あ

わただしいさま。○遠征 ここは遠遊の意。○離聲 送別の宴での

音楽。六朝宋・鮑照「東門行」（『文選』卷二十八）に「離聲客情を断

ち、賓御皆淚零つ」と。○霜楓 ここでは紅葉をいう。杜甫の五

排「東屯月夜」詩に「青女霜楓重く、黃牛峽水喧し」と。○海上行

桑名と宮とを結ぶ七里の渡し。○各天 遠く離れた空の下。前掲、「和

して久保希卿に答ふ」二首其一の語釈参照。○久要 旧い約束。『論

語』憲問篇に「久要平生の言を忘れず」と。○慰平生 北宋・邵雍「東

軒の消梅初めて開き客に酒を勧む二首」其二（『伊川擊壤集』卷六）

に「辞すること莫かれ行樂して平生を慰めること」と。

拙稿「津阪東陽「寿壙銘」訳注稿」において、天明八年の大火後、

京から郷里にもどり江戸に赴こうとして故あって途中で引き返しそ

のまましばらく尾張に留まっていた時期の作としたが、具体的な場

所は特定できない。名古屋の自宅ではなく出先に仲任を訪ねたおり

に詠じたものようだ。

岡田挺之（元文二年「一七三七」～寛政十一年「一七九九」）

名は宜生、通称は仙太郎。字は挺之。新川はその号。松平君山に

師事。明倫堂教授、継述館総裁を経て寛政四年（一七九二）、明倫堂

の督学となった。東陽より二十歳上。

寛政四年頃の作とみられる七律に「和して岡田挺之に答ふ」詩（『詩鈔』巻四）がある。これは新川から寄せられた詩に唱和して答えたもの。

昨遊廻首邈滄溟

昨遊首を廻らせば滄溟邈なり

日夜相逢眼自青

日夜相逢うて眼自ら青し

嘖嘖難當堅白辯

嘖嘖当たり難し堅白の弁

紛紛堪著大玄經

紛紛著すに堪ふ大玄經

筆鋒揮去雲烟勢

筆鋒揮ひ去る雲烟の勢

棋子拾来龍鳳形

棋子拾ひ来たる龍鳳の形

見际新詩多故實

見ざる新詩 故実多く

叮嚀解與塾生聽

叮嚀に解与し塾生に聴かしむ

○昨遊 以前の遊歴。

○廻首 振り返る。○滄溟 大海原。○眼自青 快く受け容れられることをいう。『蒙求』巻下の標題に「阮籍青眼」がある。なお、『書言故事』巻三、会遇類に青眼の語を挙げ、「人の愛厚を荷ふを極めて青眼青眇を辱うすと云ふ」と。○嘖嘖 多弁のさま。疊韻語。『史記』信陵君列伝に「晋鄙は嘖嘖たる宿将」とあり、索隠に「嘖嘖は、詞句多きを謂ふ」というが、『史記』の注としては妥当ではないものの、ここはその意味。○堅白弁 戦国趙の公孫龍は堅白同異の弁を唱えた。『史記』孟子荀卿列伝に「趙に亦た公孫龍有り、堅白同異の弁を為す」と。○紛紛 学問が広く深いこと。前掲「懷を文卿に寄す」詩の語釈参照。○大玄經 前漢・揚雄が『易経』になぞらえて著した書物。楊雄の「解嘲」（『文選』四十五）に「哀帝の時（中略）、時に雄は方に大玄を草創し、以て自ら守ること有りて泊如たるなり」と。この句、新川が揚雄のような大学者であることをいう。○雲烟勢 筆勢のさまをいう。○棋子 碁石。○龍鳳形 晩唐・段成式『酉陽雜俎』巻十二、語資に「晋の羅什、人と碁す。敵の死子を拾ふに空処龍鳳の形の如し」と。○故

実 故事、典故。○叮嚀 繰り返し、仔細に。丁寧と同じ。中唐ごろからの俗語で、疊韻語。

新川は、弁舌が立ち書に秀で囲碁を善くした人物であつたらしい。「貴殿の詩には典故表現が多く用いられており、塾生に解説しながら聞かせております」。

ところで、「博覧記誦を崇んだ erudit」（神田喜一郎『日本填詞史話』上、第十二節）と評される松平君山を師と仰いだ新川には寛政十一年（一七九九）刊の和文随筆『秉穂録』があり、東陽にはこれをふまえて書いた記事がある。例えば、先の橘南谿の条で言及した「藁吾能毒の事を記す」で、前半は藁吾の効能の話だったが、それには続きがあり、後半には尾州のとある村でその毒にあたつて亡くなった塾のこどもと手習いの師匠との話を記しているが、これは『秉穂録』第一篇巻下に見えるのによるものである。

また『秉穂録』のほか、寛政七年（一七九五）刊の『彼此合符』（『日本藝林叢書』四に収録）があり、その博識ぶりを發揮して和漢の類似する故事逸話を抄出するが、こうした新川の著述は東陽にも刺激を与え、『蒼瓊録』などにも影響を及ぼしているのではないかと思われる。

※岡田新川については、同門同甲の磯谷正卿（字は子相、通称寛左衛門、号は滄洲。元文二年「一七三七」→享和二年「一八〇二」）に「新川先生遺愛碑」があり、『芳躅集』（『名古屋叢書』第二十五巻、雜纂編（二）に翻刻）の人物に収載。『秉穂録』は、『日本随筆大成 新装版第一期第20巻』（吉川弘文館、昭和四十九年）に収録。

なお、新川に関する論考として田中秀樹『朱子学の時代―治者の（主体）形成の思想』（京都大学出版会、平成二十七年）第五章「一八世紀後半、尾張藩儒石川香山と岡田新川とのあいだ」、高橋博巳「尾張文人と朝鮮通信使」（『国語と国文学』平成二十九年十一月号）がある。田中・高橋両氏の論考からは、新川のみならずその周辺の人物やそれに関する伝記資料などについて多大の教示を得た。

秦滄浪（宝暦十一年「二七六二」→天保二年「二八三二」）

名は鼎、字は士鉉、滄浪はその号。三河刈谷藩儒秦峨眉の子。寛政二年（一七九〇）尾張藩に仕え、明倫堂典籍、教授並となる。同九年辞職。東陽より四歳下。

『詩鈔』卷十に「尾藩の秦士鉉海を渡つて旧を訪ぬ。留飲すること累日、景山大夫の別墅に邀宴し、韻を分かちて惜春を賦す。士鉉明日將に告別せんとす。余、年は古希に近く、士鉉も亦た耳順を踰ゆ。再会期す可からざるなり」と題する七絶がある。景山大夫は、藤堂高芥（天明五年「二七八五」→天保十一年「二八四〇」）のこと。詩の配列からすると、文政四年（一八二二）の作で、時に東陽64歳、秦滄浪は60歳。

芳園伴客醉花茵

芳園 客に伴ひ花茵に酔ふ

五十餘年久要親

五十餘年 久要の親

莫怪老懷向隅泣

怪しむこと莫かれ老懷隅に向つて泣くを

惜春併惜欲婦人

春を惜しみ併せて帰らんと欲する人を惜しむ

む

○芳園 花咲く庭園。李白「春夜桃李の園に宴するの序」『古文真宝』

後集卷三）に「桃李の芳園に会して天倫の樂事を序す」と。○花茵

美しい敷物。○久要親 古い付き合い。○老懷 老人ならではの感

傷。○向隅泣 西晋・潘岳「笙の賦」『文選』卷十八）に「衆堂に満

ちて酒を飲めども、独り隅に向つて涙を掩ふ」とあり、李善注に「説

苑」貴徳篇に「今、堂に満ちて酒を飲む者有り、一人独り索然とし

て隅に向ひて泣く有らば、則ち一堂の人は皆樂しまざるが如し」と

いうのを挙げる。

「華やかな宴席の隅で涙にくれているのを怪訝に思わないでほしい。行く春と去る君との別れがせつないのだ」。

この詩によれば、東陽が15の歳から三年、医術を学ぶため尾張に遊学していたところに知り合つたらしいが、その経緯詳細は不明。こ

のことは、すでに津坂治男氏に指摘がある。また同氏によれば、津藩の有造館設立に際し、東陽は文政二年（一八一九）夏に尾張藩校明倫館を見学に訪れたことがあり、その節は秦鼎のつてを頼つて願ひ出たらしい。（『小治田之真清水』第一巻、学館乃起源）

なお『詩鈔』では、この次に「送別」詩があるが、滄浪との別れを詠じた作であろう。

白髮相逢自有涯

白髮相逢ふは自ら涯有り

咽来老淚慘離懷

咽び来たる老淚 離懷慘たり

河梁回去渾如病

河梁回り去つて渾て病むが如し

一向蒙衾臥雨齋

一向衾を蒙りて雨齋に臥す

○離懷 別れのつらさ。盛唐・岑参「六月十三日水亭にて華陰の王少府が県に還るを送る」詩に「失路情は適ふ無く、離懷思ひは堪へず」と。

○河梁 送別の地をいう。前漢・李陵の作とされる「蘇武に与ふ三首」其三『文選』卷二十九）に「手を携へて河梁に上る、遊子暮れに何くにか之」と。○一向 ずっと。○渾如病 中唐・姚合「白

賓客を辞して帰りし後に寄す」詩（『全唐詩』卷四九七）に「家人我

を怪しむ渾て病むが如きを」と。○蒙衾 布団をかぶる。

「貴君とここで別れてからはすっかり氣ぶせて、ずっと布団をかぶつたまま書齋に臥して雨音を聞いていることでしょう」。

※岡田新川・恩田仲任・秦滄浪については、前掲、細野要齋『尾張

名家誌』に小伝がある。『名古屋市史 人物編第二』（名古屋役所、

昭和九年）の記述はおおむねそれに拠る。なお、尾張漢字の全体

像ならびに特徴については、佐野公治氏の「尾張の漢字」（『新し

い漢字漢文教育』第34号、平成十四年）に簡にして要を得た紹介

がある。

西河子発（享保十九年「一七三四」→寛政六年「一七九四」）

名は瑛・景瑛、字は子発。通称甚助。号は菊莊。もとは名古屋の

名は瑛・景瑛、字は子発。通称甚助。号は菊莊。もとは名古屋の

名は瑛・景瑛、字は子発。通称甚助。号は菊莊。もとは名古屋の

名は瑛・景瑛、字は子発。通称甚助。号は菊莊。もとは名古屋の

名は瑛・景瑛、字は子発。通称甚助。号は菊莊。もとは名古屋の

名は瑛・景瑛、字は子発。通称甚助。号は菊莊。もとは名古屋の

人で、浅井氏。海西郡鳥地村（現、弥富市鳥ヶ地）の西河景長の養子となり、尾張藩家老志水甲斐に仕えた。著に『孝女曾与伝』『尾藩孝子伝』がある。東陽より十七歳上。

東陽が京に遊学する以前、尾張での作に七律「夏日、西河子発が隠居に題す」詩（『詩鈔』巻四）があり、「半仙」と称して世間から半ば身を退き、詩琴酒を楽しみ仏法僧に帰依した彼の姿を詠じている。さらに天明の大火後、郷里にもどり仕官のつてを求めて各地を遊歴していた（とはいっても尾張がほとんどのようだが）時期には士発のところに寄宿したことがあった。「途中小雨、夕べに至って快晴」と自注を附した七律「尾州鳥地村にて西河子発の隠居に寓宿す。士発、佐野生等を招き小集す。因つて四韻を成す」詩（『詩鈔』巻四）に云う、

湖海忘機與世疎 湖海 機を忘れ世と疎し

閑中樂事只耽書 閑中の樂事 只だ書に耽る

孤烟蘆雨漁人路 孤烟蘆雨 漁人の路

竹塢梧垣隱士居 竹塢梧垣 隱士の居

縱是先生常閉戸 縱ひ是れ先生常に戸を閉ざすも

能無長者自廻車 能く長者の自ら車を廻らす無からんや

高亭風月涼天夕 高亭の風月 涼天の夕

觴咏相留興有餘 觴咏相留りて興餘り有り

○湖海 江湖。民間。○忘機 機巧の心をなくす。俗念を忘れる。

李白「終南山を下り斛斯山人を過ぎる」云々と題する詩に「我酔へば君も亦た樂しみ、陶然として共に機を忘る」と。○与世疎 世間（官界）と疎遠になる。南宋・劉克莊の七絶「真舎人の江西に帥たるを送る八首」（『後村先生大全集』巻三）に「身已に民と為りて世と疎し」と。

○孤烟蘆雨 水辺の孤や蘆にかかる露や雨。明末清初・錢謙益の七絶「戊戌新秋の日、吳巽之が孟陽の画扇を持して題を索む。為に賦す十絶句」其四（『有学集』巻九）に「孤烟蘆雨白紛紛」と。○竹塢 竹を植えた土塁。晩唐・劉滄の七律「友人の郊居を訪ぬ」詩

に「竹塢蒨庭故居に似たり」と。○梧垣 梧桐の垣。錢謙益の七絶「戊戌の中元（中略）偶々王孟端の画竹を見て漫に題す二絶」其二（『有学集』巻九）に「竹塢梧垣久しく陸沈す」と。○閉戸 『蒙求』巻上の標題に「孫敬閉戸」と。○長者 高貴なお方。『史記』陳丞相世家に「家は乃ち負郭の窮巷、弊席を以て門と為す。然れども門外多く長者の車轍有り」と。杜甫の五律「雨に對して懷を書し走らせて許主簿を邀ふ」詩に「座に賢人の酒に對し、門に長者の車を聽かん」と。○高亭（見晴らしのよい）高い亭。○觴咏 酒を飲み詩を詠む。〈咏〉は、詠と同じ。東晋・王羲之「蘭亭の記」（『古文真宝』後集巻四）に「糸竹管絃の盛無しと雖も、一觴一詠、亦た以て幽情を暢敘するに足れり」と。

この人は『尾藩孝子伝』に掲げられた松平君山の天明三年87歳の序に「西河子発は余が門人なり」というようにその門下で、君山の七律に「鳥地に遊んで西子発に和す」詩（『弊帚集』巻五）がある。もつとも、中年にして世を避け、晩年は子供相手に書を教えていたらしい。やはり序を寄せた同門の岡田新川には、その死を悼んだ七律「西河子発を哭す」詩（『園圖詩草』巻四）があり、次のように詠じている。

擔囊笈負事吾師 囊を擔ひ笈を負ひて吾が師に事ふ

菰苑周旋彼一時 藝苑周旋す彼も一時

早謝塵紛稱隱逸 早く塵紛を謝して隱逸と称し

晚將書法課群兒 晩に書法を將て群兒に課す

生前自適忘憂物 生前自適す忘憂の物

身後猶留入夢詩 身後猶ほ留む夢に入る詩

何料奄然登鬼錄 何ぞ料らん奄然鬼録に登らんとは

空含涕淚勒新碑 空しく涕淚を含んで新碑を勒す

○擔囊負笈 宋・祝穆『古今事文類聚前集』巻二十三、人道部、師に「擔囊負笈」の条あり、「吳商は故の鄭人。学は五經百氏に通ず。四方の学ぶ者囊を擔ひ笈を負ふ、勝けて數ふ可からず」と。『書言

故事』卷三、遊学類に「遊学を笈を負ひて師に従ふと曰ふ。漢の蘇章、笈を負ひて師を追ふ。千里を遠しとせず」とあり、「笈は書箱」と注する。○吾師 松平君山のこと。○周旋 立ちまわる。○彼一時あの時はあの時。『孟子』公孫丑下に「彼も一時、此れも一時なり」と。○塵紛 ごたごたとした俗世間。○忘愛物 酒のこと。晋・陶潜「飲酒」其七（『古文真宝』前集卷二に「雜詩」として収載）に「此の忘愛の物に^{うか}泛べ、我が遺世の情を遠くす」と。○入夢詩 後述の新川の碑文に亡くなる前に「夢中に句を得」それが絶筆となった逸話を載せる。○奄然 たちまち。○登鬼録 死ぬこと。『鬼録』は、冥界にある死者の名簿。鬼籍。『東坡志林』巻六に「二君皆已に鬼録に登る」と。○勒 石に彫る。なお、子発の墓は鳥ヶ地の弥勒寺にあり、法号は「海徳院騰雲石龍居士」。岡田新川の碑文を刻す（『芳躅集』の天部に収載）。

ところで、西河子発の住む鳥地村は、伴藁溪『近世畸人伝』巻一に登場する竹の画を善くした儒者宮崎筠圃（名は奇、字は士常。通称常之進。享保二年「一七一七」〜安永三年「一七七四」の出身地で、18（後述『尾藩孝子伝』では17）のとき父母に従い京に遷るまで過ごしたところであった。孝行で知られた筠圃については『尾藩孝子伝』に伝があり、それによれば子発は筠圃の「外戚の従弟」である。ちなみに、新川に五絶「西河氏の画竹に題す」詩（『鬲園詩草』巻四）があるように、子発もよく竹を画いたらしい。また東陽に「宮筠圃の事を記す」（『文集』巻八）があり、森銑三「宮崎筠圃」（『森銑三著作集第四巻人物篇四』）に書き下し文を載せる。

※西河子発の『孝女伝』や『尾藩孝子伝』については、市橋鐸『なごや本綴足』（文化財叢書48）に解題があり、『孝子伝』は愛知県海部郡十四山村教育会編『宮崎筠圃先生伝』（昭和十三年刊）に紹介され、『愛知県教育史 資料編近世二』（愛知県教育委員会、昭和五十九年）に翻刻が収められている。また宮崎筠圃については、

福井小車の条に挙げた中村幸彦「宮崎筠圃と古義堂」も参照。

その他の儒者・志士・詩人―神保蘭室・亀井南冥・広瀬蒙斎／高山彦九郎／梁川星巖

神保蘭室（寛保三年「一七四三」〜文政九年「一八二六」）

名は行簡、字は子廉。通称容助。蘭室と号す。米沢の人。江戸で細井平洲（名は徳民、字は世馨。享保十三年「一七二八」〜享和元年「一八〇一」）の嚶鳴館に学んだ。藩主上杉治憲（鷹山。寛延四年「一七五二」〜文政五年「一八二二」）が平洲を米沢に招くと、その供をして帰郷。安永五年（一七七六）藩校興讓館が設立されるとともにその提学となった。東陽より十四歳上。

東陽に五排「米沢提学神保子廉に贈る」詩（『詩鈔』巻三）がある。詩の配列からすれば「奥田三角翁八秩の寿詞」の直前にあることからして、天明二年（一七八二）以前の作。

大邦隆徳望、賢績列侯魁
政自無為化、官皆有用才

才

民人治道洽、文物學宮開
死馬猶堪買、真龍直欲來

ちに来らんと欲す

雅期揮月筆、公燕醉花杯

酔はん

冒許觀花客、從君游一回

肯へて許さん觀花の客、君に従ひて一回遊ぶを

○大邦 大藩。ここでは米沢藩十五万石のこと。○賢績 すぐれた治績。○無為化 盛唐・王維の五排「聖製玄元皇帝像を慶するの作に和し奉る」詩に「無為の化を報ずるを願ひ、齊心自然を学ぶ」と。

○学宮 学校。興讓館をいう。○死馬 戦国時代、郭隗が燕の昭王に、死んだ名馬の骨でも買い取れば、優れた名馬が集まると説いた故事（『戦国策』燕策）。○真龍 ほんものの龍。真にすぐれた人材。六朝梁・任昉「天監三年秀才に策する文三首」其二（『文選』卷三十六）に「朕心を駿骨に傾く、真龍を懼るるに非ず」と。○雅期 風趣に富む好時期。元・劉因「西山の雅会」詩（『静修先生文集』卷十）に「山色旧無く今日濃かなり、雅期新たに得て君と同じうす」と。○揮月筆 筆を揮う。筆は兔の毛で作られることが多く、兔と月とは縁語である。中唐の韓愈・李正封「晚秋鄜城夜会の聯句」に「文を摘めて月毫を揮ひ、剣を講じて霜鏑を淬く」と。○公燕 君公が設けた宴会。〈燕〉は、宴と音通。

結びの二句は、「貴殿と一度花見を一緒にさせていただきませんか」の意であろう。

なお、『文集』卷八に鷹山の藩政改革に関連する逸話を記した「米沢の村媼布を献ぜし事を記す」「米沢の儉政を記す」という二篇がある。前者に「余、米沢の人に見ゆるに、其の美譚を説くも彈く紀す可からず、此れ特だ其の一端耳」と述べているが、この米沢人は、おそらく蘭室であろう。

亀井南冥（寛保三年「一七四三」～文化十一年「一八一四」）

名は魯 字は道載。南冥はその号。その父は筑前早良郡姪浜の医。詩文を徂徠学派の黄檗僧大潮元皓（延宝四年「一六七六」～明和五年「一七六八」）に学び、21歳のとき大坂に出て永富独嘯庵（享保十七年「一七三二」～明和三年「一七六六」）に就いて古医方を学んだ。福岡黒田藩に仕え、藩校甘棠館の祭酒（館長）となるも、朱子学派との軋轢があり、罷免。以後塾居の身となり、自宅の火災により焼死。東陽より十四歳上。

寛政四、五年ごろの作とおぼしき七律に「亀井道載に寄す」詩（『詩

鈔』卷四）がある。

経業修来老更精 経業修め来りて老いて更に精なり

優游玩世任浮生 優游して世を玩して浮生に任す

文章莫道雕蟲技 文章道ふ莫かれ雕蟲の技と

才調堪傳繡虎名 才調伝ふるに堪ふ繡虎の名

絶代佳人遲暮恨 絶代の佳人 遅暮の恨み

各天明月索居情 各天の明月 索居の情

神交空切相思夢 神交空しく切なり相思の夢

千里無由命駕行 千里 駕を命じて行くに由無し

○経業 経書の学業。○老更精 北宋・蘇轍の七絶「医僧鑒清に贈る二絶」其一（『樂城集』卷十三）に「肘後の医方 老いて更に精なり」と。

○優游 ゆつたりと遊びたのしむ。前掲、「石川太一が致仕して郷に還る」詩の語釈参照。○玩世 世間の事をはすにみる。『漢書』

東方朔伝賛に「隠に依つて世を遊び、時に詭ひて逢はず」と。○任浮生 定めなき人生に身を任せる。杜甫の五律「宅に入る三首」其三に「只だ応に児子と与に、飄転して浮生に任すべし」と。〈浮生〉

は、定めなき世。語は『莊子』刻意篇の「其の生くるや浮ぶが若く、其の死するや休むが若し」に本づく。○雕蟲技 雕蟲は虫を彫刻する。前漢・揚雄『法言』吾子篇に「或ひと問ふらく、吾子は少くして賦を好むやと。曰く、然り。童子のとき彫蟲篆刻す。俄にして曰く、

丈夫は為さざるなり」と。文章表現を卑しめている。○才調 才気。特に文才。○繡虎名 詩人としての名声。『世説新語』賞誉篇に「曹子建七歳にして章を成す、世目して繡虎と為す」と。○遅暮 晩年を喻える。戦国楚・屈原「離騷」（『楚辭』卷一）、『文選』卷三十二に「草木の零落するを惟ひ、美人の遅暮ならんことを恐る」と。○索居 学友から遠く離れていること。『札記』檀弓上に「子夏曰く、吾れ離群して索居すること、亦た已に久し矣」と。○神交 夢の中での交流。魂の交感。六朝梁・沈約「謝宣城詩に和す」（『文選』卷

三十)に「神交はりて夢寐に疲れ、路遠くして思存を隔つ」と。

○命駕 車馬を出すよう言いつける。でかける。『世説新語』簡傲篇に「嵇康と呂安と善し。一たび相思ふ毎に、千里駕を命ず」と。『書言故事』巻三、朋友類にも見える。

「貴殿は経学を修め老いてますます精しくなっておられる。詩人としてもすぐれていらっしゃるのだから文学はつまらぬ小技だとおっしゃいますな。是非ともおめにかかりたく存じますが、行くすがございません」。

詩人としての南冥の力量は、つとに宝暦十四年(一七六四)の朝鮮通信使から「筑前州の亀井魯は、海中の奇才なり」と高く評価されており、尾張の岡田新川と合わせて「一双の荆壁」だと認められていた(岡田新川の宝暦十四年刊『表海英華』)。一方、経学面では寛政五年に『論語語由』を完成させており(開版は文化三年)、起句はそのことが念頭にあったか。東陽は南冥と実際に面晤する機会をもたなかったように思われるものの、その動静については少しく知るところがあり、それゆえかかる詩を寄せたのであろう。ちなみに、南冥の弟子にあたる久留米藩儒の梯箕嶺(明和五年「二七六六」)『文政二年「二八一九」』とは江戸出府のおりに詩を贈っており、その内容から在京中に交流があったらしいことについては、「文化十一・十二年の江戸」で述べたとおりである。

※亀井南冥については、古くは高野江基太郎『儒俠亀井南冥』(私家版、大正二年)があり、早船正夫『儒学者 亀井南冥・ここが偉かった』(花乱社、平成二十五年)、河村敬一『亀井南冥小伝』(花乱社、平成二十五年)がある。

その詩は『亀井南冥・昭陽全集第八巻【上】』(葦書房、昭和五十五年)に「亀井南冥詩文集」として稿本の影印が林田愼之助氏の解説を附して収録されているほか、徳田武『江戸漢詩選1 文人』(岩波書店)、竹村則行『詩人南冥』(『江戸万里流る一甍る孔

子と亀陽文庫』所収。亀陽文庫・能古博物館、平成六年)も参照。

広瀬蒙斎(明和五年「二七六八」)『文政十二年「二八二九」』

名は政典、字は以寧。通称は臺八。蒙斎はその号。陸奥白河の人。藩主松平定信の命により寛政三年(一七九二)江戸に出て昌平黌に入り、柴野栗山(名は邦彦、字は彦輔。享保十九年「一七三四」)『文化四年「一八〇七」』に学んだ。後に西国を遊歴し、菅茶山(名は晋師、字は礼卿。寛延元年「二七四八」)『文政十年「二八二七」』・頼春水(名は惟寛、字は千秋。延享三年「二七四六」)『文化十三年「二八一六」』らと相知る。文政六年、藩主松平定永の桑名移封に従った。桑名と江戸とを歩き来し、後に江戸に転居した。東陽より十一歳下。

七絶に「広瀬以寧の白河に還るを送る」(『詩鈔』巻九)がある。この詩には「以寧京師浪華に西遊し、路を迂して我が藩に過ぎる。留まること数日、経る所凡そ十三州」という自注が附されている。

詩酒交驪到處留 詩酒交驪 到る処留まる

乗春游歴十三州 春に乗じて游歴す十三州

歸心趁得長風去 帰心 長風を趁ひ得て去る

直入關城未是秋 直ちに關城に入るも未だ是れ秋ならず

○詩酒交驪 詩を作り酒を酌み交わして楽しむ。○驪は、飲と同じ。

○帰心 西晋・張翰は秋風の立つのを感じて故郷の菰菜・蓴羹(ジュンサイの吸い物)・鱸膾(スズキのなます)を思い出し、やもたてもたまらず官職を投げ出して帰郷した(『晋書』張翰伝)。○長風 遠くから吹く風。○関城 白河を指す。なお、この詩は『後拾遺和歌集』『古今著聞集』に載せる能因法師の「都をば霞とともに立ちしかど秋風の吹く白河の関」を意識する。

蒙斎は、東陽の幼なじみで江戸に遊学し後に桑名藩儒となった平井澹所(宝暦十二年「二七六二」)『文政三年「二八二〇」』とは昌平黌の縁で親しく交わり、松崎謙堂の「澹所先生平井君墓表」にも知友の一

人として名を挙げていた。東陽が出府した文化十一年・十二年には豪
 斎も江戸におり、当時やはり福山から江戸に出ていた菅茶山とは旧
 知の間柄で、茶山の江戸出府中の作を収めた『黄葉夕陽村舍詩後編』
 巻五・六にその名は見えぬものの、富士川英郎『菅茶山』下（福武
 書店、平成三年）に引く『東遊曆』から両者はかなり頻繁に交際して
 いた様子が窺えるが、東陽とは顔を合わせた形跡がない。

※柴野栗山の養子、碧海（名は允升。安永二年〔一七七三〕～文政十二
 年〔一八二九〕に『桑名教授蒙斎先生広瀬君墓誌』（『事実文編』巻
 五十六）がある。榎堂の「墓表」は「文化十一年・十二年の江戸」
 の【資料編③】に挙げておいた。

高山彦九郎（延享四年〔一七四七〕～寛政五年〔一七九三〕）

名は正之、字は仲繩、号は赤城。彦九郎はその通称。上野新田郡
 細谷村の人。郷土の子で、十八歳のとき京に出奔、岡白駒らに師事。
 いったん帰郷後、江戸に出て二十四歳にして細井平洲の門を叩いた。
 朝廷の衰微を憂い皇室崇敬の念を抱いて江戸・京都を始め各地を遊
 歴し幅広い人脈を築いた。その様子を頼春水が天明三年（一七八三）
 作の七律「岡田忠卿の韻を用いて高山彦九郎に似す」詩（『春水遺稿』
 巻三）において「幾処の雲林にか傑士を求め、連年華洛に皇居を拝す」
 と詠じている。やがて、その行動は幕府に目をつけられ、寛政五年
 久留米の友人宅で自刃。東陽より十歳上。

題下に「上毛新田邑の人。豪爽にして遊を好み、奇士を以て称せ
 らる。筑の柳川に客死せり」と注した五絶「高山彦九郎を悼む」（『詩
 鈔』巻六）がある。〈豪爽〉は、強くさっぱりとした気性。〈奇士〉は、
 奇傑の士。衆にすぐれた人物の謂で、客死した地を筑後柳川とする
 のは誤伝である。

奇節天下士、慷慨眼如電

奇節天下の士、慷慨 眼は電の如
 し

誰將金管筆、為著英雄傳

誰か金管の筆を將て、為に英雄の
 伝を著さん

○奇節 奇特な節操。○天下士 才徳非凡の士。『史記』魯仲連鄒
 陽列伝に「始め先生を以て庸人と為すも、吾れ乃ち今日、先生は天
 下の士^たを知るなり」と。○慷慨 いきどおりなげく。激情的な
 こと。『世説新語』賞譽篇に「士衡（陸機）は長七尺餘にして、声は
 鍾声^なを作し、言は慷慨多し」と。○眼如電 『世説新語』容止篇に「裴
 令公（裴楷）、王安豊（王戎）を目すらく、眼は爛爛として巖下の電
 の如し」と。ちなみに、『蒼瓊録』巻下に「戎眼爛爛如巖下電トハ、
 其風神精悍ニシテ、目玉ヲキラツキテ物スゴキ勢ナリ。目光如電、
 常語ナリ。特ニ巖下ト云ヘルガ妙ナリ」云々と。○金管筆 軸に彫
 金した筆。六朝梁・元帝（蕭繹）が湘東王であつたとき忠臣義士の
 伝を記するのにこの筆を用いたという。南宋・謝維新撰『古今合璧
 事類備要』前集卷四十六、文房門に「筆品」の語を挙げ「梁の元帝、
 湘東王^た為りし時、常に忠臣義士、文章の美なる者を記録するに、筆
 に三品有り。忠孝全き者には金管^{もつ}を用て之を書し、德行精粹なる者
 には銀管を用て書し、文章瞻麗なる者には斑竹管を用て之を書す」と。
 東陽が高山彦九郎と面識があつたかどうかは不明ながら、柴野栗
 山が見た「身長八尺、高髻梁に挿み、面は紅色の如し」（『栗山文集』
 卷二、「高山生を送る序」とか菅茶山の記す「其人鼻高く目深く口ひ
 ろくたけたかし総髪なり」（『筆のすさび』巻三、高山彦九郎の伝）とい
 う魁偉な容貌を含めて、この人の風聞は耳にしていたのであろう。
 先に挙げた詩や『在津記事』などに見えるがごとく父春水とのゆか
 りが深かつたためか、頼山陽（名は襄、字は子成。安永九年〔一七八〇〕
 ～天保三年〔一八三三〕）に「高山彦九郎伝」（天保十二年〔一八四二〕刊『山
 陽遺稿』文集卷三、木崎好尚編『頼山陽全書6文集』所収）があるのは、東
 陽の願いをかなえたものと言えようか。さらに斎藤拙堂（名は正謙、
 字は有終。寛政九年〔一七九七〕～慶応元年〔一八六五〕）にも「高山彦九

郎招魂墓銘并びに序」がある。

※高山彦九郎については、萩原進『高山彦九郎』(文進社、昭和十九年)、森統三「高山彦九郎」(『森統三著作集第九卷人物篇九』、中央公論社、昭和四十六年)および野間光辰『日本の旅人⑦ 高山彦九郎』(淡交社、昭和四十九年)参照。なお、萩原進・千々和実共編『高山彦九郎全集』(昭和二十七年)第二巻に「在京日記」を収めるが、それには東陽の名は見えない。

梁川星巖(寛政元年「二七八九」→安政五年「二八五八」)

名は卯、孟緯。字は伯兔。号は星巖。美濃安八郡皆根村の人。江戸に出て山本北山に学び、柏木如亭・大窪詩仏・菊池五山らと交流があった。東陽より三十二歳下。

七絶に「詩禅道人過り訪ぬ」詩(『詩鈔』巻十)がある。文政元年(一八一八)ごろの作であろうか。

獨往儼然雲水僧 独往儼然たり雲水の僧

一天風月百年朋 一天の風月 百年の朋

陵空錫杖來何晚 空を凌ぐ錫杖 来たること何ぞ晚き

辜負詩筵昨夜燈 辜負す詩筵昨夜の燈

○儼然 物事にとらわれないさま。『莊子』大宗師篇に「儼然として往き、儼然として來たるのみ矣」と。○一天風月 同じ空の下にること。『五灯会元』巻十九、靈隱仏海禪師の条に「万景雲山聳翠、一天風月良隣」と。○百年朋 生涯の友人。○陵空錫杖 僧が遊行することをいう。晋・孫綽「天台山に遊ぶ賦」(『文選』巻十二)に「応真は錫を飛ばして以て虚を躡む」とあり、五臣李周翰の注に「応真は、真道を得る人。錫杖を執りて虚空を行く、故に飛と云ふなり」と。『書言故事』巻四、釈教類に「飛錫」の語を挙げ、「高僧伝に、神僧有り、錫を飛ばし空を凌いでゆく」と。○辜負(意に)そむく。

「君といると百年來の友人のような気がするが、来るのがおそく昨夜の詩会の席に参加できなかったのが残念だ」。

東陽との交流が窺えるのは、この一首だけだが、星巖の場合は東陽の子、拙脩(有功)との関わりが密で、東陽の没後、「津阪有功宅、塩田士鄂に訪ねらる」、「寓懷、五十六字を書す。時に有功宅に寓す」と題する五絶(『星巖丙集』巻四)がある。

※梁川星巖の伝記については、伊藤信『梁川星巖翁・附紅蘭女史』(原刊は大正十四年。後に象山社より昭和五十五年復刻)参照。その集は伊藤信・富長蝶如・森義一『梁川星巖全集』全五巻(昭和三十一年)に訳注があり、入谷仙介『江戸漢詩人選集第八巻 頼山陽・梁川星巖』(岩波書店、平成二年)および山本和義・福島理子『日本漢詩人選集⑪梁川星巖』(研文出版、平成二十年)がある。

画人—十時梅厓・大原雲卿・岡田米山人

ここに便宜上、画人として一括りにしたが、東陽との関係からすれば梅厓はむしろ儒者として扱うほうがよいし、また雲卿も『国書人名辞典』には「経世家」とするように、たんなる画師という枠には収まりきれない人物である。

十時梅厓(寛延二年「二七四九」→享和四年「二八〇四」)

名は業 字は季長。半蔵はその通称。大坂の人。伊藤東所に学び、天明四年(二七八四)ごろ趙陶斎の紹介で伊勢長島藩主の増山正賢(号は雪斎)の知遇を得て仕えることとなり、長島に移住。藩校文礼館を再興したが、寛政十二年(二八〇〇)致仕し、大坂にもどった。東陽より八歳上。

七絶「桑名の客楼にて十時半蔵を憶ふ」(『詩鈔』巻八)は、天明八

年の大火で郷里に帰り職を求めて「諸方に浪遊」（『寿壙誌銘』）していた時期の作。梅厓は伊勢長島で文教振興の任に当たっていた。おそらく東陽の在京時代に大坂で知り合ったとみられるが、仔細は不明。

鴻雁聲中獨倚樓 鴻雁声中 独り楼に倚る

惱人風月海城秋 人を悩ます風月 海城の秋

長洲此去無多遠

長洲此を去りて多遠無し

好棹江湖一夜舟

好し棹さん江湖一夜の舟

○惱人 人は自らをいう。○海城 伊勢桑名を指す。○長洲 伊勢

長島のこと。○此去 晩唐・李商隱「無題」詩に「蓬萊此を去りて多路無し」と。○一夜舟 前掲「和して橘恵風に答ふ」詩の〈乗興〉

の語釈に引く、東晋・王子猷の故事を参照。

「貴殿のいる長島はここからそう遠くありません、さあこれから舟に棹してお訪ねしたいものです」。

※十時梅厓については、大槻幹郎『文人画家の譜―王維から鉄斎まで』（ベリかん社、平成十三年）参照。論考に橋爪節也「十時梅厓の研究―『兼葭堂日記』ほか資料を中心に」（『近世大坂画壇の調査研究2』所収、大阪市立博物館、平成十二年）がある。

大原雲卿（宝暦十一年「二七六一」頃文化七年「二八一〇」）

名は翼、字は雲卿、号は吞響。奥州大原村の人。江戸に出て井上金峨に師事。天明三年（一七八三）ごろに一度松前に赴き、その後京に滞在。寛政七年（一七九五）、前藩主の松前道廣から軍学者として招聘され再び松前に行き、また京にもどった。東陽より四歳ほど下。

僧六如（名は慈周。享保十九年「一七三四」く享和元年「二八〇二」に寛政七年（一七七九）作の七古「原雲卿、松前侯の聘に応じ暫く其の国に赴くを送る」詩（『六如庵詩鈔第二編』巻六）があり、全七十六

句に及ぶ長編の作であるが、そのなかに雲卿の風貌や多芸ぶりを次のように伝えている。

雲卿東奥一奇兒

壯齡觀國客京師

軀幹雖小膽頗大

況乃經史腹爲笥

廣醺或當興酣時

兕觥毚肩不足斃

草書瘦硬作醉素

八叉信口吐色絲

談筵妓席每見思

不邀車公誰更邀

殊藝逸才世咸羨

那知雲卿心潛耽

○奇兒 柁に収まらない快男兒。奇男子。○壯齡『札記』曲礼上

に「三十を壯と曰ひ、室有り」と。○觀國 国土を遊覽する。『易經』

觀卦に「国の光を觀る、用て王に資するに利あり」と。○腹爲笥

多く書物を記憶していること。『笥』は、本箱。『後漢書』「迎詔伝に「腹

便便五經の笥」と。『蒙求』巻中の標題に「迎詔經笥」がある。○

廣醺 盛大な宴会。『醺』は、宴と同じ。○兕觥 兕（水牛の類）の

角で作った酒杯。○毚肩 豚の肩の肉。『史記』項羽本紀に、鴻門

の会で劉邦の御者兼護衛役の樊噲が項羽から与えられた卮酒を飲み

干し毚肩を喰らい、さらに勧められて、「卮酒安んぞ辞する足らん」と

と答える場面がある。○瘦硬 書体が細く瘦せて硬質であること。

盛唐・杜甫の七古「李潮が八分小篆の歌」に「書は瘦硬なるを貴び

て方に神に通ず」と。○醉素 草書を善くした盛唐・懷素のこと。

飲酒を好んだので、かく称せらる。北宋・蘇軾の七古「王逸少の帖

に題す」詩に「顛張醉素の両禿翁、世好を追逐して書工と称せらる」

雲卿 東奥の一奇兒

壯齡 国を觀て 京師に客たり

軀幹は小なりと雖も膽は頗る大なり

況んや乃ち經史 腹を笥と爲すをや

廣醺或いは興酣の時に当たつて

兕觥毚肩 辞するに足らず

草書瘦硬 醉素を作し

八叉 口に信せて色糸を吐く

談筵妓席 毎に思はれ

車公を邀へずんば誰をか更に邀へん

殊藝逸才 世咸羨む

那んぞ知らん雲卿心潜に耽づることを

○奇兒 柁に収まらない快男兒。奇男子。○壯齡『札記』曲礼上

に「三十を壯と曰ひ、室有り」と。○觀國 国土を遊覽する。『易經』

觀卦に「国の光を觀る、用て王に資するに利あり」と。○腹爲笥

多く書物を記憶していること。『笥』は、本箱。『後漢書』「迎詔伝に「腹

便便五經の笥」と。『蒙求』巻中の標題に「迎詔經笥」がある。○

廣醺 盛大な宴会。『醺』は、宴と同じ。○兕觥 兕（水牛の類）の

角で作った酒杯。○毚肩 豚の肩の肉。『史記』項羽本紀に、鴻門

の会で劉邦の御者兼護衛役の樊噲が項羽から与えられた卮酒を飲み

干し毚肩を喰らい、さらに勧められて、「卮酒安んぞ辞する足らん」と

と答える場面がある。○瘦硬 書体が細く瘦せて硬質であること。

盛唐・杜甫の七古「李潮が八分小篆の歌」に「書は瘦硬なるを貴び

て方に神に通ず」と。○醉素 草書を善くした盛唐・懷素のこと。

飲酒を好んだので、かく称せらる。北宋・蘇軾の七古「王逸少の帖

に題す」詩に「顛張醉素の両禿翁、世好を追逐して書工と称せらる」

と。○八又 晩唐・温庭筠は八回又手（腕組み）して八韻の詩を作るので「温八又」と称せられた（『唐才子伝』巻八）。○色糸 絶妙な言辞（『世説新語』捷悟篇）。○車公 東晋・車胤のこと。宴会には欠かせない人物として「車公無くんば楽しまず」と評された（『世説新語』識鑒篇の劉孝標注に引く『統晋陽秋』）。白居易の七律「李翰林に寄す」詩（『白氏文集』巻六十七）に「洛城の飲会 車公を憶ふ」と。胸藏兵機辨鎡銖 孫呉輒爲撫掌資 五十三家可概畧 徒讀父書古所嗤 祇道居安不忘危 草莽之臣何所施 以此決志歸筆硯 儘向繪事見胸奇 疊嶂雲屯猿猱悲 絶壑濤驚出蛟螭 巴陵洞庭秋水濶 月明漁舟聞竹枝 此境俗工詎能窺 片紙才出人爭追 悠悠歲月一壺墨 將欲吞響幽山陲 ○兵機 用兵の機微。杜甫の五律「警急」詩に「妙略もて兵機を擁す」と。○鎡銖 優劣。『孫子』形篇に「勝兵は鎡を以て鉄を称るが若く、敗兵は鉄を以て鎡を称るが若し」と。○孫呉 孫武と呉起。あるいはその著の『孫子』と『呉子』。三国蜀の諸葛亮「後出師の表」（『古文真宝』後集巻八）に「曹操が智計、人に殊絶す。其の兵を用ふるや、孫呉に髣髴たり」と。○撫掌資 手をたたいてうち興じる話のたね。

『晋書』王羲之伝に「衣食の餘、親知と時に共に飲讌せんと欲す。興言高詠する能はずと雖も、杯を銜み満を引き、田里の行ふ所を語り、故に以て撫掌の資と爲す。其の意を得るを爲すこと、勝つて言ふ可けんや」と。○五十三家 あらゆる兵法書。『漢書』藝文志に「凡そ兵書五十三家、七百九十篇」と。○徒読父書 戦国趙・趙括は名将趙奢の子であつたが、徒に父の書伝を読み、変に合ふを知らず、廉頗に代わつて将として軍を率いたものの、秦の白起に大敗を喫した（『史記』廉頗藺相如伝）。○居安思危 『左氏伝』襄公十一年に「書に曰く、安に居て危を思ふ、と。思へば則ち備へ有り、備へ有れば患ひ無し」と。○草莽之臣 語は『孟子』万章下に「国に在るを市井の臣と曰ひ、野に在るを草莽の臣と曰ふ。皆庶人を謂ふ」と見える。○疊嶂 重なり連なる山なみ。李白の雜古「族弟の金城尉叔卿に同じく燭して山水の壁画を照らすの歌」に「了然として覚へず心魂清うし、祇だ疊嶂を將て秋猿を鳴かしむ」と。○猿猱 テナガザルの類。李白の雜古「蜀道難」に「猿猱度らんと欲して攀援を愁ふ」と。○絶壑 深く険しい谷。○蛟螭 みづち。龍の一種。○胸奇 明・王世貞の七古「九友斎十歌」其七（『弇州四部稿』巻二十二）に「剩水を將て馬遠を悩ますこと莫かれ、十二幅吐く胸中の奇」と。○巴陵洞庭 杜甫の七古「戯れに王宰の画がきし山水の図に題する歌」に「巴陵洞庭日本の東」と。〔巴陵〕は岳州（今の湖南省岳陽市）。〔洞庭〕は巴陵の西にある大湖。○竹枝 巴蜀地方の歌。男女の情愛や土地の風俗をうたう。中唐の劉禹錫や白居易が取り上げて広まった。短軀ながら肝がすわり学識豊かで、よく飲みよく食らい、酔いが廻つて筆をとるや草書は逸品、詩は絶妙。京の文人たちの宴にはなくてはならぬ存在だったらしい。とはいえこの男、たんなる多藝多能の小器用な才人ではない。兵法に通じ国家の安危に強い関心を抱き憂慮するところがあつたが、いかんせん素浪人の身。そこで鬱勃たる思いを絵筆に託したのだと、六如はみてとつたのである。

また当時の京都藝苑の大立者たる皆川淇園にも七律「大原雲卿が松前に之くを送る」詩がある（写本『淇園文集』）詩二。近世儒家文集集成9『淇園詩文集』の影印による。ただし、第八句の〈忘〉字を缺く。後掲、井上通泰「浪人大原左金吾の話」によって補う。

馳馬盤鎗近見雄 馬を馳せ鎗を盤す 近ごろ雄を見る

賦詩書字舊來工 詩を賦し字を書す 旧來工なり

陣圖傳自風山子 陣図は風山子より伝はり

画跡賢於大雅翁 画跡は大雅翁より賢なり

洛地名凌冠冕起 洛地 名は冠冕を凌いで起り

松城聘隔海瀛通 松城 聘は海瀛を隔てて通す

顕榮不厭期年別 顕榮厭はず期年の別

羈滯無忘日本東 羈滯忘ること無かれ日本の東

○馳馬盤鎗 馬上での鎗術をいう。『朝野僉載』卷六、辛承嗣の条に「馬上がり鎗を盤す」と。○陣図 陣形図。兵法をいう。○風山子 甲

州流の兵法家。伊賀風山（名は主馬之助。正保元年「一六四四」）享保三年「一七一八」のこと。○大雅翁 池大雅（享保八年「一七三三」）

安永五年「一七七六」のこと。○洛地 京都。○冠冕 名門。○松

城 松前。○海瀛 海原。○期年別（期年）は、一年。○顕榮

重用されて高い地位につくこと。○羈滯 いつまでもよその土地に

留まること。晩唐・邢羣の七律「郡中有懷、睦州員外杜十三兄に寄

せ上る」詩（『瀛奎律髓』卷四）に「如今歲晏羈滯に従ふ」と。○日

本東 日本の本土をいう。語は杜甫の七古「戯れに王宰の画がきし

山水の図に題する歌」に「巴陵洞庭日本の東」と見える。

と詠じ、その武術から兵法、詩書画に至るまで多彩な才能を讃えて

いる。

そして伊賀上野にあった東陽も松前着任後の雲卿に詩を寄せて、次のように詠じている（『詩鈔』卷五、「大原雲卿の松前に在るに寄す」）。

雲卿との交流の経緯は不明ながら、在京時代に知り合ったらしい。

寵聘功成幾載還 寵聘功成りて幾載にして還る

鵬程雲外杳難攀 鵬程雲外 杳として攀り難し

天廻水海分千島 天は水海を廻らし千島を分かつ

地接金源疊萬山 地は金源に接し万山疊なる

戎狄懷來風自化 戎狄懷き來たりて風自ら化し

邦家教立政應閑 邦家教へ立ちて政応に閑なるべし

北門鎖鑰資雄鎮 北門の鎖鑰 雄鎮に資る

緩急折衝樽俎間 緩急折衝す樽俎の間

○寵聘 格別の思召しによる召し抱え。○鵬程 鵬の飛ぶみちり。

はなはだ遠いことをいう。○千島 『日本紀神代抄』に「奥州黄海中に千島有り、蝦夷の居る所。俗に蝦夷千島と謂ふ」と。○金源

『金史』地理志上に「上京路は、即ち海古の地、金の旧土なり。国

言に金を按出虎と曰ふ。按出虎水、此に源するを以て、故に金源と

名づく。建国の号、蓋し諸を此に取るなり」と。（按出虎水）は、

現在の阿什河。ハルピン南東を北流して松花江に合流する。○戎狄

西北方の異民族。○邦家 国家。『詩経』小雅「南山有臺」に「棠

只たる君子は、邦家の基」と。○北門鎖鑰 北方防御の鍵を握る要衝。

『宋史』寇準伝に「北門の鎖鑰、（寇）準に非ざれば不可なり」と、

○雄鎮 重要拠点となる要害の地。ここは松前藩を指す。○折衝樽

俎 外交談判。前漢・劉向『新序』雜事一に「仲尼之を聞きて曰く、

夫れ樽俎の間を出ずして而して知千里の外を知る、其れ晏子の謂な

り。折衝すと謂ふ可し矣」と。（樽俎）は宴席をいう。（樽）には酒

を入れ、（俎）は肉を載せる。

この詩には「蝦夷千島は古歌の咏む所、其の地極寒、海水も亦た氷る。十月自り即ち合して、明年三月に至って方めて解く。人其の上を行くこと平地を履むが如く、車馬と雖も度る可きなり。金源は女真国を謂ふ。完顔氏、国を按出虎水の源に始む。国語に金を謂ひて按出虎と為す。因って以て号と為す。其の間攢峯天を挿し、幾

千万重なるかを知らず。但だ海に縁^よつて相通ずと云ふ」との自注を附している。西行の作とされる歌に「いたけもるあまみか時になりけり蝦夷か千島をけふりこめたり」(『山家心中集』)というのがある。

露西亞の東漸に伴い、安永七年にはイルクーツクの商人が松前藩に交易を求め、天明になると工藤兵助の『赤蝦夷風説考』、林子平の『三国通覧図説』『蝦夷図全図』が著わされるなど、北方問題が識者の一部で大きく浮上し、寛政四年にはラクスマンが根室に來航したが、東陽その人について言えば彼の地に対する知識はあまりあつたようには思われない。ただ、五律「人の松前に赴任するを送る」詩(『詩鈔』卷三)には、次のように詠じている。

氷天本荒服、千島版圖民

氷天 本と荒服、千島 版圖の民

教化分憂職、謳歌臥理人

教化す分憂の職、謳歌す臥理の人

方言夷語雜、土俗古風淳

方言夷語雜じり、土俗古風淳し

莫賣盧龍塞、却揚東海塵

盧龍の塞を売つて、却つて東海の塵を揚げること莫かれ

塵を揚げること莫かれ

○氷天 六朝梁・江淹「雜體詩三十首」其二十八「袁大尉」(『文選』卷三十一)に「声教氷天を燭す」と。○荒服 中央から遠く離れた僻陬の地。古代中国の五服の一つ(『書経』禹貢)。○版圖 領土。

○分憂職 地方長官。中唐・白居易「溜青を平らぐるを賀する表」(『白氏文集』卷四十四)に「臣、名は共理に参はり、職は分憂を忝うす」と。○謳歌 民が徳政を讃え歌う。○臥理 臥治と同じ。前漢の武帝の時、汲黯は東海太守となったが多病で、閭閻内に臥して出でなかつたが、一年余りで東海の地は大いに治まった(『史記』汲黯列伝)。

○夷語 異民族の言葉。○盧龍塞 三国魏の時代、河北省にあった要塞の名で、烏丸の拠点。北平の人、田疇は烏丸討伐の曹操軍を案内して勝利に導いたが、恩賞を与えようとした曹操に対して「豈に盧龍の塞を売つて、以て賞祿に易ふ可けんや」として受けなかつた

(『三国志』魏書・田疇伝)。初唐・陳子昂の五律「崔著作の東征を送別

す」詩(『唐詩選』卷三)に「盧龍の塞を売り、歸りて麟閣の名を邀むること莫かれ」と。○揚東海塵 世事の巨変をいう(晋・葛洪『神仙伝』麻姑)。南宋・陸游の七古「護国天(中略)之を過ぎりて感有り」

詩に「古伝ふ東海会ち塵を揚げるを、君看よ此の地亦た荊榛」と。

尾聯は、「大切な拠点を異民族に売つて、世事の巨変を招くような真似はなされるな」という意であろう。

後掲の森銃三「大原左金吾」には五律の詩題に見える(人)を大原雲卿のことだとみなしているが、詩の配列からすると文化十一年・十二年東陽が江戸在府中の作となり、雲卿の事跡と合わない。また詩中に「分憂」「共理」という表現が用いられており、それらは語釈に示したごとく地方長官についていう語であることからすれば、当地に赴く幕府の代官とみた方がより相応しいのではあるまいか。もとより確証はないものの、疑問を呈しておく。

その後、雲卿は京に居住したが、津城下に逗留したことがあつた。森氏によれば、文化二年(一八〇五)、津藩主藤堂高疑の招きに応じてのことらしい。東陽に「京師の大原生、我が府下に遊寓し、山水梅竹等の画十幅を作り、并せて詩を題して献ず。剡藤紙三十番を賜はる。時に紙乏しく価甚だ貴し。故に特に此れを以て潤筆に充つ。生、京に還り賜を捐て詩画の大会を設く。蓋し十品の変化千様、詩画凡て二千幅を将て、東山の芙蓉楼に展観す。餘紙は賓客の揮灑に供すと云ふ。予に題寄を需む。聊か賦して責めを塞ぐ」と題する七絶(『詩鈔』卷八)がある。(剡藤紙)は、『書言故事』卷十二、紙類に「剡溪、藤を出だす。紙を為りて絶妙」と。(十品)とは、竹・梅・菊・蘭・岩・蝶・牡丹・虎・鶏・龍をいう。

才藻多多益辨優 才藻多多益ます弁じて優なり

三千賜紙擅風流 三千の賜紙 風流を擅にす

大名天下無雙會 大名 天下無双の会

豪舉東山第一樓 豪拳 東山第一の楼

○才藻 詩文の才。『三国志』魏書、阮籍伝に「才藻艷逸」と。○多々益弁 前掲、「猪飼文卿に似す」詩の語釈参照。○豪拳 豪快な行動あるいは豪勢な催し。

森氏によれば、雲卿が藤堂侯から拝領した唐紙によって京で大々的に詩画会を催したのは、文化四年。その際、雲卿は知友に題詩を求めた。そのうちの一人が菅茶山で、「千詩画引、原雲卿の需に応ず」という長編の七古(『黄葉夕陽村舎詩』巻八)を作っている。

雲卿は文化二年に津から京にもどる帰途、伊賀上野の東陽のもとを訪れたらしい。そのおり東陽の肖像画を描いてくれた。七絶「大原雲卿、予が為に真を写す」(『詩鈔』巻八)に云う、

風流到處彩毫新 風流到る処 彩毫新たなり

佳士相逢為寫真 佳士相逢うて為に真を写す

慙媿老衰窮措大 慙媿す老衰の窮措大

何堪更作畫中人 何ぞ堪へん更に画中の人と作るを

○彩毫 五色の筆。○佳士云々 この句は、杜甫の七古「丹青引」に当時の有名な画師曹霸について「偶たま佳士に逢へば亦た真を写す」というのに基づく。〈佳士〉は、品行や才学にすぐれた士。〈写真〉

は、真実を描くというのが、本来の意味。○慙媿 うら恥ずかしく思う。○窮措大 貧乏書生。『薈瓊錄』巻下に措大の条がある。○

画中人 南宋・陸游の七律「新晴舟を泛べて近村に至る、偶たま双鰾を得て帰る」詩に「青嶂会ず身後の塚と為らん、扁舟聊か画中の人と作る」と。

「貴君は行く先々で才筆を揮い、すぐれた御仁の真の姿を描かれている。おいほれの貧書生、画にかかれるほどの人間ではなく、お恥ずかしいかぎりだ」。

この詩と同じ時期の作に七絶「雲卿を携へて昨非庵に遊ぶ。既に辞して山を下りて復た回りに留め宿し、情を書して雲卿に示す」詩(『詩鈔』巻八)があるが、これは省略する。ちなみに、〈昨非庵〉は

伊賀上野にある山溪禪寺の住持、機宗和尚の庵で、七古に「機宗長老の昨非庵に宿す」と題する作(『詩鈔』巻二)がある。

さらに東陽には、七絶「雲卿の水墨の山水に題す」詩があり、

一片青山靄遠空 一片の青山 遠空に靄たり

桃花水漲下江風 桃花水漲り江を下る風

長年三老都無事 長年三老都べて無事

睡過春帆細雨中 睡過す春帆細雨の中

○一片青山 金・元好問「高平道中陵川を望む二首」其一(『遺山先生文集』巻九)に「一片の青山幾今昔」と。○長年三老 杜甫の七律「悶を撥ふ」詩に「長年三老遙かに汝を憐れむ、柁を振じらして頭を開く捷きこと神有り」と。この詩は東陽の『杜律詳解』巻中に

収め、〈長年〉に「センドウ」、〈三老〉に「オヤカタ」と左訓を施す。と、雲卿が描くところの山水画の世界を詠じている。

なお、『薈瓊錄』巻上に罷の条あり、ヒグマの獯猛さについて記したなかに「牛馬取ルハ人立シテ攫ミニツニ折リテカツギ去リ骨ニ至ルマデ喰尽クス、松前第一ノ危患ナリト、彼人語リテ舌ヲ掉ヘリ」という。この〈彼人〉とは、おそらく雲卿のことであろう。さらに

同書巻下の腐刑の条には「亡友大原春響ガ松前ニ在リテ陰寒ニ中リ疝陰ニ入テ苦シミケルニ、針術ノ上手アリテ辜丸ヲ刺シタリ。コレニ依テ腫治リ痛ハ止ミケレドモ、自後陽具永ク痿シテ終ニ夫婦ノ道絶タリト語レリ」という。これらの記述は、大原雲卿についての論考にあまり取り上げられていないようなので、ここに補っておく。

※大原雲卿については、井上通泰「浪人大原左金吾の話」(『南天莊雜筆』所収。春陽堂、昭和五年)、森銃三「大原左金吾」(『森銃三著作集第七巻人物篇七』、中央公論社、昭和四十六年)がある。また中

村真一郎「蠣崎波響の生涯」(新潮社、平成元年)、富士川英郎「菅茶山上・下」(福武書店、平成二年)参照。

岡田米山人(延享元年「一七四四」→文政三年「一八二〇」)

名は国字は士彦。通称は彦兵衛。安永ごろは大坂で米屋を営み、臼を踏みながら読書に励んだという逸話がある。寛政二年に津藩の大坂蔵屋敷の下役として召し抱えられて以降、藩との関係が生じた。東陽より十三歳上。

七絶に「席上、米山人に贈る」詩(『詩鈔』巻九)がある。この詩は米山人が津にやってきたときに詠まれたのであろう。詩の配列からすれば、文化十三、四年頃の作。当時、東陽には大坂へ出向いた形跡がないことからして、この詩は米山人が津にやってきたときに詠まれたのであろう。時に東陽は58か60歳、米山人は72か74である。

心跡相忘混酒徒 心跡相忘れ酒徒に混じる

醉郷爛漫是仙都 醉郷爛漫是れ仙都

豪來揮霍龍蛇筆 豪來揮霍す龍蛇の筆

寫出名山大澤圖 寫し出す名山大沢図

○心跡 心情・行為。六朝宋・謝靈運「齋中讀書」詩(『文選』卷三十)に「昔余京華に遊ぶ、未だ嘗て丘壑を廢さず。矧んや乃ち山川に帰る、心跡双つながら寂漠」と。○酒徒 酒飲み連中。李白の雜古「草書歌行」に「八月九日天氣涼しく、酒徒詞客高堂に滿つ」と。

○醉郷 気分がよく酔い心地。西晋・劉伶に「醉郷記」がある。○爛漫 存分に酔うさま。疊韻語。杜甫の五律「高適に寄す」詩に「定めて知る相見の日、爛漫として芳尊を倒すを」と。○仙都 仙人の住むところ。晋・孫綽「天台山に遊ぶ賦(『文選』卷十二)に「陟降信宿、仙都に迄る」と。○揮霍 手を速く動かすこと。双声語。

○豪來 興來と同じ。六如の『葛原詩話後編』巻四に「興來ルヲ又豪來ト云フ。放翁往々喜用之」云々と指摘する。○龍蛇筆 雄勁で生動する筆勢。北宋・黃庭堅の五律「文安国の挽詞二首」其二に「龍蛇の筆を見ず、新たに乾く研滴の蛟」と。○名山大沢 『左氏伝』襄公二十一年に「深山大沢、実に龍蛇を生ず」と。

自注に「山人は本と飲を解さず、年古稀を過ぎて始めて酒中の趣を識る。婆娑として寄傲し、自ら醉仙と称す、画品神妙、醉筆尤も逸なり」と。(婆娑は、酔ってふらふらするさま。疊韻語。(寄傲)は、自由気ままな思いを託す。東晋・陶淵明「歸去來の辞」(『文選』巻四十五、『古文真宝』後集巻二)に「南窓に倚りて以て寄傲し、膝を容るるの安んじ易きを審かにす」と。

今挙げた東陽の詩および自注は、森銑三「米山人のことども」(『森銑三著作集第四巻人物篇四』)にすでに紹介されているところであるが、東陽にはこのほか「米山人の枯木竹石に書す」と題する一文(『文集』巻七)がある。

此浪華米山人戯墨、醉興槃礴揮灑。殊見天真爛漫。殆是神來之筆。余擊節喝采。山人曰、唯吾亦覺勝平時。然不不知者、必大笑耳。余曰、然哉。抑不笑不足以為道。唯我與爾有是也夫。山人稱快。引杯滿酌。遂書以識之。時丁卯九月十日、山人訪宿草堂、劇談豪吟、夜漏下三刻矣。

(此れ浪華米山人の戯墨、醉興槃礴揮灑す。殊に天真爛漫を見はす、殆んど是れ神來の筆。余、節を撃ちて喝采す。山人曰く、唯だ吾れも亦た平時に勝るを覺ゆ。然れども知らざる者は必ず大いに笑はん耳。余曰く、然る哉。抑そも笑はれざれば以て道と為すに足らず。唯だ我と爾とは是れ有る也夫。山人快と称し、杯を引いて満酌す。遂に書して以て之を識す。時に丁卯九月十日、山人草堂に訪宿す、劇談豪吟、夜漏下ること三刻なり矣)

○槃礴 両足を投げ出して坐る。双声語。『莊子』田子方篇に「衣を解き槃礴して贏」になつて一心不乱に描いている画師の様子を聞いて、宋の元君が「可なり、是れ真の画者なり」と讃えた話がある。

○揮灑 筆をふるう。○神來 インスピレーションがおりてくる。清・高士奇「江村銷夏録」巻三、「李龍眠維摩演教図巻」の条に「真に神來の筆、後世の丹青手を視るに直だ土直なる耳」と。○擊節

拍子をとる。○喝采 ほめそやす。もとは博奕の時、掛け声をかけて骰子を振ること。宋代以降の近世語。○不笑不足為道 この表現、『老子』第四十一章に「上士道を聞けば、勤めて之を行ふ。中士道を聞けば、存るが若く亡きが若し。下士道を聞けば、大いに之を笑ふ。笑はれざれば以て道と為すに足らず」と。○唯我與爾有是也夫『論語』述而篇に「子、顔淵に謂ひて曰く、之を用ふれば則ち行ひ、之を舍つれば則ち蔵る。唯だ我と爾と是れ有る夫」と。なお、『論語』には〈也〉字がない。○劇談 大いに論じ合う。西晋・左思「蜀都の賦」(『文選』卷四)に「劇談戲論、腕を扼し掌を抵つ」と。○豪吟 意気盛んに大声で詩を吟ずる。○夜漏下三刻 夜が明ける一時間ほど前をいうか。中唐・張籍の七古「沙塘行」に「宮中の玉漏下ること三刻」とあり、元・倪瓚の「絶句四首、九成の韻に次す」詩(『倪雲林先生詩集』卷六)の自注に「倪瓚、高齋に留宿し、篝灯して為に春林遠岫図を写し并せて四詩に次韻して画上に題す。時に夜漏下ること三刻なり矣。佩章齋中に書す」と。

米山人が東陽のもとに訪宿したのは、〈丁卯〉とあるから文化四年(一八〇七) 64歳のときのこと、当時51歳の東陽はまだ伊賀上野にいた(津に召還の命が下るのは同年の十一月二十三日)。このとき米山人は多少なりとも「飲を解」するようになっていたのであろう、ただそれまでは酔って筆をとったことはほとんどなかったのではあるまいか。ところが、東陽宅で酔余の一興として戯れに描いた枯木竹石の画が自分でも驚くような出来ばえで、山人にとって新たな境地に達した得難い体験であったようだ。

なお、後から気がついたのだが、河野元昭氏に「米山人小伝」(『美術史論叢』20、平成十六年)がある。それによれば、米山人の文化十二年作「携酒遊景図」に七絶の賛があり、

日日遊情興巨窮 日日遊情 興窮め尽し
桃花探尽又紅楓 桃花探ね尽くして又た紅楓

南北東西一瓢酒 南北東西 一瓢の酒
醉醒醒醉蹣跚翁 酔いては醒め醒めては酔う蹣跚の翁
○巨 不可の合音字。○醉醒醒醉 北宋・黃庭堅「醉落魄」詞の自注に「旧と醉醒醒醉一曲有り云ふ、酔いて醒め醒めて酔ふ、君に憑つて会取す皆滋味」云々と。○蹣跚 よろめきながら歩くさま。千鳥足。疊韻語。

と詠じられ、それには「向に蘿月亭に遊ぶの約有りしも、果たさず。東陽君小集を催して余を促す。余、之に赴く。是れ老懶興情の致す所。因りて其の意を賦し、漫に山水を写す」という前書きが附されているという。

とすれば、先に示した「席上、米山人に贈る」詩は、文化十二年の作であろう。

※米山人については、森銑三「米山人のことども」のほか、神山登「岡田米山人半江の生涯」(『古美術』53、昭和五十二年)、藪本公三「岡田米山人年譜考」(同上) および神山登氏執筆にかかる『近世大坂画壇』(大阪市立美術館。同朋舎出版、昭和五十八年)の本論篇「文人画」第三章「画壇の精華―米山人と半江」参照。さらに中村真一郎『木村兼葭堂のサロン』(新潮社、平成十二年)の第三部第一章第十節「岡田米山人」がある。米山人は前掲、大槻幹郎著にも取り上げる。

附(一) 清客程赤城

東陽の『詩鈔』には、時に思いがけない人物が登場する。次に挙げる清國人程赤城はその一人である。両者の接点や介在する人物が具体的にわかれば、意外でもなんでもなくなり、それを探究するのが研究ということになるが、両者の結びつきは今のところ不明。

程赤城（雍正十三年「享保二十年、一七三五」～嘉慶十二年「文化四年、一八〇七」～）

名は霞生、号は相塘。赤城は、その字。蘇州の人。長崎にたびたび来航した清国の海商で、書法にすぐれ揮毫をよくした。明和七年（一七七八）、豊後国東の三浦梅園が起稿した『贅語』に書目・題言を揮毫したのをはじめ、天明元年には『詩轍』（刊行は天明六年）の日出藩儒喬維嶽序、同七年には『梅園詩集』（天明七年刊）自序の文字をそれぞれ書いている。

東陽の天明期在京中の作に七絶「清客程赤城の西帰するを送る」詩（『詩鈔』巻七）がある。

幾年瓊浦住為家 幾年瓊浦住みて家と為す

歸去齊州絶海邊 帰りに去る齊州 絶海邊かなり

知對東風來日本 知んぬ東風の日本より来たるに對して

春雲望斷白櫻花 春雲望斷す白桜花

○瓊浦 長崎の雅称。○齊州 中州。中国を指している（『爾雅』釈地）。

中唐・李賀「天を夢む」詩に「遙かに齊州を望めば九点の煙、一泓の海水杯中に瀉ぐ」と。○絶海 陸地から遠く離れた海。○望斷 見えなくなるまでながめる。

「春風が吹くころになると日本恋しさにいつまでも東の空に浮かぶ桜色の雲を眺めていることでしょう」。

この詩には「明人貝瓊の詩に、唐風日本より来たり、北斗玄杓を辟す」との自注がある。貝瓊は、元末明初の人。詩を楊維禎（字は廉夫、号は鉄崖）に学んだという。『元史』編纂に与った。東陽が挙げるのは、その五排「丁未の除夕」詩（『清江詩集』巻九）の第一、二句。

（玄杓）は、星座の名。北方にあり、子の方角にある。

先にも述べたように東陽と程赤城との接点は分からないものの、東陽の畏友で若くして亡くなった小栗明卿（宝暦十三年「一七六三」～天明四年「一七八四」）の弟、十洲は長崎に遊学しているし、東陽と交

友が深かった橘南谿は天明二年の九州遊歴中に長崎で程赤城に会っている。南谿の『北窓瑣談』巻一には「程赤城は廿歳ばかりの頃より六十余に及ぶまで、年々渡り来」たという話を載せる。老年まで来航する理由を問うと、「第一日本の飯を食し馴ては、彼国の飯は食しがたく、第二酒、第三味噌汁なく香の物なし」と答えたという。我が国の食べ物や酒がよほど口に合ったらしい。

さらに、程赤城の名は意外なところにも見える。尾張の岡田新川が「清人程霞生、君山先生の敝帚集を読み、節を撃ちて称嘆す。之が為に序し、其の帰るに及んで、諸を囊中に載す。余、長句を作りて其の盛事を賛す」と題する七言古詩（『朝陽集』巻二）を作っている。ちなみに、松平君山の『弊帚集』は、明和七年（一七七〇）の刊。

当時、長崎に遊んだ文人墨客は必ずといってよいほど程赤城と面談するか、そうでなくとも話題に取り上げている。天明八年の春木南湖（宝暦九年「一七五九」～天保十年「一八三九」）、司馬江漢（延享四年「一七四七」～文政元年「一八一八」）、文化元年（一八〇四）の市河米庵（安永八年「一七七九」～安政五年「一八五八」）らいずれもそうである（南湖の『西遊日簿』、江漢の『西遊日記』、米庵の『西遊折瓊』）。その一人に大田南畝（寛延二年「一七四九」～文政六年「一八二三」）がいる。南畝は文化元年六月に、長崎奉行所詰を命じられ、九月に着任し、翌年十月まで長崎に滞在したが、文化元年の作に「清人程赤城の七十の寿詞、賦して文庵に示す」と題する二首（『南畝集』巻十四）がある。文庵は幕府から長崎に派遣された医官で、南畝に同行した。さらに森鷗外『伊澤蘭軒』その三十三に、文化四年、蘭軒が長崎で交流した清国人の一人としても登場している。

※程赤城の略歴については、吉村永吉「来舶唐人と迂斎」（『長崎談叢』

第三十輯、昭和十七年）および小曾戸洋・町泉寿郎「梁田蛻巖撰・

程赤城書『張仲景図賛』（『漢方の臨牀』四六ノ一、一九九九年）参照。

なお、南畝の詩は、岩波『大田南畝全集』第四巻に収める。詩題

に見える文庵については、濱田義一郎「江戸文人の歲月―蜀山人大田南畝に於ける」(『大妻女子大学文学部紀要』15)に言及されている。

附(二) 先人追慕の詩―藤原惺窩・中江藤樹・宇野明霞

東陽は京に遊学して間もない頃に、嵯峨の二尊院にある伊藤仁斎・東涯父子の墓を展じ、「古学・紹述両先生の墓を拝す」と題する五言古詩(『詩鈔』巻一)を詠じている。そのことは「安永・天明の京都」で述べたところであるが、ほかにも在京時代に藤原惺窩・中江藤樹・宇野明霞の墓や祠堂を訪ねた作があるので、それを見ておきたい。

藤原惺窩(永禄四年「一五六二」～元和五年「一六一九」)

名は肅、字は敏光。惺窩はその号。参議冷泉為純の三男で、播磨三木郡細川荘の生まれ。七、八歳のころ仏門に入り、龍野景雲寺のちに京都相国寺に学ぶ。のちに禅学から宋儒性理の学に転じ、還俗して儒学を門人に教授。慶長十年、京都市原に隠棲した。

在京中の作に、六律「惺窩先生の墓に謁して敬んで鄙感を志す」(『詩鈔』巻三)がある。東陽は惺窩が儒学復興の基を築いたばかりでなく、その餘沢が現在にまで及んでいるとして敬意を表したのである。

戦国詩書教廢、當時困學何勝

戦国詩書教へ廢れ、当時困学

何ぞ勝へん

斯文學世將喪、吾道憑君復興

斯文 世を挙げて將に喪びんとするも、吾が道 君に憑りて復興す

神君殊崇徳業、師儒各達才能

神君殊に徳業を崇び、師儒各おの才能を達す

後生長被遺澤、欽向墓門數登 後生長く遺沢を被る、欽んで墓門に向つて數登す

墓門に向つて數登す

○困学 苦勞して学ぶ。○斯文 この文化・学問の意で、儒学のこと。『論語』子罕篇に「天の將に斯の文を喪はさんとするや、後死者、斯の文に与ることを得ざるなり」と。○吾道 孔子の教え。『論語』里仁篇に「吾が道は一以て之を貫く」と。○神君 徳川家康のこと。○師儒 師表となる儒者。後掲の自注参照。○遺沢 死後のこされた恩恵。○墓門 墓道の門。西晋・潘岳「寡婦の賦」(『文選』巻十六)に「墓門は肅肅として、修壟は峨峨たり」と。○數登 繰り返し拝礼する。〈數〉は、しばしば。〈登〉は、参拝。

詩末の自注に「六句は羅山・活所・昌三の諸公の墓、相国寺中の林光院の後園に在るを謂ふ」と。林羅山(名は信勝。法号道春。天正十一年「一五八三」～明暦三年「一六五七」・那波活所(字は道円。文禄四年「一五九五」～慶安元年「一六四八」・松永尺五(名は昌三。文禄元年「一五九二」～明暦三年「一六五七」)は惺窩の門に学んだ。堀杏庵(名は正意。天正十三年「一五八五」～寛永十九年「一六四二」)と合わせて四天王の称がある。東陽がいう彼ら高弟の墓は、いわゆる衣冠墓であろう。現在、林光院の惺窩墓には見当たらずである。ちなみに、活所五世の孫にあたる那波魯堂の『字問源流』(寛政十一年「一七九九」刊)の記事に、明和六年(一七六九)の惺窩百五十年忌の前日、惺窩七代の孫にあたる冷泉家当主に招かれ祭事に与り、翌日の早朝、墓を展じたことをいい「葬地ヲ見ルニ、誌碑ヲ用ヒズ。唯方四五尺許二垣ヲ結び真中ニ樹ヲ植タルガ、高ク生榮へ其本ハ合抱ニ及ベリ」と述べている。

なお、巖垣龍溪には「惺窩翁の旧居」と題する五絶(『抱関集』二篇)があり、『皇都名勝詩集』巻下にはこれを「惺窩藤先生の墓」として収めているので、ついでに挙げておく。

不爲天子臣、諸侯安得友 天子の臣と為らざるに、諸侯安ん

考槃踪跡幽、清風滿林阜

ぞ友とすることを得ん

考槃 踪跡幽に、清風 林阜に満

つ

○考槃 隱宅を構えること。『詩経』衛風「考槃」に「槃を考^{たのしみ}して潤に在り、碩人之寛^{これ}」とあり、朱熹の集伝に「考は、成なり。槃は、盤桓の意。言ふところは其の隱処の室を成すなり」と。『書言故事』卷三、隱逸類にも、この語を挙げる。○踪跡 足跡。○林阜 山林。隱棲の地をいう。『晋書』阮修伝に「兄弟同志と、常に林阜の間に自得す」と。

ちなみに、東陽の『夜航詩話』巻五には、

惺窩先生、大徳寺に遊ぶ詩に「喝雷棒雨西東に響く、知る是れ高僧の此の中に住するを。野性由来箇の事無し、瘦藤月を挑て秋風に倚る」と。語意俱に工なり。合作と称するに足る。諸家の選本、此れを収めざるは何ぞや。蓋し皆集本を見ざればなり。余が家蔵する所の本、正保天子御製の序有り。夫れ布衣の遺稿、御序を賜ふを得、先生の徳の至り、古今一人のみ。烏丸公光広称して華袞の榮と為すと云ふ。今本載する無し。何の謂なるを知らず、良に惜しむ可きなり。

という記事がある。さらに、この条に続けて江村北海の『日本詩史』(明和八年「二七七」刊)や先に挙げた那波魯堂の『学問源流』に惺窩に妻子なく酒肉を食しなかつたとする誤りを正した箇所があり、その中で惺窩を「斯文中興の豪傑」と評する。この話柄は、『蒼瓊録』巻下にも見える。ちなみに、原念斎(安永三年「二七七四」→文政三年「一八二〇」)の文化十四年(「二八一七」)刊『先哲叢談』巻一、藤原惺窩の第七條にも同様の指摘があるが、東陽がその記事によってこれを記したわけではなさそうである。また『蒼瓊録』には「惺窩集二板アリ、一ハ羅山ノ編集ニテ菅得菴ノ続編ヲ合セテ八巻アリ。一ハ冷泉公ノ編集ニテ水戸義公校訂シタマフ。和文ヲ併セテ十八巻アリ。

巻首ニ後光明帝ノ御序アリ、其子為景採編輯之ト書カセタマヘリ」云々とある。

※藤原惺窩については、太田兵三郎ら編『藤原惺窩』(国民精神文化研究所、昭和十六年。後に思文閣より昭和五十三年に復刊)の解題および太田青丘(兵三郎)『藤原惺窩』(人物叢書新装版、吉川弘文館、昭和六十年)、猪口篤志・俣野太郎『藤原惺窩 松永尺五』(叢書・日本の思想①、明德出版社、昭和五十七年)参照。また惺窩の墓については、大島晃「先学の風景—人と墓 藤原惺窩」(『漢文学解釈と研究』(1)、平成十年)がある。

中江藤樹(慶長十三年「二六〇八」→慶安元年「二六四八」)

名は原、字は惟命。通称は与右衛門。藤樹はその号。近江高島郡小川村の人。農家に生まれ、元和二年(「二六一六」)米子藩士の祖父吉長の養子となり、同三年藩主の転封により伊予大洲に移った。寛永十一年(「二六三四」)脱藩して郷里にもどり、母に孝養を尽くしながら学問に専念した。

『詩鈔』巻二に四言古詩「藤樹先生の教授室に題す」があり、題下に「堂上に木主を奉祀し、里人之を祭るに在すが如くす」と注する。(木主)は、位牌。(祭るに在すが如し)は、『論語』八佾篇に見える表現。

維江夫子、嘉遁之郷
夙欽風聲、來窺門牆
吾道深造、煥乎文章
時人稱聖、孝義最彰
爰以奉神、拜瞻拈香
古藤無恙、媲美召棠
里民恭敬、風俗餘光
祇仰回止、秋山夕陽

維れ江夫子、嘉遁の郷
夙に風聲を欽み、来たりて門牆を窺ふ
吾が道深造し、煥乎たる文章
時人 聖と称し、孝義 最も彰かなり
爰に以て神を奉じ、拜瞻して香を拈す
古藤 恙無く、美を召棠に媲美す
里民恭敬し、風俗餘光あり
祇だ回りて仰止す、秋山の夕陽

○夫子 先生の意。○嘉遁 義を全うし志を守るために世をのがれること。『易経』遯卦の象伝に「嘉遯す、貞吉とは、以て志を正しうするなり」と。〈遁〉は遯と同じ。○欽 したう。欽慕。○風声 教化。『書経』畢命に「善を彰かにし悪を瘴み、之が風声を樹つ」と。

○吾道 孔子の教え。『論語』里仁篇に「吾が道は一以て之を貫く」と。○深造 『孟子』離婁下に「君子深く之に造るに道を以てするは、其の之を自得せんことを欲すればなり」と。○媲美 〈媲美〉は、比と同じ。○召棠 周の召公奭がそのもとに舍した甘棠を、その徳を慕った人々が伐るなかと歌った故事（『詩経』召南「甘棠」）。○餘光 美德の影響。○仰止 仰ぎ慕う。止は語助。『詩経』小雅「車輦」に「高山仰止、景行行止」（高山は仰ぎ、景行は行く）と。

七絶「藤樹先生の祠堂に謁す」（『詩鈔』巻七）には、

高躅百年遺德香 高躅百年 遺德香し

古藤樹下肅祠堂 古藤樹下 祠堂肅たり

山村不着江夫子 山村 江夫子を着せずんば

天下何縁識此郷 天下何に縁つてか此の郷を識らん

○高躅 気高い品行。『晋書』隱逸伝贊に「確乎たる群士、超然として俗を絶ち、粹を巖阿に養ひ、声を林曲に銷す。貪を激して競を止め、永く高躅を垂る」と。

「藤樹先生がいっしょになかったなら、この山村は世の中に知られなかっただろう」と詠じている。

なお、伊藤東涯に享保六年（一七二二）に藤樹書院を訪ねた七絶「辛丑の秋、江州に遊び南市村の安原氏宅に宿す。遂に小川村に到りて藤樹書院を尋ぬ」詩（『紹述先生文集』巻二十九）がある。

江村書院聞名久 江村の書院 名を聞くこと久し

五十年前訓義方 五十年前 義方を訓ふ

今日始來絃誦地 今日始めて来たる絃誦の地

古藤影抱舊茅堂 古藤 影を抱く旧茅堂

○義方 守るべき正しい教え。『左氏伝』隱公三年に、春秋晋・石碻の言として「臣聞く子を愛すれば義方を以てし、邪に納れず」と。○絃誦 礼楽による教化。『礼記』文王世子に「春は誦し夏は弦す」と。

東涯の作は、原念斎の『先哲叢談』にも挙げる。戦前に刊行された『藤樹先生全集』（岩波書店、昭和十五年）第五冊（巻四十八）には後人による藤樹景慕の詩文が集められているが、東涯や東陽の作は未収録。さらに奥田三角にも五律「藤樹書院を尋ぬ」詩（『三角集』巻一）があつて、これは『全集』に収録されており、享保十三年（一七二八）の作。

漫遊來此地、百歳欽高風

漫遊して此の地に來たり、百歳高風を欽しむ

床上青氈古、梁間絳帳空

床上 青氈古り、梁間 絳帳空し

河汾誰續響、新建獨推隆

河汾誰か響を続がん、新建独り隆を推す

收拾秦灰冷、六経道不窮

秦灰の冷を收拾して、六経 道窮まらず

○高風 気高い風姿。西晋・夏侯湛「東方朔画賛」（『文選』巻四十七）に「先生の県邑を觀て、先生の高風を想ふ」と。○青氈 青い毛氈。○絳帳 紅いとり。『書言故事』巻三、師儒類に「絳帳」

の条があり、「前漢の馬融、諸生に教授す。常に千数有り。高堂に坐して、絳沙帳を施し、前に生徒に授け、後に女樂を列す」と。○

河汾 隋・王通をいう。王通は文中子と号し、黄河・汾河の間で教授した（『新唐書』隱逸・王績伝）。明・高啓の五律「恭孝先生を追轡す二首」其一に「閩洛遺風在り、河汾旧業伝ふ」と。○統響 後を

継ぐ。○新建云々 『全集』では（日月德比隆）に作る。○收拾 『全集』は（沙汰）に作る。○秦灰 秦の始皇帝によって焼かれた書籍

の灰燼。元・郝経の七律「秋興五首」其二に「六経旧に依つて天地

に垂れ、千載秦灰 劫空に散ず」と。ここは我が戦国乱世の文化の破壊をいう。○六経 前掲、「和して久保希卿に答ふ二首」其一の語釈参照。

ちなみに、藤樹のことは、伴蒿蹊の寛政二年（一七九〇）刊の『近世畸人伝』巻一に見えるほか、橘南谿も藤樹書院を訪ねており（『東遊記』巻四に「藤樹先生」の条がある）、寛政七年刊の『藤樹先生遺稿』に跋を記している。

※中江藤樹については、本文に挙げた全集以外に、日本思想大系『中江藤樹』（岩波書店、昭和四十九年）参照。

宇野明霞（元禄十一年「一六九八」→延享二年「一七四五」）

名は鼎、字は士新。明霞はその号。その先は近江野洲の人。僧大潮元皓に徂徠学を学んだ。片山北海（名は猷。享保八年「一七二三」→寛政二年「一七九〇」）や釈大典（名は顯常、字は梅莊。享保四年「一七一九」→享和元年「一八〇一」）はその門人。

大典の名で知られる『詩語解』（宝暦十三年「一七六三」）や『唐詩集註』（安永三年「一七七四」刊）などの著述は、明霞が手がけた仕事をもとにこれを増補してなされたものである。その大典には五律「士新先生を哭す」詩（宝暦十一年「一七六二」刊『昨非集』巻上）や七絶「士新先生を懷ふ四首」（『昨非集』巻下）があるが、展墓の作としては、五古の「宇先生の墓に詣づ」詩（安永四年「一七七五」刊『小雲樓稿』巻二）がある。

伊人不復作、四尺傍迦維

伊の人復びは作らず、四尺迦維に傍す

身後誰能淑、世間竟見遺

身後誰か能く淑とせん、世間竟に遺れらる

猶懷丹旆路、空撫碧苔碑

猶ほ懷ふ丹旆の路、空しく撫す碧苔の碑

寂寞文章事、千秋君自知 寂寞たり文章の事、千秋君自知す

○伊人 この表現、古くは『詩経』秦風「蒹葭」に「所謂伊の人、水の一方に在り」と。○四尺 墓をいう。中唐・白居易の七律「崔二十四常侍を哭す」詩（『白氏文集』巻六十五）に「馬鬣新に封ぜらる四尺の墳」と。○迦維 もとは、シッタ太子の生誕地、カピラのこと。六朝梁・王巾「頭陀寺の碑文」（『文選』巻五十九）に「是を以て如来は迦維を見るに利しく、生を王室に託す」と。○丹旆 葬列で棺を先導する紅い旗。白居易の七絶「履道居三首」其二（『白氏文集』巻五十八）に「東里素帷猶未だ徹められざるに、南鄰丹旆又た新たに懸く」と。○君自知 この表現、中唐・張籍の五律「韓庶子に酬ゆ」詩に「寂寞誰か相問はん、祇応に君自知すべし」と。

東陽の作は、七絶「宇士新の墓に題す」（『詩鈔』巻七）。

俊才清德仰風流 俊才清德 風流を仰ぐ

博識精勤更少儔 博識精勤 更に儔少なり

命世文章垂不朽 命世の文章 垂れて朽ちず

明霞的礫照千秋 明霞的礫として千秋を照らす

○清德 高潔な品德。○風流 先人の遺風。○命世 世に名高い。

○垂不朽 後世まで伝えられて朽ちない。杜甫の五古「重表姪王琬の南海に使用するを送る」詩に「盛事垂れて朽ちず」と。○的礫 きらきらと輝くさま。疊韻語。

大典の作は明霞の文業が没後忘れさられるのを慨嘆するというようにむしろ諦観するような口調で詠じられているのに対して、東陽のそれは月並みとはいえ、文章の不朽を信じるという表現なされている点で、対照的である。

南川金溪の『閑散餘録』には、明霞はほとんど外出することがなかったため、「閉戸先生」と称されたというエピソードを載せ、原念斎の『先哲叢談』にもこれを引くが、〈閉戸〉の称は『蒙求』巻上の「孫敬閉戸」をふまえたもの。その墓は上京七本松通下立売上

の極楽寺にあった。菅原「高辻」家長（正徳五年「一七七五」→安永五年「一七七六」）に「処士明霞宇先生墓碣銘」（『事実文編』卷三十七）がある。

※宇野明霞と大典との関係については、小島文鼎『大典禪師』（昭和二年）の第三編第二章第二節「禪師と宇野士新」に詳しい。また中村真二郎『木村兼葭堂のサロン』第一章の第十八十九二十節参照。

ちなみに、東陽には展墓の作として七古「贈三位左中将楠公の墓に謁す」詩（『詩鈔』卷二）、五絶「楠公の墓を拝す」詩（『詩鈔』卷六）、「小楠公の墓」詩（同上）などの楠木正成・正行父子を詠じた詩がある外、七律「後藤年房の墓を弔ふ」詩（『詩鈔』卷四）、「山中幸盛の墓を弔ふ」（同上）、五絶「今井兼平の墓」（『詩鈔』卷六）や七絶「平公子敦盛の墓を過る二首」（『詩鈔』卷七）、「小督の墓を弔ふ」（同上）などが見える。就中とりわけ正成については寛政八年（一七九六）自序・文化十二年（一八一五）自跋の稿本『忠聖録』（その稿本の影印が昭和十年に大阪府立図書館から刊行されている）を編むほど、強い敬慕傾倒の念を抱いていたが、ここでは省略する。これら歴史上の人物とは別に、七絶に「烏石山人の草冢」と題する作（『詩鈔』卷七）があるのは、興味深い。

山人墨妙最超群 山人墨妙 最も群を超ゆ

書艸蘊崇幾歲勤 書艸蘊み崇むること 幾歳か勤むる

莫向冢頭輕觸石 冢頭に向て軽く石に触ること莫かれ

龍蛇蟄處恐生雲 龍蛇蟄する處 恐らくは雲を生ぜん

○墨妙 書にすぐれること。〈妙〉は、妙と同じ。盛唐・魯收「懷素上人草書歌」（『佩文齋詠物詩選』卷一七六）に「筆精墨妙誠に重んずるに堪ゆ」と。元・倪瓚の七絶「王叔明の画」詩（『倪雲林先生詩集』

卷六）に「筆精墨妙の王右軍」と。〈王右軍〉は、書聖と称された東

晋・王羲之。○書艸 下書き。草稿。〈艸〉は、草と通用。○蘊崇 集めて積み上げる。『左氏伝』隱公六年に「農夫の務めて草を去るが如くす焉。之を芟夷蘊崇し、其の本根を絶ち」云々とあり、杜預の注に「芟は刈なり。夷は殺なり。蘊は積なり。崇は聚なり」と。○向 文語の〈於〉と同じ。ただし、〈於〉は平声、〈向〉は仄声。○触石 西晋・左思「蜀都の賦」（『文選』卷四）に「石に触れて雲を吐く」と。○龍蛇蟄處 中唐・錢起の五排「常微君を哭す」詩に「山閉ちて龍蛇蟄し、林寒くして麋鹿群る」と。○生雲 中唐・姚合の五律「殷堯藩が山南に遊ぶを送る」詩（『三休詩』卷三）に「溪靜かにして雲 石に生ず」と。

松下烏石（元禄十一年「一六九八」→安永八年「一七七九」）は、名は辰、字は君岳。烏石山人・青蘿主人と号した。自らは源君岳・葛烏石とも称する。江戸の人で、能書家として知られ、明和ごろ上洛し、西本願寺に寄寓したという。皆川淇園に七律「烏石山人の七十の初度を寿ぐ」詩（『淇園詩集』卷二）があり、その詩は後掲、三村竹清「松下烏石」に示されているが、那波魯堂の『學問源流』に見える次の逸話は、それに取り上げられていないので、ここに挙げておく。

「其比源君烏石ハ初メ廣澤ノ書ヲ學ビタレトモ、是ヲ改メ文徵明ノ流ヲ學ビ、學者モ皆書家ナリト称セリ。江戸ニテ南郭及僧萬庵其他徂徠ノ社中ニ親シク交ハリ、其板行ノ書ノ序文ヲ書タル多シ。七才子詩集、小本ノ新刻ハ、全篇皆烏石ノ書タルナリ。个様ノコトニテ書名自然ニ高ク、其流江戸京都ニ行ハレタリ。此烏石江戸ヨリ亡命ノ如クシテ江州膳所ニ来リ、程ナク京都ニ出テ、西本願寺ノ傍ニ居リシ時、余一日其居ニ訪ヒシ中ニ、寒温ヲ序シテ後、爐中ノ釜ノ湯ヲ酌テ茶ヲ點シ出セルニ、釜中琤然ノ聲アルヲ怪シミ、若其湯ヲ煮ル聲ノ為ニ石ナド入レ置タルヤト尋レバ、即箸ヲ以テ挿ミ舉ゲタルヲ看レバ、甲州金慶長金ノ類三五顆アリ。湯ノ中ニ是ヲ置ザレバ其味宜シカラズ、平生

ノ癖ニ成テ已ムベカラスト云。又竈ノ下ヘモ時時伽羅ヲ少シ
ヅ、火ニ焚タルヨシ、是トテモ癖ニ成テ猶已ムコトヲ得スト云。
客ノ来リタルヲ看テ、其前ヘ薩州ノ粟盛^{アハモウ}ノ大壺ヲ出シ、口ノ封^フ
ヲ手ヲ以テ打チタ、キアケテ是ヲ勸ム。个様ノコト鮮ナカラズ。
亦是ヲ以テ餽^{トル}之^ツト云モノナリ。其人知ルベシ」。

○広沢 細井広沢（万治元年「一六五八」）享保二十年「一七三九」。

○文徵明 明代の文人（一四七〇）一五五九。○南郭 服部南郭（天和三年「一六八三」）宝暦九年「一七五九」。○万庵 臨済宗の僧（寛文六年「一六六六」）元文四年「一七三九」。○徂徠 荻生徂徠（寛文六年「一六六六」）享保十三年「一七七八」。○七才子詩集 元文二年刊『七才子詩』七巻のこと。〈七才子〉とは、いわゆる嘉靖の七子すなわち李樊龍・王世貞・梁有譽・謝榛・徐中行・呉国倫・宗臣のこと。○餽之 人の気を引く。『孟子』尽心下に「是れ言を以て之を餽なり」と。

もつとも、この条はすでに竹治貞夫氏の『近世阿波漢学史の研究』（風間書房、平成元年）第三章「那波魯堂」第二節「魯堂の遺著」に、「余一日」以下を引かれ、『学問源流』に挿入されている見聞録のなかで出色とされている。

※松下烏石については、三村竹清「松下烏石」（『近世能書伝』所収、二見書房、昭和十九年。後に『三村竹清集四』。青裳堂書店、昭和五十八年）参照。また久保仁平「京都に存する葛烏石の碑」（『史迹と美術』33—6、昭和三十八年）がある。

附(三) 女弟子—富岡吟松

女弟子と言え、清・袁枚（字は子才、号は簡斎。一七一六—一七九七）のそれが有名で、『随園女弟子詩選』が刊行されており、我が国で

は頼山陽の例もよく知られているが、東陽にも彼に師事する女性があった。それが次に紹介する富岡吟松である。

※中国における〈女弟子〉についての研究に、合山究『明清時代の女性と文学』（汲古書院、平成十八年）の「第五篇男性詩人と女弟子」がある。

富岡吟松（宝暦十二年「一七六二」）天保二年「一八三一」

初名は文、後に徳章、号は吟松。伊勢津の人。東陽より五歳下。『詩鈔』巻十に七絶「女弟子富岡文娘に贈る」詩がある。文政元年（一八一八）から三年の間の作。

三冬文史理家餘 三冬の文史 家を理むるの餘

微爾孤兒奈邈諸 爾微かりせば孤兒 邈諸を奈せん

形管風流殊不易 形管風流 殊に易からず

才名欲喚女相如 才名 喚ばんと欲す女相如と

○三冬文史 冬三か月の農事の暇に勉学すること。『漢書』東方朔伝に「上書して曰く、臣朔、少くして父母を失ひ、長じて兄嫂に養はる。年十二、書を学び、三冬文史用ふるに足る」と。○微爾 この表現、杜甫の五古「北征」詩に「爾微かりせば人尽く非ならん」と。〈微〉は、もし…がなかったならば、の意。古くは『論語』憲問篇に「管仲微かりせば」云々と。○邈諸 弱小であること。〈邈〉は藐と同じ。〈諸〉は語助辞。『左氏伝』僖公九年に「初め猷公、荀息をして奚齊に傳たらしむ。公疾む。之を召して曰く、是の藐諸孤を以て、辱く大夫に在り。其れ之を若何にする」と。○形管 紅い筆筒。古代の女史が用いた。『詩経』邶風「静女」に「静女其れ變たり、我に形管を貽る」と。ここでは、女流の意。○女相如 前漢の司馬相如は辞賦に優れていたので、詩文の才ある女性を女相如と称した。晩唐・馮贄「南部煙花記」（『重校説郭』弓第六十六）に隋の楊帝から合飲水果を賜った呉絳仙が紅牋に詩を書して謝意を示し

たところ、帝は「絳仙の才調は、女相如なり」と讃えたという話を載せる。

この詩には、「文娘は府下の商家の女、兄弟早に歿し、善く親に事へ蠱を幹し孤を撫す。家替るを得ず、業益々興隆し、称して中興と為す。真に女丈夫なり矣。少き自り学を好み、詩を能くし書を善くす、亦た以て女博士と為す可きなり」という自注が附されている。〈幹蠱〉は、事を取り仕切る意。もとは『易経』蠱卦・初六に「父の蠱を幹す、子有れば考も咎無し」とあるのから出た語。〈蠱〉は、（壊敗した）事の意。〈女博士〉の語については、三国魏・曹丕の甄皇后に、「九歳にして書を善くし、字を視れば輒識」った甄后が兄から針仕事を習え、学問して女博士になるつもりかと言われた逸話がある（『三国志』魏書・甄皇后伝の裴松之注に引く『魏書』）。

吟松がいかなる人であったかは、この自注からもあらかたは知られよう。女手ひとつで衰退していた家業の呉服店を切り盛りし商売繁盛をもたらしただけか、学問を好み詩をよくし書にも秀でた教養豊かな女性であったのである。

さらに、これより先、七絶に「富岡文娘が詩巻に題す」詩（『詩鈔』巻八）がある。

清心玉映美名芳 清心玉映 美名芳し

彤管風流藻思揚 彤管風流 藻思揚ぐ

許爾女中詩博士 爾に許す女中の詩博士

金針度与す繡鴛鴦 金針度与す繡鴛鴦

○清心玉映 心ばえが清らかで玉のように輝く。『世説新語』賢媛篇に「顧家の婦は清心玉映、自ら是れ閨房の秀なり」と。○彤管風流 前掲、「富岡文娘に贈る」詩にも同様の表現。○藻思 詩文の才。

○詩博士 清・吳偉業の七律「西冷の閨詠四首」其二に「紫府の高閑詩博士、青山の遺逸女尚書」と。○金針云々（金針）は、中唐・白居易に『白氏金針詩格』三巻の著（『宋史』藝文志八）があるとき

れたことから、作詩の秘訣をいう。（度与）は、人に与える、伝授する意。宋・惠洪の七絶「韓子蒼に与ふ六首」其四（『石門文字禪』巻十五）に「鴛鴦繡出するは看るに従教す、金針を把りて人に度与すること莫かれ」と。

「そなたは女性の詩博士といってもよいでしょう、作詩の秘訣を教授してから目をみはるようなよい詩を作られるようになりました」。この詩は、文化五年（一八〇八）の作。

同じく七絶に「文娘の春晚に和す」詩（『詩鈔』巻八）がある。

玉漏丁東曉夢醒 玉漏丁東 曉夢醒め

碧梅香撲插花瓶 碧梅 香は撲つ插花の瓶

春烟殘月西窓柳 春烟殘月 西窓の柳

勾引嬌鶯枕上聞 嬌鶯を勾引して枕上に聞く

○玉漏 水時計の美称。初唐・蘇味道「正月十五夜」詩に「金吾夜を禁ぜず、玉漏相催すこと莫かれ」と。○丁東 水時計の音。双声語。晚唐・温庭筠「織錦詞」に「丁東として細漏瓊瑟を侵し、影は高梧に転じて月初めて出づ」と。○碧梅 色鮮やかな梅花。『夜航詩話』巻四に「詩に碧字を用ゆ、多く鮮明の貌を称す。色を謂ふに非ざるなり」として、杜詩の二例を挙げ「其の清麗を謂ふなり。白雲白桃を碧雲碧桃と曰ふも、亦た此の義なり」と指摘。○嬌鶯 かわいらしいウグイス。杜甫の七絶「江畔に独り歩み花を尋ぬ七絶句」其六に「留連する戲蝶は時時に舞ひ、自在なる嬌鶯恰恰に啼く」と。○勾引 引き寄せる。杜甫の七古「風雨に舟前の落花を看て戯れに新句を為る」詩に「影は碧水に遭ひて潜に勾引せられ、風は紅花を妬み却つて倒吹す」と。

「明けがた夢から覚めてうつらうつらしていると、花瓶に挿した梅花の香に引き寄せられてウグイスが枕元で囀る」。

また吟松は詩会を催すこともあったようで、七絶「吟松女史、諸詞客を邀へて、雨中桜花を賞す」詩（『詩鈔』巻九）には、次のよう

に詠じられている。

春院無風静雨聲

好將觴咏暢幽情

夕陽似與詩人慰

略放花梢一片晴

春院風無く雨声静かなり

好し觴咏を將て幽情を暢ばさん

夕陽 詩人に慰めを与ふるに似たり

略は放つ花梢一片の晴

○春院〈院〉は、屋敷の中庭。○觴咏 酒を飲み詩を詠む。〈咏〉

は詠と同じ。下文の語釈参照。○幽情 心の奥底にある愛い。東晋・

王羲之「蘭亭の記」(『古文真宝』後集卷四)に「糸竹管絃の盛無しと

雖も、一觴一詠、亦た以て幽情を暢叙するに足れり」と。

「しとしと降る雨に静かに飲み詩を吟じ心のびやかにしている間に、夕陽から詩人への贈り物、梢の花を照らしてくれました」。

このほか五絶に「文娘の春興に和す」(『詩鈔』卷六)があるが、これは省略する。

吟松が東陽に教えを乞うようになったのは、文化四年(一八〇七)十一月に東陽が津に召還されて以降のことらしく、そのことはすでに津坂治男氏が説いておられるが、富岡の家業もその数年前には女史の奮闘努力のかいあって旧に倍する繁盛ぶりをみせるようになっていたようだ。その一端は皆川淇園の文化二年作「富岡氏藏集書画冊の首に書す」という一文からも窺える【資料編④】。

東陽は「書を善く」した吟松女史に、讃岐丸亀の人で京極家に仕え才女の誉れが高い井上通女(万治三年「一六〇」)元文三年(「一七三八」)の五律と和歌とを書き写させたことがあった。通女が江戸で仕えた藩主の母堂養性院が津の第三代藩主了義公高久の姉にあたり、弟に宛てた礼状として代作したのが伝わっていたのである(『文集』巻七、「留春巻に跋す」。ちなみに、通女については『夜航詩話』巻五にも取り上げるが、そこには女史についての言及はない。ところで、吟松女史が晩年意を尽くした事業があった。それは東陽の遺著の一つ『古詩大観』を上梓することである。

美濃大垣の女流詩人江馬細香(名は多保、裏とも表記。号は湘夢。天明七年「二七八七」)文久元年「一八六一」に七律「吟松女学士の七十を寿ぐ」詩(『湘夢遺稿』巻下)がある。(女学士)は、才学ある女性の称。

讀書千卷力堪支 讀書千卷 力 支ふるに堪ふ

當日曾逢傾厦時 當日曾て傾厦に逢ひし時

興業正聞因女手 業を興すは正に聞く女手に因ると

持家何必在男兒 家を持すは何ぞ必ずしも男兒に在らん

半生娛樂閑風月 半生の娛樂 閑風月

百歲脩齡小鶴龜 百歳の脩齡 小鶴龜

隔世關心事鐫梓 世を隔てて関心す鐫梓を事とするを

木蘭孔雀兩篇詩 木蘭孔雀 兩篇の詩

○讀書千卷 盛唐・岑參の七古「独孤漸と別れを道ふ長句、兼ねて

嚴八侍御に呈す」詩に「憐れむ君白面の一書生、讀書千卷未だ名を

成さず」と。○當日 そのかみ。○傾厦 ここは家業が傾く。○持

家 家業を維持する。『三国志』魏書・王昶伝に「未だ名を干め利

を要し、欲して厭はず、而して能く身を保ち家を持し、永く福祿を

全うする者有らざるなり」と。○閑風月 風流閑雅な世界。『詩人

玉屑』卷十九、龍洲道人の条に「筆下に閑風月を放開し、胸中に旧

甲兵を収斂す」と。○脩齡 長寿。○鶴龜 中国でも長寿の象徴と

して併称した例は、中唐・柳宗元「端午綰帛衣服を賜るを謝する表」

(『柳河東集』卷三十八)に「仙衣を被て鶴龜も寿を齊しくす」とみ

える。○隔世 時代を隔てる。○関心 気にかける。○鐫梓 上梓

する、刊行。

この詩には「近ごろ孔雀東南飛・木蘭二詩を刻する有り」という自注を附す。細香の師たる頼山陽は「両首、僕の常に喜び誦する所、吟松は何人ぞ。能く之を表章す、真に可人なり」との評語を加えている。(可人)は、才徳ある人物の意。

東陽には、長編叙事詩「孔雀東南飛行」(別名「焦仲卿の妻の為に作る」)

と「木蘭の辞」とに漢文による訓釈を施して上下二巻として『古詩大観』と名づけた著述があった。それぞれ巻末に後世の評論を載せるほか、「木蘭の辞」の場合は、唐人王惲『幽怪録』の「尼妙寂」（東陽は明示していないものの、明・陶宗儀輯『重校說郛』弓一一七に収録。なお、この「尼妙寂」は、中唐・牛僧孺『玄怪録』にも見えるが、もとは晩唐・李復言『続玄怪録』から出るものらしい）や『說郛』（『重校說郛』弓一二二）に見える中唐・李公佐「謝小娥伝」それに清・張潮編の『虞初新志』巻七に載せる徐仲光「奇女子伝」などを附し、清・趙翼（一七二七—一八二四）の『陔餘叢考』巻四十二、「女扮為男」の条から女性性が男装した例を挙げるのを引くなどしている。本書には天明戊申（八年）冬至除夜の自序があるものの、『陔餘叢考』は乾隆五十五年（八〇）ち寛政二年（一七九〇）の刊で、船載されたのが寛政十年であることからすれば、東陽が目録したのは、それよりもっと遅くなるはずで、折々に加筆したものと思われる。さらに下巻末には「追つて古詩大観の後に書す」という一文を附している。追書の内容については、「文化十一・十二年の江戸」の大田南畝の項で紹介したので、ここでは改めて取り上げないが、「孔雀東南飛行」が無理やり仲を引き裂かれた元夫婦の情死を主題にしたものだけに、一藩の文教に関わる立場からすれば、公刊するにあたっては「演劇院本（浄瑠璃や歌舞伎）の、鶉奔狐綏の行（男女間の乱れた行い）を叙し、風教に害有る者」に類するものではないこと明確にし、取り扱いを慎重にせざるを得ないとの判断が働いたと思われる。（鶉奔）は『詩経』鵲（鶉）「鶉之奔奔」、（狐綏）は衛風「有狐」をいう。

吟松は、師東陽から校正を委嘱されたこの著述を上梓するのに尽力したのである。文政十三年（一八三〇）に刊行をみた本書には、東陽が初代督学を務めた藩校有造館において後に第三代督学となる斎藤拙堂が文政九年作の後序を寄せており、その中で次のように記している。

津阪東陽先生、嘗て孔雀・木蘭の両篇を訓釈し、末に又た隋唐以降奇女子の木蘭に類する者を附載し、名づけて古詩大観と曰ふ。女弟子富岡氏、命を受け其の書を校す。先生没するに及び、貲を捐て此れを刻し、予に題言を索む。嗚呼劉氏、女子の貞を克くし、木蘭、大夫の節を以て、皆人倫の変に処す。奇と謂ふ可し矣。但だ劉氏の節、情に出で、所謂婦人吉なる者なり。木蘭の孝義憤發、巾幗を脱して鉄衣を著け、父に代はりて遠征するに至りては、則ち豪勇壘を幹し、婦女子を以て視る可からず、之を千古の奇と謂ふも可なり矣。宜なり先生特に意を此に致すや。（中略）又た窃かに疑ふ富岡氏、先生の命を受けて此の書を校する、女子の事に非ずと。諸を識る所の人に詢ふに、乃ち其の事業此れに止まらざるなり。氏、名は徳章、号は吟松。府下の大賈某の女なり。笄歳始めて書を読む。父母に請ふに処子を以て終はらんと。強いて後可さる。刻苦益々甚だし。吟詠筆札、鬱として閨中の秀と為る。年三十を逾へ、父母皆没す。二弟及び婦も亦た相繼いで逝く。其の家本と素封、三年、五喪連なり、才遺無きに至る。家産愈々益々墮つ。氏、慨然自ら奮ひて曰く、先鬼將に饑えんとす。優游自適の時に非ずと。自ら牙籌を操り、門戸に当たり、又た簪を擔ひ履を躡み、往来して上国に回易して、貲貨の出入自り米塩薪芻の細に至る、咸当を失せず。家僅数百指、帖然聽命、敢へて力を竭さざる莫し。養ふ所の義弟已に長じ、為に婦を娶り祀を承け、猶ほ看護十餘年、家愈々益々富み、父の時に倍す。乃ち一室に退棲し、復た旧業を修め、風流自ら娛しむ。未だ嘗て佗志有らず。或いは其の終身寡居、中道に非ざるを議す。然れども孝義器幹、先業を既に墮ちたるに振るひ、自ら一副の女丈夫と為る。木蘭の事無しと雖も、木蘭の節有り。先生の付託、人を得たりと謂ふ可し矣。

（後略）

○婦人吉 『易経』恒卦、六五に「其の徳を恒にして貞し。婦人は吉なれど、夫子は凶なり」と。○巾幘 女性の髪飾り。○鉄衣 よろい。○幹蠱 事に任ずる。○捐貲 資金を拠出する。○筭歳 十五歳。『礼記』内則に「(女子は)十有五年にして笄し、二十にして嫁す。故有れば二十三年にして嫁す」と。○処子 未婚の女性。○閨中秀 『世説新語』賢媛篇に「顧家の婦は清心玉映、自らは閨房の秀なり」と。『書言故事』巻二、女子類に閨秀の条がある。○素封 大資産家。『史記』貨殖列伝にみえる。○子遣 のこり。○先鬼将餒 跡継ぎがおらず、供え物をして祀る者がいないと先祖の霊は飢え苦しむことになる。○牙籌 ここは算盤のこと。『晋書』王戎伝に「戎、性興利を好み、毎日牙籌を執り、昼夜算計し、恒に足らざるが若し」と。○擔簦 かさを荷う。『史記』虞卿伝に「蹇を蹻み簦を擔ひて、趙の孝成王に説く」と。○上国 上方。京大坂。○回易 自国の産物を持つてゆき、先方のそれと交換して持ち帰ること。○薪芻 たきぎとまぐさ。○家僮 使用人。○帖然 従うさま。○看護 見守る。後見。○中道 道義にかなうこと。○器幹 仕事の能力。○一副 ひとそろい。ここは一箇の意に用いる。○女丈夫 女傑。

後掲の『三重先賢伝』によれば、吟松は自ら「嘯月亭吟松墓」と墓表の文字を書し、裏面に東陽の七絶「女弟子富岡文娘に贈る」詩とその自注とを刻させたという。それは、吟松にとって迂余曲折はあつても己れの志した文雅の道を生きた証であり、東陽から女弟子として認められたことは自らの誇りとするところであつた。

※富岡吟松については、浅野松洞『三重先賢伝』(昭和六年。後に東洋書院から昭和五十六年に復刊)参照。『津市史第三巻』(津市役所、昭和三十六年)第五章第十四節「富岡吟松と定礎」に見える吟松の記述はおおむね拙堂の文章によっている。さらに門玲子「江戸女流文学の発見」(藤原書店、平成十年)にも吟松への言及がある。

なお、井上通女のこととは、天囚西村時彦『学界乃偉人』(梁江堂、明治四十四年)に詳しいが、門氏の前掲書にも一章を割いて詳しく取り上げられている。また門氏には『湘夢遺稿』の訳注「江馬細香詩集『湘夢遺稿』」上下(訂正版、汲古書院、平成六年)ある。

おわりに

津阪東陽の交友について、「安永・天明期の京都」「文化十一・十二年の江戸」に引き続き、東陽の詩を中心としてこれを探ってきたが、そのなかで注目すべきは、東陽の生地平尾村に隣接する菰野の学問的風土である。「吾薦野八百五十年來多クノ学者ヲ出セル郷ナリ」とは、南川金溪の言(『閑散餘録』巻下)であるが、伊藤東涯に学んだ龍崎致斎が種を播き、南川金溪や久保三水が育ち、その薫陶を受けたのが東陽であり或いは平井澹所であつたわけである。菰野の知友先輩に対しては、在京時代、「久保希卿に与ふ」「南川士長に復す」「森子紀に報ず」「平井可大に答ふ」「横山士煥に答ふ」といった書簡(いずれも『文集』巻二)があり、その内容は文章論や学問上の疑義に関する事柄である。

なお、本文中には取り上げなかったが、在京時代に交友のあつた人物として、越後糸魚川の邑長(里正)松山茂肅(名は造。通称勇右衛門)がおり、『日本詩選』に一首を載せるが、東陽は彼から蜚気楼について聞いた話を「越海塩山記」(『文集』巻三)としてまとめている。七律に「寄せて越後の松山茂肅の七十の初度を寿す」詩(『詩鈔』巻四)ほかがある。その長子、猷(字は子楨、通称貞吉)は那波魯堂に師事し詩を北海に学んだ。また聞き書きといえは、「水戸の赤水翁、余が為に之を語る」として磐城四倉浦(現、福島県いわき市)の不知火に似た現象を記した「赤井龍燈記」(『文集』巻三)がある。赤水は、

地理学者の長久保赤水（名は玄珠、字は子玉。通称源五兵衛。享保二年「一七一七」〜享和元年「一八〇一」）。東陽より四十歳上。安永六年（一七七七）江戸の水戸藩邸に仕える以前、安永三年から四年にかけて一年ほど京都に逗留したことがある。

さらに交友について論ずるならば、当然ながら津藩の人々に言及すべきであろう。ただ今回は紙幅の都合もあり、これを取り上げなかった。東陽の人間関係を知る上では必要であっても、詩として読んだ際、興味を引くような作品はさほど多くない。それに関連して、本稿ならびに前々稿・前稿で紹介した東陽の詩のなかには重複表現や月並みな言い方が目につき、格段すぐれたものは少なく、詩人としての高い文学的評価を与えられないかも知れない。まさに「夫れ詩に別材有り、書に關するに非ざるなり。詩に別趣有り、理に關するに非ざるなり」（南宋・嚴羽『滄浪詩話』詩弁）である。東陽自身、詩を作るのは好きではあったが、もとより詩人として遇せられるのを望んでいたわけではなく、あくまで儒者としての餘技にすぎない。とはいえ、「伊州雜賦、津城の知友に寄す二十首」（『詩鈔』卷八）や「津城雜詩三十首」（『詩鈔』卷九）のような七絶の風俗詩のなかには、その自注と相まって興味深い内容の作品が存するし、また泥人形を作って遊ぶ我が子の姿や自宅に遊びに来た隣家の猫などを詠出した「春を遣る十首」（『詩鈔』卷八）それに「夜、児に句読を授く」詩（『詩鈔』卷八）などさりげない日常生活の一齣を描写した宋詩風の七絶には佳品もあることを一言申し添えておく。

【資料篇①】

「立恭先生之碑」

天之賦才也、或穎敏或敦樸、而穎敏者、中途而易摧、否則必驚高遠失其實矣。唯其敦樸誠實、能自勉勵、才資益發、修成其業者、吾見

*

*

*

立恭先生焉。先生諱世賢、字希卿、一字幸助。世籍於勢州菰野管下

黒田村。以其居臨三重川、號三水。考定軒府君諱可久、嘗遊于洛、

師事蘭嶠先生。妣久保氏。有二男、先生其次子也。本姓伊藤、奉外

祖泰巖君祀、遂冒其姓。幼而不凡、受教膝下、稍長就大夫龍崎子而

學。既冠來吾藩、事三角先師、親炙多年、學業大進。明和紀元、師

奉君命、巡觀攝河州古戰場、先生從焉。會朝鮮聘使維舟於浪華津。

先生與同友長良子軌行見制述官南秋月及成元金三書記。時先生未更

姓、韓客或疑仁齋先生族、故筆語詰問其學悖新安先生、答以非其族、

而奉其教者。且曰、子讀其書、未得其旨、宜細玩便得。詞鋒峻勵、

客不能復詰。時年二十三。己丑還郷、命為里正、移吉澤村。日與

同志講經論史、有暇必來就先師質疑、歲々以為常。天明癸卯、為

大里正、明年擢為稅官焉、賜祿若干。所職尤劇、尚且教導士庶不忘。

文化乙丑、進爵加祿。丙寅、嬰疾辭職不允。戊辰、從所乞。壬申

五月十日卒于家。享年七十一。葬江村蓮行寺。私諡曰立恭先生。配

伊東氏。子男孝恪嗣家、好文辭善書。女二人、一夭一適桑名田中某、

亦先死。先生為人謹厚、廉而有信。其於學也、崇信古學紹述二先生

之德、服膺先師之說、平素口其盛恩而不置。在日書牘片言字紙、謹

函韞之。其作文也、宗八大家、旁玩宋學士集。詩非其所好、不多作。

晚年纂集論孟古義聲援十二卷、備參閱云。余於先生、齡不相若、居

不相傍。雖問侍先師、童子隅坐、何言。然先生特延余論道、未嘗以

長加。余蒙先生之知、殊渥也。孝恪錄狀乞銘墓於先師、孫允倩病痺、

不能事筆硯、因託余記事且銘。銘曰、

冠山之幽 三水之瀏 鬱々粼々 維其有人 學尚古義 名播異域

士庶稱廉 生徒受澤 事師以誠 有子克家 銘此于石 不朽不瑕

津藩文學 丹比世業謹撰子 孝恪建

（天の才を賦するや、或いは穎敏、或いは敦樸、而して穎敏なる者は、中途にして摧け易し。否らざれば則ち必ず高遠其の実を失するに驚く矣。唯だ其れ敦樸誠實、能く自ら勉勵して、才資益ます発し、其の業を修成

する者、吾れ立恭先生を見る焉。先生諱は世賢、字は希卿、一の字は幸助。世よ勢州菰野管下の黒田村に籍す。其の居三重川に臨むを以て、三水と号す。考は定軒府君、諱は可久、嘗て洛に遊び、蘭嶋先生に師事す。妣は久保氏。二男有り、先生は其の次子なり。本姓は伊藤、外祖泰巖君の祀を奉じ、遂に其の姓を冒す。幼にして不凡して、教えを膝下に受く。稍長じて大夫龍崎子に就いて学ぶ。既に冠して吾が藩に来たり、三角先師に事へ、親炙すること多年、学業大いに進む。明和紀元「一七六四」、師、君命を奉じて摂河州の古戦場を巡視し、先生焉に従ふ。會たま朝鮮聘使舟を浪華津に維ぐ。先生、同友の長良子軌と与に行きて制述官南秋月及び成・元・金三書記に見ゆ。時に先生未だ姓を更めず、韓客或いは仁齋先生の族かと疑ひ、故に筆語して其の学の新安先生に悖るを詰問す。答ふるに其の族に非ずして、其の教へを学ぶ者を以てす。且つ曰く、子其の書を読む、未だ其の旨を得ず、宜しく細玩すべし、便ち得ん。詞鋒峻勵、客復た詰る能はず。時年に二十三。己丑「明和六年、一七五九」郷に還り、命じられて里正と為り、吉澤村に移る。日比同志と与に経を講じ史を論じ、暇有れば必ず来たりて先師に就いて質疑し、歳々以て常と為す。天明癸卯「三年、一七八三」、大里正と為る、明年擢んでられて税官と為り、禄若干を賜ふ。職とする所尤も劇、尚ほ且つ士庶を教導して怠らず。文化乙丑「二年、一八〇五」、爵を進め禄を加へらる。丙寅「文化三年」、疾に嬰り職を辞するも允されず。戊辰「五年、一八〇八」、乞ふ所に従ふ。壬申「文化九年、一八一二」五月十一日家に卒す。享年七十一。江村の蓮行寺に葬る。私に諡して立恭先生と曰ふ。配は伊東氏。子男孝恪家を嗣ぎ、文辞を好み書を善くす。女二人、一は天し一は桑名の田中某に適ぐも、亦た先んじて死す。先生人と為り謹厚、廉にして信有り。其の学に於けるや、古学・紹述二先生の徳を崇信し、先師の説を服膺して、平素其の盛恩を口にして置かず。在りし日、書牘片言の字紙、謹んで之を函韞す。其の文を作るや、八大家を宗とし、旁ら宋学士集を玩す。詩は其の好む所に非ず、多くは作らず。晩年に論孟

古義聲援十二巻を纂集して、参閱に備ふと云ふ。余の先生に於ける、齡は相若かず、居は相傍はず。先師に問待すと雖も、童子隅坐す、何をか言はん。然れども先生特に余を延いて道を論じ、未だ嘗て長を以て加へず。余、先生の知を蒙る、殊に渥きなり。孝恪の状に縁つて墓に銘するを先師に乞ふ。孫允倩、瘵を病み、筆硯を事とする能はず、因て余に託して事を記し且つ銘せしむ。銘に曰く、冠山の幽、三水の濶。鬱々々々、維れ其人有り。学は古義を尚び、名は異域に播く。士庶廉を称し、生徒沢を受く。師に事ふるに誠を以てし、子有り家を克くす。此れ石に銘し、朽ちず取せず。

○穎敏 才知が優れる。○敦樸 質朴。○高遠失其実 後漢・王充「論衡」説日篇に「平地従り泰山の巔を望めば、鶴は鳥の如く、鳥は爵の如し。泰山の高遠なる、物の小大其の実を失す」と。○三重川 菰野を流れる三瀧川のことであろう。○考・妣 『礼記』曲礼下に「生けるに父と曰ひ、母と曰ひ、妻と曰ふ。死せるに考と曰ひ、妣と曰ひ、嬪と曰ふ」と。○府君 亡父の尊称。○蘭嶋先生 伊藤仁齋の五男、蘭嶋（名は長堅。元禄七年「一六九四」～安永七年「一七七六」）のこと。○膝下 『孝経』孝治章に「故に親しきは膝下に生ず」と。○大夫龍崎子 前出、龍崎致斎のこと。その伝は前掲『菰野町史』参照。○冠 『礼記』曲礼上に「二十を弱と曰ひ、冠す」と。○三角先師 前出、奥田三角のこと。梅原三千主編『津市文教史要』（昭和十三年）参照。○親炙 直に接して親しく教えを受ける（『孟子』尽心下）。○摂河州 摂津・河内。○朝鮮聘使 宝暦十四年（明和元年）、將軍家治襲職祝賀のため来日した朝鮮通信使。○浪華津 大坂。○長良子軌 津藩の儒医、長良承芳（字は子軌、通称洞彦、号は顧斎。延享三年「一七四六」～文化三年「一八〇六」）のこと。東陽に五排「長良士軌の耳順の寿詞」（『詩鈔』卷三）、七絶「長良士軌道に贈る五首」（『詩鈔』卷八）などがあり、其の自注に「士軌、京に遊びし日、博物人を驚かし、江北海は呼びて伊勢の張華と為す。家は蔵書に富み、官庫に譲らず」という。また斎

藤拙堂に「顧齋先生墓碣銘」(『拙堂文集』巻五)がある。前掲『津市文教史要』も参照。拙堂の墓碣銘に「朝鮮聘使都に入るに会し、先生之に見ゆ。詩を賦し其の文学南秋月に贈るに、秋月絶倒す云々という。○南秋月 制述官の南玉。○成元金三書記 成大中(龍淵)・元重挙(玄川)・金仁謙(退石)。○孝恪 字は士愿。通称幸助。蘭所と号す(安永五年「二七七六」)天保七年「二八三八」。○仁齋先生 伊藤仁齋(名は維嶺。寛永四年「二六二七」)宝永二年「二七〇五」。朱子学を非とし、古義学を唱えた。諡は古学先生。○新安先生 南宋・朱熹のこと。『隠居通議』巻一に「南宋・葉適の」水心文集中に朱公文を称して或いは新安先生朱公と曰ひ、或いは朱公元晦と曰ふ」と。○里正 庄屋。○古学紹述二先生 伊藤仁齋とその長子、東涯。○函韞 文箱に収める。○八大家 唐宋の八人のすぐれた文章家。唐の韓愈・柳宗元、北宋の欧阳脩・蘇洵・蘇軾・蘇轍・曾鞏・王安石をいう。明・茅坤に『唐宋八家文鈔』一六四巻、清・沈德潜に『唐宋八家文読本』三〇巻などがある。○宋学士集 明・宋濂(字は景濂)の集。○童子隅坐『礼記』檀弓上に曾子(曾参)が重篤の病床にあつたとき、「童子隅に坐して燭を執る」。その童子の一言によって大夫用の華美な簀を身分不相応なものとして取り替えさせた話がみえる。

○冠山 鈴鹿山系の鎌ヶ岳。○瀏 水の清いさま。『詩経』鄭風「溱溱」に「瀏として其れ清し矣」と。○粼粼 清く澄んださま。『詩経』唐風「揚之水」に「揚れるの水、白石粼粼たり」とあり、毛伝に「粼粼は清徹なり」と。○克家 よく家を治める。『易経』蒙卦・九二に「子、家を克くす」と。『書言故事』巻二、子孫類に「人の子有るを称して家を克くする子有りと曰ふ」と。

なお、久保希卿については江村北海の安永八年(二七七九)刊『日本詩選続編』に詩一首を載せ、作者姓名に「藤世賢 字は希卿、久保幸助と称す。伊勢孤野の支邑吉澤の人」という。

また、この碑文に言及する朝鮮通信使の南秋月らについては、南

川金溪『金溪雜話』巻中から関連する記事を抜き書きしておく。【資料篇②】からもわかるように、金溪も彼らと筆談を交わしている。

学士秋月ハサノミ大ナル男ニハ非レドモ、鬚多ク眼中ヤ、スルドニシテ声音キビシク、スベテ丈夫ナル男也。家寒素ナルヨシライヘリ。経学文章、往年ノ諸学士ニ比スレバ大ニ富リトミユ。見識モ尤確乎トシテ、謙遜ヲ先トスレドモ、亦容易ニ人ヲ許サバリキ。正使ノ書記龍淵ハ予ト同年ニテ、特ニ親メリ。容貌美麗ニテ衛价ガ風アリ。鬚ナク声温也。穎敏ノオハ学士三書記ノ中第二ト見ヘタリ。又書ヲ巧ニシテ、子昂ガ法ヲ能写セリ。五歳ノ男一人アリト自ライヘリ。副使ノ書記玄川ハ大ナル男也。鬚ハ秋月ヨリ寡シ。豪俊ノオハナケレドモ、篤行質素ナル人也。人ヲ待スルコトモ忠厚餘リアリ。従事ノ書記退石ハ年五十九歳ナリ。五十八ニシテ進士ニ挙ラレタリトイヘリ。漢ノ馮唐ガ老年マデ郎署ニ有シモ同ジ比ナラン。コノ人ハ性多病ナリ。詩ハ巧ナレドモ、文章ハ巧ナラズ。コレヲ要スルニ、四人トモニ風流ニシテ醞藉アリ。吾邦ノ学者ノ如キ、圭角ヲ先ニシテ優游ノ氣象ニ乏シキモノニ非ズ。予相者ノ語ルヤキ、シニ、龍淵ハ大ニ貴相アリ、前途頼シキ人也トイヘリ。

※碑文は、志水氏の著書に翻刻されているのによつたが、幾つか欠字(□で囲んだ箇所)や誤字がある。欠字の箇所は『孤野町史』によつて補つた。ただし、町史では「崇信古學紹述二先生之德」を「古学を崇信し二先生の德を紹述して」と訓じており、それには従わない。久保三水の長子、蘭所については前記の両著に詳しい。

【資料篇②】

「金溪南川先生之碑」

君諱維遷、字士長、一字文璞、號金溪。南川氏、勢州孤野人。家世業農圃、以故君之幼時、家無一策子可讀、又無父兄親族訓導勸學、

而君好文學之業、蓋出於其天資云。於此鄉邑駭異、目爲神童。既而稍長、則請求多方、極力讀書、又自請受學於龍崎先生、穎悟強記、其業夙小成矣。到此親戚相勸、使君爲醫業、乃西遊京師、就堀玄孝氏、攻軒岐之書。居數年、悉得其秘蘊、而經史文詩之業、亦復大成矣。於是還勢州、下帷桑名、學徒麇集。宝曆癸未、遊浪華。會韓使來聘、君與之唱和筆語、俄頃數百千言、詞翰之美、名播海外。而菰野公子、時方崇儒學、乃時時延請以資講學焉。明和中、君遂積褐菰野。後又加秩、兼掌醫藥事。數奏神功、士庶受其業乞診治者、日夜輻輳其門。安永癸亥、祇役東都、勸學餘暇、與都下諸名士締交往來、名聲益煥發矣。君資質多病、辛丑之歲丁内艱、衰敗之餘、病大發焉。竟以九月十四日卒。享年五十。葬于大龜山金剛禪寺。前配加藤氏、生二男。長子守箕裘。次配矢田氏、生一女。君該博群書、最善詩詞。又好研究本朝典故、家家秘策、多方購求焉。又於醫書、尤多所發明云。銘曰、

釋褐桑梓 書錦之榮 博學宏詞 人欽其名 龜山之側 茲保厥精
金剛不壞 箕裘生生

天明五年乙巳秋九月 北海江村綬撰

(君諱は維遷、字は士長、一の字は文璞、金溪と号す。南川氏、勢州菰野の人。家世農圃を業とす、故を以て君の幼時、家に一策子の読む可き無く、又た父兄親族の訓導勸学無し。而れども君は文学の業を好む、蓋し其の天資に出づと云ふ。此に於いて郷邑駭異し、目して神童と爲す。既にして稍長すれば、則ち多方に求めんことを請ひ、力を極めて読書し、又た自ら学を龍崎先生に受けんことを請ふ。穎悟強記、其の業夙に小成す矣。此に到つて親戚相勸め、君をして医業を爲めしむ。乃ち西のかた京師に遊び、堀玄孝氏に就き、軒岐の書を攻む。居ること数年、悉く其の秘蘊を得、而して經史文詩の業、亦た復た大成す矣。是に於いて勢州に還り、帷を桑名に下す。学徒麇集す。宝曆癸未(十三年「二七六三」)、浪華に遊ぶ。会たま韓使來聘す、君之と唱和筆語し、俄頃にして数百千言、

詞翰の美、名は海外に播す。而して菰野の公子、時に方儒学を崇び、乃ち時時延請して、以て講学に資す焉。明和(二七六四〜七二)中、君遂に褐を菰野に積く。後に又た秩を加へられ、兼ねて医業の事を掌る。士庶の其の業を受け診治を乞ふ者、日夜其の門に輻輳す。安永己亥(八年「一七七九」)、東都に祇役す。勸学の餘暇、都下の諸名士と締交往來し、名声益ます煥發す矣。君は資質多病、辛丑(天明元年「一七八二」)の歳、内艱に丁り、衰敗之餘、病大いに発す焉。竟に九月十四日を以て卒す。享年五十。大龜山金剛禪寺に葬る。前配加藤氏、二男を生む。長子箕裘を守る。次配矢田氏、一女を生む。君は群書に該博たり、最も詩詞を善くす。又た好んで本朝の典故を研究す、家家の秘策、多方購求す焉。又た医書に於いて、尤も發明する所多しと云ふ。銘に曰く、褐を桑梓に積く、屋錦の榮 博学宏詞 人其の名を欽む 龜山の側 茲に厥の精を保つ 金剛不壞 箕裘生生)

○家世 家代々。○策子 書冊。綴本。○郷邑 むらざと。○龍崎先生 前出の龍崎致斎。○穎悟強記 聡明で記憶力が強い。○小成 ひととおり成就する。『礼記』学記篇に見える。○堀玄孝 堀元厚(名は貞忠、号は北渚。宝曆四年「一七五四」没)のこと。伊勢松阪の本居宣長が在京中に医書を学んだ。○軒岐書 医学書。(軒)は黄帝軒轅氏(岐)は岐伯で、医術の祖。○秘蘊 秘伝。○下帷 塾を開いて教授する。『漢書』董仲舒伝に「帷を下して講誦す」と。○麇集 群がり集まる。○韓使來聘 前掲、「立恭先生の碑」に見える「朝鮮聘使」。その語釈参照。○菰野公子 土方義法(通称数馬。寛保三年「一七四三」〜文化元年「一八〇四」)のこと。東陽に七絶「菰野公子数馬君に贈り奉る」詩(『詩鈔』巻七)がある。○延請 招聘。○積褐 初めて仕官すること。○輻輳 四方から集まる。○締交 交わりをむすぶ。○丁内艱 母の死にあう。○衰敗(氣力体力が)衰え萎える。○長子 南川蔭山(名は志道、字は伯寧。通称文蔵。明和八年「一七七二」〜天保四年「一八三三」)のこと。伊勢長島で十時梅屋に従学した。○箕裘 父祖の業を受け継ぐこと。

『札記』学記篇に「良冶の子は必ず裘を為るを学び、良弓の子は必ず箕を為るを学ぶ」と。○桑梓 故郷。○昼錦 故郷に錦を飾る。『漢書』項籍伝の「富貴にして故郷に帰らざるは、錦を衣て夜行くが如し」から出た語。○金剛不壊 『法苑珠林』卷七十三に「仏身は金剛不壊」と。○生生 代々。いつまでも。

※南川金溪については、「文化十一・十二年の江戸」の平井澹所の条に参考文献を挙げておいた。そこに示した岩田隆氏の諸論考は、本文中に挙げた『宣長学論攷―本居宣長とその周辺』に収録されている。また土方数馬・南川蔣山については、前掲『孤野町史』参照。

なお、『日本詩選』に詩三首を載せ、作者姓名に「南維遷 字は士長、号は金溪。俗称南川文璞。伊勢孤野の人。今、本府の教授為り」という。また金溪の京都遊学中の詩友に大江玄圃（享保十四年「一二二九」〔寛政六年「一七九四」〕がおり、明和六年刊の『玄圃集』には、七古「伊勢海歌、南士長が郷に還るを送る」、五律「南士長が薦野公子の聘に応ずるを聞き、此の寄有り」詩がある。

【資料篇③】

「逸史糾謬序」（『文集』卷一）

猪飼文卿著逸史糾謬、求序於余、時懼恙伏枕、不能操觚。然其筆削之勤、不可不以贊一辭也。昔宋呉元美作呉鎮新唐書糾謬序曰、唐人稱杜征南顏秘書為左邱明班孟堅忠臣。今觀其推廣發明二子、信有功矣。至班左語意乖戾處、往々曲為說、以會附之。安在其為忠臣也。今呉君於歐宋大手筆、乃能糾謬纂誤、力裨前闕、殆晏子所謂獻可替否、和而不同者、此其忠何如哉。文卿之於逸史、亦誠善忠告救過、使同關子有知、則亦拜昌言於地下矣。

（猪飼文卿、逸史糾謬を著し、序を余に求む。時に恙に罹つて枕に伏し、觚を操る能はず。然れども其の筆削の勤、以て一辭を賛せざる可からざるなり。昔宋の呉元美、呉鎮が新唐書糾謬の序を作りて曰く、唐人、杜

征南・顏秘書を称して左邱明・班孟堅の忠臣と為す。今、其の二子を推廣發明するを觀るに、信に功有り矣。班・左の語意乖戾する處に至つては、往々にして曲げて説を為し、以て之を會附す。安んぞ其れ忠臣為るに在らんや。今、呉君の欧宋の大手筆に於ける、乃ち能く纂誤を糾謬し、力めて前闕を裨し、殆んど晏子の所謂獻可替否、和して同ぜざる者、此れ其の忠何如ぞや、と。文卿の逸史に於ける、亦た誠に善く忠告救過す。同関子をして知ること有らしめば、則ち亦た昌言を地下に拝せん矣）

○懼恙 病にかかる。○操觚 書写用の四角い木札を執る。転じて筆をとる。西晋・陸機「文の賦」（『文選』卷十七）に「或いは觚を操りて以て率爾、或いは毫を含んで邈然たり」とあり、李善注に「觚は木の方なる者。古人之を用いて以て書す。猶ほ今の簡のごとし」と。○贊一辭 一言添える。『史記』孔子世家に「筆すべきは則ち筆し、削るべきは則ち削る。子夏の徒、一字も贊する能はず」と。○呉元美 字は仲実。宣和六年の進士。○呉鎮 字は廷珍、成都の人。○新唐書糾謬 二十卷。『知不足齋叢書』所収。○新唐書糾謬序 ちなみに、清・顧炎武『日知錄』卷二十七、漢人注經の条にも、この序を引き、「卓識の言と謂ふ可し」と評している。○唐人云々 『新唐書』卷一九八、顏師古伝に「時人、杜征南・顏秘書を称して左丘明・班孟堅の忠臣と為す」と。（杜征南）は、西晋・杜預のこと。死後、征南大將軍を追贈されたので、杜征南と称する。『春秋左氏伝』の注「左氏経伝集解」がある。伝は『晋書』卷三十四。『顏秘書』は、初唐の顏師古のこと。最終官位は秘書監。『漢書』の注で知られる。伝は『旧唐書』卷七三および先に挙げた『新唐書』卷一九八。（左丘明）は、『春秋左氏伝』の著者。『班孟堅』は、後漢・班固（字は孟堅、『漢書』の著者。○会附 原文は『附会』に作る。○欧宋 北宋の欧阳脩と宋祁。○大手筆（詔勅など重要な）文章のすぐれた作り手。白居易「馮宿を兵部郎中知制誥に除する制」（『白氏文集』卷三十一）に「吾れ聞く武德より開元中に暨びて、顏師古・陳叔達・蘇頌の輩有り、大手筆と称せらる」と。○献

可賛否『左氏伝』昭公二十二年に齊の晏子の言葉として「君の可と謂ふ所にして否有らば、臣其の否を献じて以て其の可を成し、君の否と謂ふ所にして可有らば、臣其の可を献じて、以て其の否を去る」と。○和而不同『論語』子路篇に「君子は和して同ぜず、小人は同じて和せず」と。○同関子 中井竹山の別号。三国蜀の関羽と誕生日を同じくするというので、つけられた。○昌言 ためになる真つ当な言葉。『尚書』大禹謨に「禹、昌言を拝して曰く、兪しやう」と。

【資料篇④】

「富岡氏藏集書画冊の首に書す」(『淇園文集』巻六)
勢洞津閨秀富岡氏、余素聞其名久矣。乙丑春三月、來京謁予、出二冊子、乞予作畫、且請異日書其冊首時者、攜之還去。其冬十一月、以書寄冊子、請果前諾。富岡氏年可四十一、能爲詩文、其書倣趙吳興、並皆可觀也。其來謁時、伏水米生在坐、舊與二相識。問曰、君少時矢終身不嫁、今尚守寡否。答曰、妾雖女流、寧有不守宿志乎。米嘆嗟久之。又聞其父母歿後、身嘗又爲其家營之事。數往來京攝閨、而今乃稍得聞焉云。嗟、以一婦人、力能支其家、勞勩塵事、而其心未嘗失其文雅、而娛玩書畫者、雖搢紳君子、或有愧焉。於乎亦偉矣。

(勢洞津の閨秀富岡氏、余素と其の名を聞くこと久し矣。乙丑の春三月、京に來たりて予に謁す。一冊子を出し、予に画を作るを乞ふ、且つ異日其の冊首に書せんことを請ふ時は之を携へ還り去る。其の冬十一月、書を以て冊子を寄せ、前諾を果たさんことを請ふ。富岡氏年四十可り、能く詩文を爲り、其の書趙吳興に倣ひ、並に皆観る可きなり。其の來謁せし時、伏水の米生坐在在り、旧と与に相識る。問ひて曰く、君少時終身嫁せずと矢ふ、今尚ほ寡を守るや否やと。答へて曰く、妾、女流と雖も、寧ぞ宿志を守らざる有らんやと。米嘆嗟之を久しくす。又た聞く其の父

母歿後、身嘗て又た其の家當生の事を爲す。数しば京摂の間に往來し、而今乃ち稍間を得と云ふ。嗟、一婦人を以て、力能く其の家を支へ、塵事に勞勩し、而して其の心未だ嘗て其の文雅を失はずして書画を娛玩する者、搢紳君子と雖も、或いは愧づる有らん焉。於乎亦た偉なり矣。

○洞津 安濃津。○乙丑 文化二年(一八〇五)。當時、淇園72歳、吟松44歳。○趙吳興 元・趙孟頫(字は子昂。一二五四―一三二三)のこと。吳興すなわち湖州(浙江省)の人で、書画にすぐれ松雪道人・水晶宮道人と号した。『松雪齋集』がある。伝は『元史』巻一二二。○伏水米生 伏見の商人で皆川淇園の弟子、米谷金城(名は寅、字は子虎。宝暦八年「一七五八」―文政七年「一八二四」)のこと。松本愚山に「金城米谷先生墓誌銘」(『事実文編』巻五十二)がある。○營生 生計を営む。○勞勩 骨折る。苦勞する。○搢紳君子 高貴なお方。〈搢紳〉は笏を大帶(紳)にはさむ意で、大官をいう。○於乎 感嘆の辞。嗚呼と同じ。

* *

* *

* *

前稿補訂

「津阪東陽『寿壙銘』訳注稿」(『文化情報学部紀要』第十四巻)

161頁上段8行目 恩田仲壬↓恩田仲任 仲壬↓仲任

161頁上段10行目 恩田仲壬↓恩田仲任

161頁上段12行目 仲壬の実兄が↓仲任の実兄が

「覚書…津阪東陽とその交友(一)―安永・天明期の京都―」(『文化情報学部紀要』第十五巻)

196頁下段1行目 西山拙斎(享保二十年「一九三五」―寛政十年「二七九八」)

↓西山拙斎(享保二十年「一七三五」―寛政十年「二七九八」)

198頁下段7行目 ○小倉柳の条に追加。ちなみに、六如『葛原詩話』巻二に

「柳」の条あり、「我が国伏見ノ巨椋湖 嵯峨ノ広沢・大沢ノ類、ミナ柳ト称スベシ」云々と。

200頁上段11行目 柴野栗山(享保十九年「一八三四」―文化四年「一八〇七」)

↓柴野栗山(享保十九年「二七三四」)文化四年「二八〇七」
 209 頁下段12行目 迷深重若斯耶。↓其迷深重若斯耶。
 209 頁下段24行目 迷ひ深重斯の若き耶↓其の迷ひ深重斯の若き耶
 「覺書」津阪東陽とその交友(二)文化十一・十二年の江戸」(「文化情報学部紀要」第十六卷)

179 頁下段23行目 大沼沈山↓大沼枕山
 189 頁上段9行目 誰と与と↓誰と与に
 212 頁上段20行目 明・宋濂↓明・宋濂
 212 頁上段20行目 字は景濂↓字は景濂
 216 頁下段16行目 濱田儀一郎↓濱田義一郎
 216 頁下段19行目 濱田儀一郎↓濱田義一郎
 217 頁上段5行目 寐ぬるや寐ねずや↓寐ぬるや寐ねざるや
 219 頁上段16行目 東陽と茶山と出会いを↓東陽と茶山との出会い
 222 頁上段28行目 京に出て三四過ごし、↓京に出て三四年過ごし、
 227 頁上段22行目 遣門生來治喪↓遣門生來治喪
 「津阪東陽とその交友(二)」の誤記については、林田愼之助・高橋良行・杉下元明の各氏から懇切な御教示を得た。記して感謝する。

(二〇一七・一〇・九初稿)
 (二〇一七・一一・二九補筆)

にのみや・としひろ／文化情報学部教授
 E-mail: ninomiya@sugiyama-u.ac.jp